博　多 63

— 博多遺跡群第 97 次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第558集

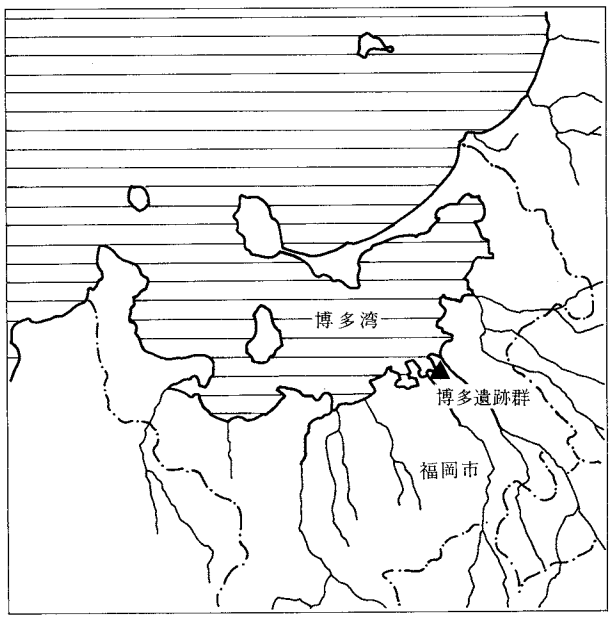
1 9 9 8

福 岡 市 教 育 委 員 会

博　多 63

— 博多遺跡群第 97 次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第558集



遺跡調査番号　9603
遺跡略号　ＨＫＴ－97

1998

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化の門戸として栄えた「博多」の発掘調査は近年の都心部の再開発に伴い、現在までに100次を越え、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書は、共同住宅建設に伴って実施された第97次調査の概要を報告するものであります。発掘調査では、弥生時代から中世・近世にいたるさまざまな遺構・遺物を検出することができました。なかでも、13世紀から14世紀にかけての銅製品の鋳造工房群の検出は、中世都市「博多」における手工業のあり方や都市の消費生活を考える上での貴重な発見となりました。そのほか、最下層で検出された古墳時代初めごろの集落では国内各地から運ばれた土器が出土しており、「博多」が古くから港町として開けていたことを示すなど、大変興味深い成果を収めています。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解を深めて行く上で広く活用されますとともに、学術研究の分野でも寄与することができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力を頂いた株式会社ライフエステートの方々をはじめとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第であります。

平成10年3月31日
福岡市教育委員会
教育長 町 田 英 俊

例　　言

1、本書は、福岡市教育委員会が、平成8(1996)年4月3日から同年7月25日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設に伴う博多遺跡群第97次調査の概要の報告書である。

2、調査で検出した遺構は、その性格に関わらず、原則として発見順に連番号を与えた。なお、遺構検出面を3面としたので、第1面検出の遺構は3桁の、第2面検出の遺構は1001～の、第3面は2001～の番号を与えて区別している。ただし間に欠番もある。また、井戸などの深い遺構については、完掘を次の遺構面の調査時に持ち越すことが多かったため、同一の遺構で各面ごとに番号を付した場合がある。これは報告中で整理している。報告では、遺構の性格を示す記号として、ＳＢ（建物遺構）・ＳＣ（竪穴住居）・ＳＤ（溝）・ＳＥ（井戸）ＳＫ（土坑）を用いた。特異な銅製品鋳造遺構についてはＳＸとした。なお本文中では、ＳＢ・ＳＣ・ＳＥの各遺構については01～以下の2桁の番号にさらに整理して報告している。

3、本書には可能な限りの多くの図を記載したため、限られたページ内では遺物の細かな説明ができなかった。遺物の種類や出土遺構は実測図の下に小さく表示し、理解を助ける工夫とした。また、土師器の坏・皿については底部調整を図の下に略して表示した。ヘラはヘラ切り（ヘラ起こし）、糸は回転糸切り、板は板目圧痕のことである。

4、本書に用いる方位は、国土座標軸を用いた図以外は磁北である。またレベルは博多遺跡群内に設置している測量基準点の標高を移動したものである。

5、調査区の座標は任意のものであるが、国土座標軸との関係はＦｉｇ．3に示した。

6、本書に使用した遺構実測図の作製は、久住猛雄、北村幸子、立石真二、加藤隆也、姜元杓・林希珍・李文豪・崔連叔（高麗大学学生）が行なった。

7、本書に使用した遺物実測図の作製は、主に田中克子があたり、平川敬治、北村幸子、西山めぐみ、甲斐田嘉子、森部順子、森本朝子、早川晃代、入江のり子、野口未幾、端野晋平、日林　強、田野裕之、塚本浩司、本田浩二郎、大庭康時、山村信榮、久住が行なった。また、鉄製品と銅銭の銹落し、銅銭の拓本作製は主に富田輝子が行ない、他の拓本は成清直子が行なった。銅製品および鋳造関係資料の保存処理は、北村幸子が行い、比佐陽一郎、埋蔵文化財センターの助力を得た。

8、本書に使用した図の整図は、入江のり子、平井裕子、成清直子、久住が行なった。

9、本書に使用した写真の撮影は全て久住が行なった。

10、本書の編集は久住が行い、執筆はＶの動物骨の分析のみ西中川　駿（鹿児島大学）が、他は久住が行った。

11、本調査に関わる遺物・記録類（図面・写真）は福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。特に、本調査ではきわめて多くの遺構や遺物を検出したが、予算・頁数・時間の制約により報告できなかった遺構・遺物が多く存在する。資料が広く活用されることを望みたい。

遺跡調査番号	９６０３	遺跡略号	ＨＫＴ－９７	分布地図番号	049－0121
調査地地籍	福岡市博多区冷泉町　300－1･2番			事前審査番号	1－2－63
開発面積	527㎡	調査面積	324㎡	調査期間	1996年4月3日～7月25日

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに ……1
　1　発掘調査に至るまで ……1
　2　調査の組織 ……1
Ⅱ　遺跡の立地と地理的歴史的環境 ……1
　1　博多遺跡群の地理的歴史的環境 ……1
　2　調査地点の位置と周辺の調査 ……5
Ⅲ　調査の記録 ……7
　1　調査の経過 ……7
　2　調査地点の地形と層序 ……7
　3　遺構検出各面の概要 ……9
　4　古代末から中世の遺構と出土遺物 ……11
　（1）井戸（ＳＥ） ……11
　（2）土坑（ＳＫ） ……24
　（3）溝状遺構（ＳＤ） ……37
　（4）掘立柱建物（ＳＢ） ……37
　（5）銅製品鋳造関連遺構（ＳＸ） ……37
　5　古墳時代後期から古代前期の遺構と遺物 ……44
　6　弥生時代から古墳時代前期の遺構と遺物 ……47
Ⅳ　おわりに ……50
Ⅴ　博多遺跡群第97次調査出土の動物遺体（鹿児島大学教授　西中川　駿） ……51

挿 図 目 次

Fig. 1　博多遺跡群と調査地点の位置（1／25,000）……2
Fig. 2　第97次調査地点周辺図（1／1,000）……3
Fig. 3　第97次調査グリッド配置図および第80次調査との位置関係（1／400）……4
Fig. 4　Ａ－4・Ａ－5グリッド南北土層図（1／40）……6
Fig. 5　Ａ－1・Ｂ－1グリッド間ベルトＡ南北土層図（1／40）……6
Fig. 6　第1面遺構配置図（1／100）……8
Fig. 7　第2面遺構配置図（1／100）……9
Fig. 8　第3面遺構配置図（1／100）……10
Fig. 9　井戸実測図（1）（1／60）……12
Fig. 10　井戸実測図（2）（1／60）……13
Fig. 11　井戸実測図（3）（1／60）……14
Fig. 12　井戸出土遺物実測図（1）（1／3）……15
Fig. 13　井戸出土遺物実測図（2）（1／3、1／2）…16
Fig. 14　井戸出土遺物実測図（3）（1／3）……17
Fig. 15　ＳＫ－510・513実測図（1／30）……19
Fig. 16　ＳＫ－510・513出土遺物実測図（1）（1／4、1／2）……20
Fig. 17　ＳＫ－510・513出土遺物実測図（2）（1／4）……21
Fig. 18　ＳＫ－556実測図（1／20）……21
Fig. 19　ＳＫ－2081、ＳＫ－1173、ＳＫ－1013、ＳＫ－1315実測図（1／30）……22
Fig. 20　ＳＫ－556、ＳＫ－2081出土遺物実測図（1／3）……23
Fig. 21　ＳＫ－1173出土遺物実測図（1）（1／3）…25
Fig. 22　ＳＫ－1173出土遺物実測図（2）・ＳＫ－472出土遺物実測図（1／3）……27
Fig. 23　ＳＫ－472実測図（1／30）……27
Fig. 24　ＳＫ－1006・1171実測図（1／40）……28
Fig. 25　ＳＫ－1006・1171出土遺物実測図（1／4、1／3、1／2）……29
Fig. 26　ＳＫ－1315、ＳＫ－1013、ＳＫ－1015出土遺物実測図（1／3、1／4）……30
Fig. 27　ＳＫ－1015実測図（1／30）……31
Fig. 28　ＳＫ－005、ＳＫ－003、ＳＫ－1010、ＳＫ－1016、ＳＫ－318実測図（1／40）…32
Fig. 29　ＳＫ－005、ＳＫ－003、ＳＫ－1010、ＳＫ－1016、ＳＫ－318、ＳＫ－520出土遺物実測図（1／30）……33
Fig. 30　ＳＤ－1003実測図（1／20、1／40）、出土遺物実測図（1／3）……34
Fig. 31　ＳＢ－05実測図（平面1／80、断面1／40）、出土遺物実測図（1／30）……35
Fig. 32　銅製品鋳造遺構群平面図（1／60）・土層図（1）（1／40）……36
Fig. 33　銅製品鋳造遺構群土層図（2）（1／40）・ＳＸ－216実測図（1／30）……37
Fig. 34　銅製品鋳造関連遺物実測図（1／2、1／4、1／3）……39
Fig. 35　銅製品鋳造遺構群出土土器・陶磁器実測図（1）（1／3、1／4）……41
Fig. 36　銅製品鋳造遺構群出土土器・陶磁器実測図（2）（1／3）、鋳造遺構群出土銅製品実測図（1／2）……42
Fig. 37　ＳＫ－1156実測図（1／20）……42
Fig. 38　ＳＫ－1156出土遺物実測図、古墳時代後期～古代前期遺物実測図（1／3）……43
Fig. 39　ＳＣ－05・06・08実測図（1／50）……44
Fig. 40　ＳＣ－01・02・03・04・07、ＳＫ－2068、ＳＢ－04実測図（1／50）……45
Fig. 41　ＳＤ－01（ＳＤ－2219）・ＳＫ（ＳＤ？）－2127実測図（1／80、1／40）、ＳＫ－2126実測図（1／30）……45
Fig. 42　ＳＢ－01・02・03実測図（1／80）……45
Fig. 43　弥生時代～古墳時代前期遺物実測図（1／6）……46
Fig. 44　その他の出土遺物（1）（ガラス坩堝・銅製品・鉄製品・石製品・玉）（3／4、

1／2、1／3、1／4）……48
Fig.45　その他の出土遺物（2）（土器・陶磁器・土製品・瓦）（1／2、1／3、1／4）……49
Fig.46　出土銅銭拓本（4／5）……50

本文写真目次

PH.1　銅製品鋳造関連遺物写真……38
PH.2　SX－064出土円形双龍文飾金具写真（ほぼ1／2、上＝表・下＝裏）（Fig.36）…42

図版目次

PL.1
1．第1面全景（西から）
2．第2面全景（南から）
3．A－4・A－5グリッド南北土層（西から）
4．A－4・A－5グリッド第1面（北から）
PL.2
5．SE01（SE－512）出土状況（北から）
6．SE15（SE－431）出土状況（北から）
7．SE05（SE－1030）出土状況（西から）
8．SE05（SE－1030）井戸枠（西から）
9．SE13（SE－190）出土状況（東から）
10．SE13（SE－190）井戸枠（東から）
11．SE12（SE－103）出土状況（北から）
12．SE08（SE－1137）出土状況（北から）
PL.3
13．SE11（SE－1070）土層（西から）
14．SK－510・513白磁一括出土状況（西から）
15．SK－2081最下層遺物出土状況（南から）
16．SK－2081土層（東から）
17．SK－1173下層石敷遺物出土状況（西から）
18．SK－472土層・断面状況（西から）
19．SK－472土壙墓出土状況（北から）
PL.4
20．SK－556獣骨出土状況（東から）
21．A－1グリッド周辺第2面（南から）
22．SK－1015上層炭化物面出土状況（東から）
23．SK－1015中層遺物出土状況（東から）
24．SK－1015鍋形土器底部出土状況（東から）
25．SK－318土層（上面はSX－025）（西から）
26．SK－1006上層遺物出土状況（西から）
PL.5
27．ベルトA中央東側土層状況（SK－1171土層）
28．SK－1156上層遺物出土状況（北から）
29．SD－1003出土状況（東から）
30．銅製品鋳造遺構群全景（白線）（南から）
31．SX－010（新）・038（古）出土状況（南から）
32．SX－010取瓶出土状況（西から）
33．SX－036・636調査区南壁土層
34．SX－025・473、SK－318調査区東壁土層
PL.6
35．SX－064・066・067・636・036切合状況（東から）
36．銅製品鋳造遺構群切合状況（東から）
37．SX－097出土状況（北から）
38．SX－020（新）・097（古）・473（古）（南から）
39～43．SX－216礫敷上面（39）・礫敷中層（40）・礫敷下層（41）・下層土坑土層状況（42）・土坑遺物出土状況（43）（39－西から、40～43－東から）
PL.7
44．SC05（中央）・SC06東（左）出土状況全景（南から）
45．SC05西半土器出土状況（南から）
46．SC01・02・03、SK－2068　土器出土状況（東から）
47．SC01中央土器出土状況（西から）
48．SK－2124（SC－06東下層）出土状況（東から）
49．SD01（SD－2219）土層（北から）
50．SD01出土状況（西から）
PL.8
51．SB01柱穴北列出土状況（東から）
52．SK－508（SK－510か）出土墨書土器（白磁）
53．SK－2081　出土墨書土器（土師器坏）
54．A－1グリッド第1面下部出土天目（左）・SK－1013出土天目（右）
55．SE09出土河南天目
56．SK－1173　出土黄釉鉄絵盤
57．SK－1171　上層出土施釉陶器
58．SK－1015　出土鍋形？土器（三足付）
59．SE05出土移動式かまど
60．SE05上層（第1面）出土ガラス坩堝
61．A－4～5グリッド出土ミニチュア滑石製硯（左）・SE14出土コテ状滑石製品（右）
62．A－1グリッド第1面下部出土蝶形鍍金銅製飾金具
63．SD01出土鉢形土器（弥生後期後葉）
64．SC01出土畿内系直口壷（古墳初頭）
65．SC01出土布留形甕（古墳前期前葉）
66．SK－2068　出土庄内形甕（古墳初頭）
PL.9
67．SC06東出土布留形甕（古墳初頭）
68．SC05出土布留形甕（古墳前期前葉）
69．SC05出土布留形甕（古墳前期前葉）
70．SK－2124出土布留傾向形甕（古墳初頭）
71．SC05出土布留形甕の外面上半調整（1）
72．SC05出土布留形甕の外面上半調整（2）
73．SC10出土布留形甕の雨粒形列点文
74．SC05出土布留形甕の米粒形列点文
75．SC05出土高坏（弥生後期後葉）
76．SP－2079出土東海系？高坏（弥生後期後葉）
77．SC05出土在来系高坏（弥生後期後葉）
78．SC02出土山陰系甕（弥生終末）
79．SC02出土東海系？鉢（弥生後期後葉）
80．SC07出土山陰系？壷または甕（弥生後期後葉）
81．SC01出土高坏脚部頂部刻目（古墳初頭）

表紙写真

表表紙　第1面銅製品鋳造遺構群全景

裏表紙　第97次調査出土古式土師器

Ⅰ　はじめに

1　発掘調査に至るまで

平成1（1989）年5月30日、株式会社ライフエステート代表取締役守和夫氏から、博多区冷泉町300－1、2番における分譲マンション建設に伴う埋蔵文化財の事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。申請地は、博多遺跡群として周知されている範囲内であり、周辺の調査からも中世を中心とする濃密な遺構の分布が予想された。埋蔵文化財課では関係者と協議の上、平成1年6月20日に同地の試掘調査を行った。その結果、申請地は地表下約2mより下に、古代・中世の遺構・遺物が良好な状態包含されていることが判明した。この結果を踏まえ、遺跡の取り扱いについて関係者と協議を行い、建築工事によって破壊される部分を対象に、記録保存のための発掘調査を実施することで合意に達した。その後、平成8（1996）年に株式会社ライフエステートと埋蔵文化財課の間で受託調査の契約が交わされ、表土の鋤取り工事などの条件整備を行った後に、平成8年4月2日より本調査を開始した。

2　調査の組織

調査委託：盛立建設株式会社　代表取締役　中嶋凡夫
調査主体：福岡市教育委員会　　教育長　町田英俊
調査総括：埋蔵文化財課長　荒巻輝勝
　　埋蔵文化財課第二係長　山口譲治
調査庶務：埋蔵文化財課第一係　西田結香（前）、浅原千晶（前）、河野淳美（現）
調査担当：埋蔵文化財課第二係（当時）　久住猛雄
試掘調査：埋蔵文化財課第二係（試掘当時）　常松幹雄
調査・整理補助：北村幸子、立石真二
調査作業：阿部幸子、今別府序子、池田省三、金子二三枝、河野龍哉、木原保生、木村文子、幸田信乃、斉田秀平、塚本よし子、中野満代、中野裕子、布江孝子、伯野慎一郎、播磨千恵子、藤川繁昌、福田軒雄、松岡芳枝、三浦力、水田ミヨ子、三好浩子、森教子、山口熊孟、山田孝允、吉開元泰、（以下高麗大学学生）姜元杓、林希珍、李文豪、崔連叔
整理作業：成清直子、富田輝子、平井裕子、尾崎君枝、西山めぐみ、早川晃代

以上の他、発掘調査および整理作業中、狭川真一・城戸康利・山村信榮（太宰府市教育委員会）、中山光夫（日本鉱業史研究会会員）の各氏からは銅製品鋳造関連の遺構と遺物について御教示を賜った。また、田中克子氏から陶磁器を中心とする古代・中世の遺物について多くの御教示を頂いた。また森本朝子氏からも御教示を得た。中世における博多遺跡群の遺構・遺物については、大庭康時・佐藤一郎を始めとする埋蔵文化財課の各氏から御教示を得た。また末章には、西中川駿氏(鹿児島大学教授)から出土動物遺体の分析についての玉稿を賜った。記して感謝申し上げたい。

Ⅱ　遺跡の立地と地理的歴史的環境

1　博多遺跡群の地理的歴史的環境

博多遺跡群をめぐる歴史的な環境については、本報告書では通史的な詳細を述べることをしない。特に中世都市としての「博多」については、博多遺跡群の他の報告書において多くの記述があるので、

それらを参照して頂きたい。ここでは、博多遺跡群の地理的環境と、案外今まであまり注目されていない、本書の第97次調査の第3面において検出された古墳時代初頭前後の集落に関係する他の調査地点と周囲の遺跡、当該期の遺跡の動態について詳しく述べておきたい。

博多遺跡群は、福岡平野の中央部を北西に流れる那珂川と、江戸時代に御笠川の河川付け替えにより開鑿された石堂川とにはさまれた砂丘上に位置する。中世までは御笠川は博多遺跡群の南で西行し那珂川に合流しており（旧比恵川)、これが遺跡群の南を画していた。遺跡群の西側は低くなるも現在の堅粕付近とは地続きであった可能性が高い（Fig. 1参照)。遺跡群が立地する砂丘は3列からなり、内陸側から砂丘Ⅰ～Ⅲと称される。内陸側の砂丘Ⅰ・Ⅱは「博多浜」、海側の砂丘Ⅲは「息の浜」と呼称される。砂丘は内陸側から順次形成され、海側の「息の浜」に町場が形成されるのは13世紀後半の元寇防塁以降である。一方、「博多浜」砂丘には弥生時代にすでに遺構の展開が見られ、次に述べるように古墳時代初頭前後に一時ピークを迎える。

古墳時代初頭前後の集落は、砂丘Ⅰのほとんど全面と、砂丘Ⅱの南半部に展開する。ここで注意すべきなのは、中世以降の濃密な遺構によって、古墳時代のような古い遺構は多く破壊されており、調査で検出されているものは本来の一部であること、また市街地での調査故の諸般の制約より、最下面の調査が不十分な場合があることである。これらも考慮すれば、博多遺跡群の該期の集落が、質量ともに拠点的な内容を示すことが理解される。この時期の遺構が比較的良好に残っていた調査地点では（36次、59次など)、平均300m²につき5棟以上の竪穴住居が検出されている。一方、この時期の集落の展開する面積は20ha前後と推定され（砂丘ⅠとⅡの間の谷部は除く)、上記の状況から、300m²につき同時存在1～2棟程度と仮定すれば、実に600～1300棟もの竪穴住居があった計算になる。もちろん、墳墓になっている地区や、住居の少ない地区もあろうから、この数字は半分ぐらいに下方修正すべきであろうが、この時期の博多遺跡群の重要性の認識はできるであろう。古墳初頭前後の時期のみ、大きな集落が出現し消長する例が博多湾岸の砂丘には多く、西新町・藤崎遺跡群は博多遺跡群に匹敵する遺跡である。それに準ずる遺跡として、姪浜遺跡、今宿遺跡群等がある。これら

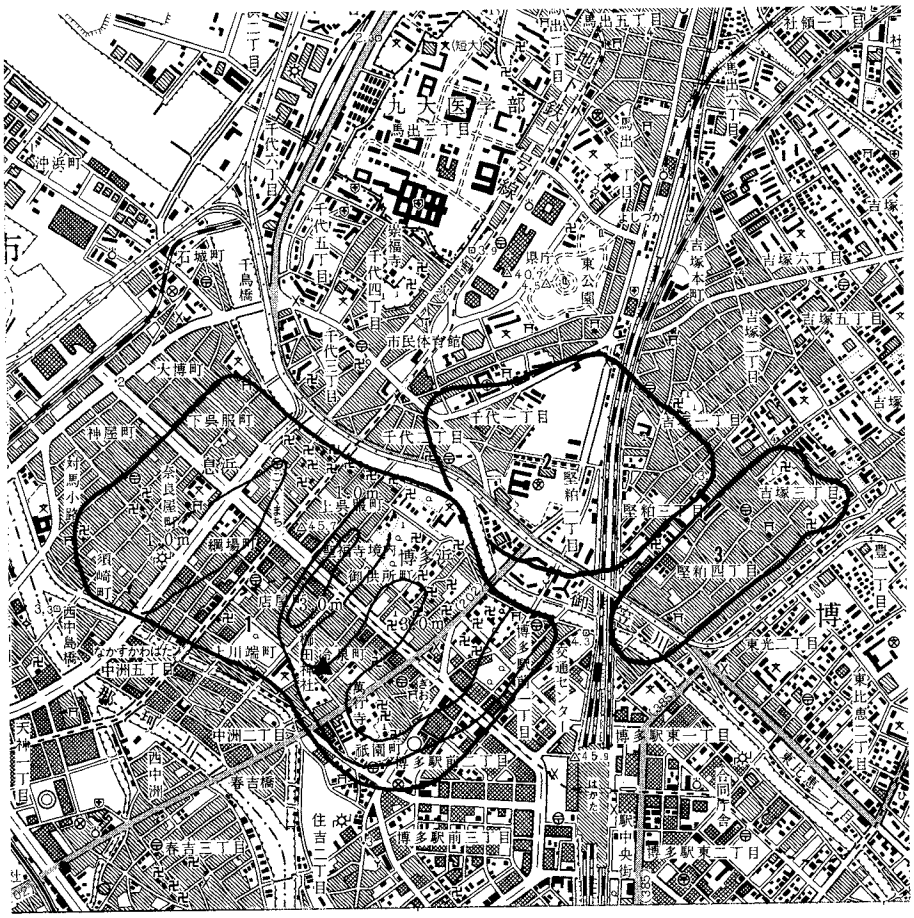


Fig. 1　博多遺跡群と調査地点の位置(1/25,000)
1．博多遺跡群　2．堅粕遺跡　3．吉塚遺跡
※等高線は8世紀頃の砂丘

の遺跡に特徴的なのは、外来系とりわけ畿内系・山陰系の土器群（広義の布留様式）が多数を占めることであり(ただし大部分は在地生産)、内陸部の中小集落では多く存続している伝統的な在地系の土器群はむしろ少数であることである。また、国内各地および朝鮮半島からの搬入（韓式系）土器が少なからず存在することが特筆できる。例えば西新町遺跡では、当時の集落としては国内最多数の韓式系土器が出土し、山陰系の搬入土器も特に多い。博多遺跡群においても、17次・33次より韓式系土器が出土し、17次では楽浪系の漢式土器と百済系の短頸壷も出土している。国内各地からの搬入土器では、むしろ弥生終末段階（西新町式前半、庄内式併行）が多い。50次で庄内大和型甕の最古相が、50・102次で東海西部系のS字甕A類とB類古相が、17次では山陰系の鼓形器台、97次では山陰系の甕や櫛描文を有する壷があり、これらは終末段階である。また、庄内式甕が他の集落に比べ目立って出土する。同様の遺跡には博多遺跡群の背後に控える巨大な比恵・那珂遺跡群や、雀居遺跡などがあり、特定地域に偏って分布している。これらは技法的には大和型甕系統であるが、微妙に異なり、ある段階から北部九州ではこの地域のみで在地生産されていると見られる。なお、97次では播磨産の可能性のある庄内甕も出土している。このように、博多遺跡群は比恵・那珂遺跡群などとともに、北部九州における畿内系土器受容のセンター的位置を占めることが指摘できよう。なお博多遺跡群では、弥生後期後葉段階ですでに、70・81・97次で瀬戸内系の甕や壷、97次で東海系の可能性ある高坏や鉢があり、臨海性の立地もあり、港町的な性格の端緒が見られる。しかしこの時期と、弥生終末から古墳前期前半の集落の様相の間には飛躍があり、同様の遺跡群が湾岸に同時に出現することから広い地域の中での遺跡群の動態を見る必要がある。弥生時代中期後半以降の福岡平野では、春日市の須玖岡本の「王墓」や青銅器工房群を中心とした須玖遺跡群と、福岡市博多区の比恵・那珂遺跡群の両者

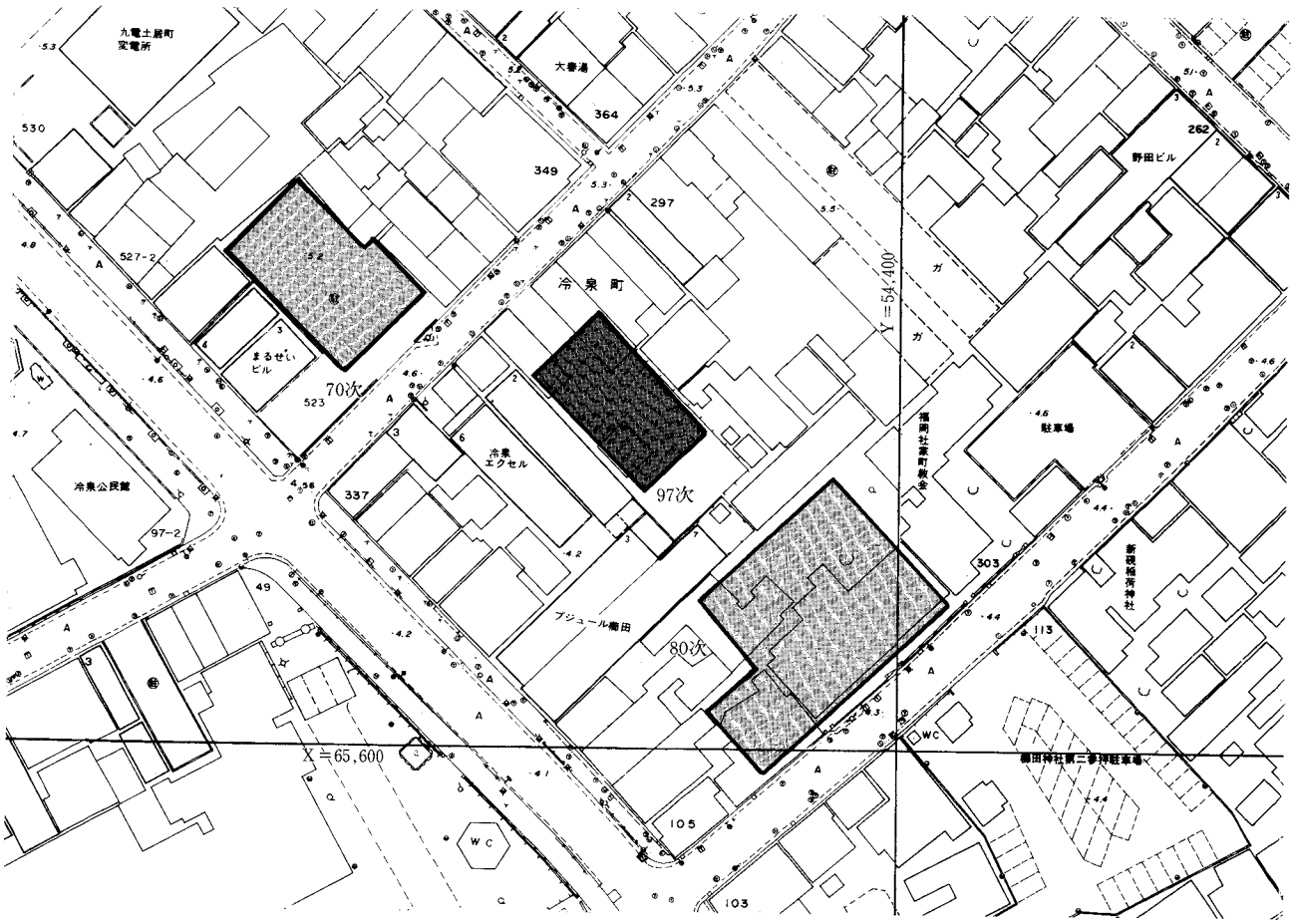


Fig. 2　第97次調査地点周辺図(1/1,000)

が100haを超える巨大集落で「奴国」の正副二大中心をなすが、須玖遺跡群は弥生終末から古墳初頭を境に急激に縮小し、代わって比恵・那珂遺跡群が隆盛をなし、新しい外来（畿内）系の土器様式のセンターとなる。福岡平野最古の前方後円墳である那珂八幡古墳がその中に築かれる。すなわち、須玖遺跡群の機能が比恵・那珂遺跡群に、比恵・那珂遺跡群の機能が博多遺跡群や西新町・藤崎遺跡群にシフトした結果とも考えられる。博多遺跡群では、当時としてはもっとも整った鍛冶工房群が検出されていることも遺跡の性格を考える上で特筆される（59・65次）。中心機能が全体として海側に移動することは、弥生時代では「奴国」の主要な関心が北部九州の内陸部に、弥生終末以降は朝鮮半島から近畿地方に至る海上交通路に移ったことを反映するのであろう。博多遺跡群などの湾岸の港町的な大集落群の出現の一方では、福岡平野や早良平野の南部において、新興の集落群が出現することも注意される（春日市柏田遺跡、那珂川町松木遺跡・仲遺跡・今光遺跡、福岡市早良区野芥遺跡、東入部遺跡など）。これらも平野全体の集落の再編成の中で捉えるべき現象であろう。博多遺跡群の古墳前期の墳墓には、方形周溝墓やその主体部としての割竹形木棺が、17・22・24・27・36・62・65・70次などで検出されている。これらは、規模的にも、副葬品の内容的にも、特別に傑出したものはなく、集落の内容も首長居館等の中心的な施設が不明確なことと対応する可能性がある。これは西新町遺跡とこれに対応する墓地としての藤崎遺跡の群在する方形周溝墓も同様で、似たような集落構造が推定できよう。博多

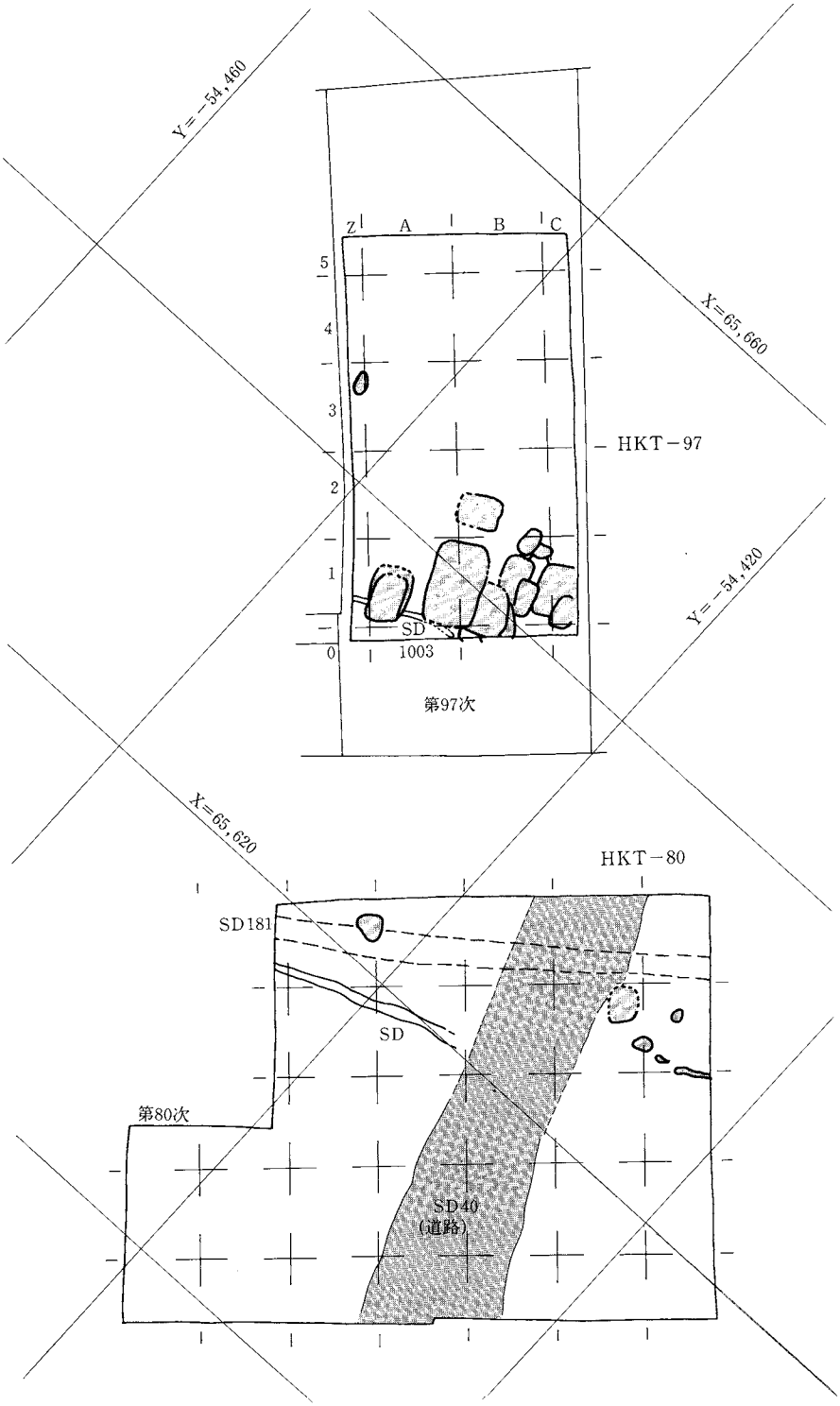


Fig. 3　第97次調査グリッド配置図および第80次調査との位置関係(1/400)

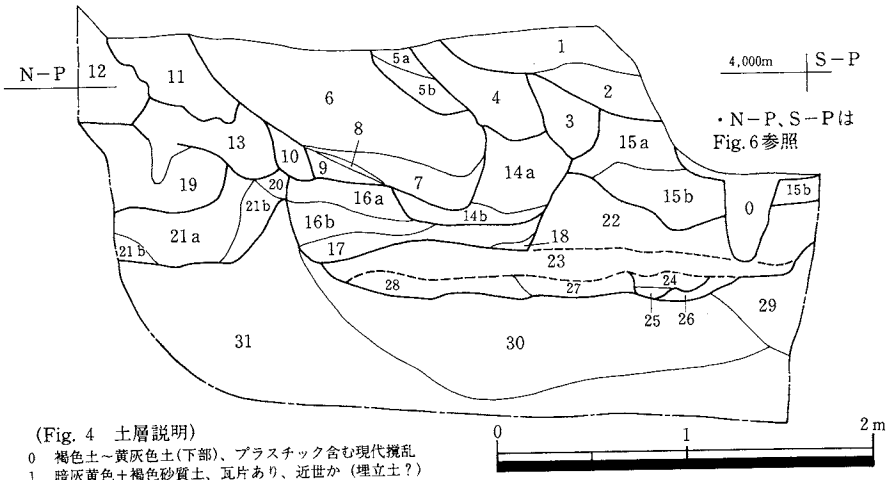
※第97次SD1003、第80次SD181は13世紀，
アミカケは鋳造遺構群(13世紀後半～14世紀中頃)，
第80次SD40(道路)は14世紀後半以降か。

17次では、方形周溝墓の造営に先立って、東西方向に溝間5.5ｍの並列溝が弥生終末から古墳初頭のある時期に掘削されており、地下鉄工区Ｑ区まで続き、延長60ｍ確認されている。報告では「道路」の可能性が指摘されている。この位置は遺跡群の南縁にあたり、これに沿って続く可能性もある。なお比恵・那珂遺跡群においても、類似の遺構が遺跡群の西縁を南北に貫くように検出されつつあり、その時期も同様である。この遺構の存在を大きく評価すれば、平野全体の遺跡群の動態と合わせて、弥生終末から古墳初頭の博多遺跡群の急激な拠点化は、ある意図をもって計画的に建設されたと評価すべきものかもしれない。今後の調査における、この時期の遺構と遺物の展開の確認と、すでに調査・報告されている資料の詳しい分析が期待される。集落の展開は古墳前期中頃をもって終了し、以後古墳時代中期にかけて一帯は墳墓地区になる。5世紀前葉には全長56ｍ以上の前方後円墳である博多1号墳（28・31次）が築造されるのがその代表である。西新町遺跡や比恵・那珂遺跡群も同じ頃に集落が廃絶ないし急激に縮小しており、何らかの大きな社会背景が存在した可能性が考えられる。これ以後は、現状の調査成果では、6世紀後半に至るまで博多遺跡群では集落が営まれないようである。

2　調査地点の位置と周辺の調査

第97次調査地点は、博多浜を形成する砂丘が中間でくびれ、砂丘ⅠとⅡとに分けられる部分の西側に位置している。周辺の調査地点（Fig. 2）における基盤砂丘の傾斜は、北の第70次調査では北側へ下り、南の第80次調査では南側にゆるく下り、さらに南の第63次調査では北側に下る。本報告の第97次調査地点は南側にやや急に下る。97次調査地点での、古墳時代初頭の竪穴住居が営まれた頃の砂丘面の標高は、調査区北端で約3.4ｍ、南端で約2.5ｍである（Fig. 4・5参照）。97次調査地点は砂丘Ⅱの南斜面にあたるが、70次調査地点の状況から、この砂丘の頂部が両者の調査地点の間を東西に走る現在の道路部分にあったことが推定される。また、80次調査と63次調査の間には砂丘の後背地ないし谷が存在していたことが分かる（Fig. 1）。80次では弥生時代後期前葉の集落が検出されている。博多遺跡群では、祇園町付近を中心に中期の集落と甕棺墓群があるものの、該期の遺構は少なく重要な発見である。弥生後期後葉以降は遺構も増加し、古墳初頭に爆発的に増加することは前述した。70・97次ともに弥生後期後葉の遺構が分布し、いずれも外来系土器が出土する。これらの調査地点の西側は中世の冷泉津（港）であり、その端緒がこの頃にあるのかも知れない。次に、奈良時代から平安時代前半の古代の遺構・遺物は、70・80次調査では比較的多く出土しているが、その間の97次調査では量的にやや少ない。中世初期には、冷泉津とされる地区に近く、97次の130～200ｍ北西にあたる14・56次において夥しい量の白磁が一括廃棄された状況が検出されている。97次でも、それらほどではないものの白磁が多量に廃棄された遺構が検出されている（ＳＫ－510）。ちなみに、70・80・97次等の調査地点周辺の旧町名は「社家町」であり、近世以降つい最近まですぐ西側に位置する櫛田神社の神官の居住地であった。櫛田神社は、文献上の初出は鎌倉時代末の「博多日記」であり、隣接していた鎌倉幕府鎮西探題に、1333年（天慶2年）菊地武時が攻め込んだ状況等が記されている。ただし鎮西探題の場所は未だ遺構としては不明である。80次調査では、13世紀末から14世紀中頃の銅製品鋳造関連の遺構と遺物がまとまって検出され、本報告の97次調査の銅製品鋳造遺構群も同時期であり、両者は一体の屋敷地の中にあった可能性がある（Fig. 3）。これまでの調査成果から、現在の冷泉町一帯には、12～15世紀の銅製品の工房がいくつもあったようであるが、少なくとも14世紀前半前後においては、この80・97次調査の地区が最も拠点的な鋳物師の工房であったと言えよう。ところが14世紀後葉頃、80次調査地点では南北に道路が新たに造営され、新しい町割りとともに工房も他へ移ったらしい。なお70・97次では、他の調査地点に比べ、中世（～近世）の井戸が

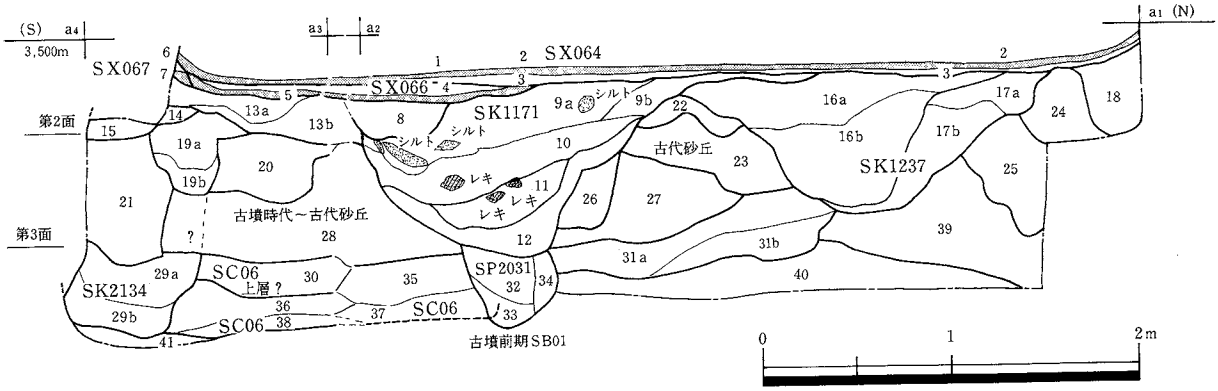
特に濃密に検出されているようである。これらの井戸の中にこそ、現代に続く博多の町の人々の息吹がそこに埋もれていると言えよう。



(Fig. 4　土層説明)

0　褐色土～黄灰色土(下部)、プラスチック含む現代攪乱
1　暗灰黄色＋褐色砂質土、瓦片あり、近世か（埋立土？）
2　黒褐色土、土師器含む、炭含む（埋立土？）
3　暗灰黄褐色土＋黒褐色土、しまり甘い（遺構）
4　暗褐灰(暗灰)色土、しまり甘い(遺構)　5a　淡黄褐色砂質土＋灰色砂　5b　暗灰色砂＋黄褐色砂(5a－5b 遺構)
6　黒色土、土器片あり、しまり甘い、炭化物多い、やや粘質(遺構)　7　暗灰黄色土＋黒色砂質土少し混入、しまり甘い
8　9層＋炭化物多（7～9 遺構）　9　暗灰黄褐色砂、しまり甘い　10　明褐色砂質土、しまり甘い
11　黒褐色砂質土、白磁片あり（12C代遺構？）　12　黒褐色砂質土、鉄滓あり、しまり甘い（遺構か）
13　暗灰色砂＋黄褐色砂、しまり甘い（埋立土か）　14a　オリーブ褐色～黄褐色砂質土、白磁片含む
14b　にぶい暗黄褐色砂質土＋灰色砂（14a・14b 遺構？）
15a　褐色砂質土、しまりあり（自然堆積、この上面で中世初期地表か）
15b　にぶい暗黄褐色砂、植物生痕あり、しまり甘い(自然堆積か)　16a　暗褐色砂、植物生痕あり、しまり甘い（埋立土？）
16b　15b層と似る(埋立土か)　17　褐色砂、暗灰褐色砂まじり（遺構？）
18　暗褐色砂、しまり甘い（遺構？）(16～18　遺構？)　19　暗灰黄褐色砂、しまり甘い（遺構か）　20　黄褐色砂
21a　褐色砂　21b　明褐色～褐色砂　(21a・21b 遺構？)　22　オリーブ褐色砂（自然堆積、古代の砂丘か）
23　黒褐～暗赤褐色砂、古墳前期住居下層埋土か、しまり甘い、植物腐食土・炭化物土まじる（この下面が住居床面か）
24　褐色砂、暗灰色・黄褐色砂まじる、しまり甘い　25　暗灰褐色砂、しまり甘い　(24－25　柱穴か)
26　黄褐色砂　27　明黄褐色砂　28　浅黄色砂　(26～28　住居掘り方埋土か)
29　明黄褐色砂（弥生後期～古墳前期頃砂丘？）　30　浅黄色砂　31　浅黄色砂、やや粗い砂

Fig. 4　A－4・A－5グリッド南北土層図(1/40)



ベルトA土層説明

1　暗褐灰～黒褐色土、炭・焼土粒・遺物若干含む、しまりあり
2　にぶい黄色～灰黄褐色粘質シルト、粗砂を少し
3　黒褐色粘質炭化土、土器片含む、2層の土含む
4　灰黄色粘質シルト＋暗灰色土
5　暗灰－黄灰色粘質シルト
6　黒褐色土　7　暗褐灰粘質土＋黒褐色土、炭含む
1～7　鋳造遺構
8　黒褐色土、炭・土器多い
9a　黒褐色土、炭粒・灰色シルトブロック多い
9b　黒褐色土、炭粒、土器少量
10　黒褐色砂質土、炭・灰色シルトブロック少量、一部褐色砂、礫含む
11　黒褐色土、炭粒含む、レキ含む
12　黒褐色砂質土＋暗褐色砂、炭化黒色粘質土少量含む
8～12　SK1171
13a　黒色粘質土、炭含む、にぶい黄色シルト少量、焼土、土器少量
13b　黒褐色土、しまりあり、一部褐灰～暗褐色砂を含む、炭・焼土少量
14　暗灰黄褐～黒褐色砂質土
15　黒褐色砂質土、一部暗褐色砂
16a　黒褐色土、炭粒少量、まじり少ない、下部暗灰褐色砂混入
16b　黒褐色砂質土＋暗褐灰～灰黄褐色砂まじり
17a　黒褐色土＋にぶい黄褐色～褐灰色砂まじり少量
17b　暗灰黄褐色砂質土または砂＋にぶい黄褐色砂、一部黒褐色砂質土
18　暗灰黄褐色砂
19a　暗オリーブ褐～にぶい黄褐色砂＋一部黒褐色砂質土
19b　黒褐色砂質土（砂）＋暗灰黄褐色砂
20　灰黄褐色～暗黄褐色砂
21　暗オリーブ褐色～暗灰黄褐色砂
22　黒褐色砂質土＋にぶい黄褐色または褐灰色砂
23　暗黄褐色砂（にぶい黄褐色）
24　にぶい黄褐色砂
25　暗灰黄褐色～にぶい黄褐色砂
26　黒褐色砂（古代遺構？）
27　23層と似る
28　25層と似る
29a　28層と似る、30－36層より暗い、一部にぶい黄色砂混入
29b　にぶい黄褐色砂　(29　古代遺構)
30　暗褐色～暗灰黄褐色砂
31a　にぶい黄褐色砂　31b　暗灰黄褐色砂
32　にぶい黄褐色砂
33　暗灰黄褐色砂
34　32層＋33層
35　暗灰黄褐色～黒褐色砂
36　にぶい黄色～黄褐色砂
37　褐色～にぶい黄褐色砂
38　淡黄褐色砂
39　にぶい黄褐色～明黄褐色砂
40　にぶい黄橙砂
41　にぶい黄～浅黄砂

・a_1～a_4はFig. 7参照

Fig. 5　A－1・B－1グリッド間ベルトA南北土層図(1/40)

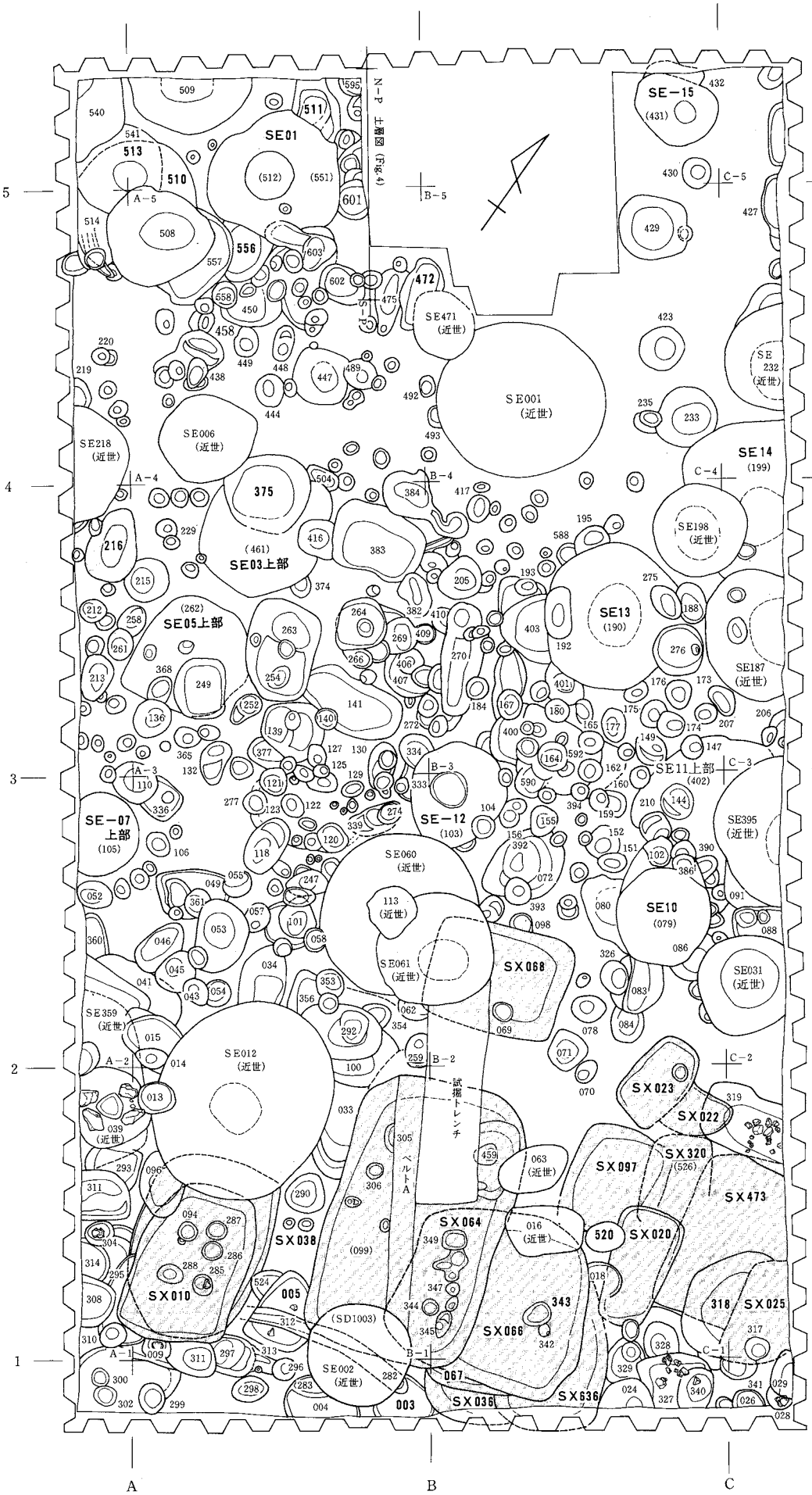
Ⅲ　調査の記録

1　調査の経過

調査地は、遺構面が地表下２ｍより下にあり、かつ地盤が砂地で脆いことから、調査区外周には鋼矢板を設け調査した。矢板および外周のフェンス工事、事務所の設置が調査に先立って行われ、表土の鋤取りは埋蔵文化財課第２係（当時）の事前審査担当の池田祐司の立ち会いのもとに平成８年３月末から４月１日にかけて行われた。発掘調査は同年４月２日に機材を搬入し、第１面の遺構の検出をすることにより開始された。第１面では、予想をさらに上回る遺構の多さと、近世の井戸や深い廃棄土坑が多く残っていたことに手間取ったこと、特殊な銅製品鋳造遺構群の調査を慎重に進めたこと、さらに博多遺跡群のような濃密な遺跡に対する調査者自身の調査の力量の未熟さも手伝って、５月末までの時点で、調査工程が大幅に遅れてきてしまった。そのため、調査を委託した株式会社ライフエステートとの間に工程協議が６月６日に設けられた。同社の埋蔵文化財に対する深い御理解により、当初６月末までの調査予定であったが、７月末まで調査期間を延長することで合意を見た。このような工程上の問題もあって、また実際に砂丘が北から南へ傾斜しているため、第２面以下の調査は第１面の調査の終わったグリッド毎に行ったため、各グリッドで遺構検出面が異なることになった（各グリッドは５ｍ方眼。Fig. ３参照）。また調査では排土の搬出に苦労した。排土は全て重機とトラックにより外に搬出したが、その仮置場が問題であった。建築工事対象外の調査区外の北側のスペースは狭く、市街地の狭い道路に接するため土置場としては不適当で、排土の仮置は調査区内で処理するよりなかった。そのため、調査区北端を三分割し、初め西側を、次に東側を排土の仮置場としたが、調査面への昇降部を確保するためと調査期間の問題もあり、その中央部分の若干が調査できない結果になってしまった。第２面の調査は一部を５月後半より始めたが（全体的には６月上旬より）、やはり多くの遺構、特に井戸が濃密に存在したため、結局７月上旬まで調査を要した。第３面の調査時は、博多祇園山笠の期間と重なり、祭りの中での調査となったが、上面で掘り残した井戸や土坑も多く、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構も多く存在したため、山笠もすでに終了した7月23日にようやくほぼ作業を終えて、23日から24日に機材と遺物を搬出し、７月24日に調査の終了の確認作業をし、７月25日に対象地を株式会社ライフエステートに明け渡して調査は終了した。なお、第１面で検出された銅製品鋳造遺構群の価値が注目されるところとなり、7月23日には記者発表を行い、同日夕方のテレビのニュースや翌日の新聞朝刊を賑わせたことを付記しておきたい。

2　調査地点の地形と層序

前章で述べたように、調査地点は博多浜砂丘の砂丘Ⅱの頂部に近い南斜面にあたる。基盤の砂丘のレベルは（古墳時代初め頃）、調査区の北端で標高3.4ｍ前後、南端で2.5ｍ前後である。この上にさらに黄褐色から褐色の砂が古代にかけて数十ｃｍ堆積し、これより上は古代以降の包含層となり、中世初頭（11世紀中頃）以降、何度も埋め立て・整地され現在のレベルに至る（Fig. ４・５、ＰＬ．１－３参照）。表土の鋤取りでは地表下約2.2ｍ下げ、調査区南半では13世紀前後の遺構面を検出したが、その時期に至っても基盤の砂丘地形の傾斜がかなり反映しており、調査区の北端では古代の砂丘上面まで下げてしまう結果になってしまった。試掘調査のトレンチは、調査区南半の中央に南北に設定している（Fig. ６参照）。その試掘報告で地表下2.3ｍに整地面の存在が指摘されているが、これは調査の結果、整地面ではなく実は13～14世紀の銅製品鋳造工房のシルトまたは粘土の床土面であったことが判明した。調査では、前述のように調査区北半では鋤取りを深くしてしまったために、



いきなり11～12世紀の中世初期の遺構が検出できることになってしまっている。実際はこれ以降の遺構が深く濃密に残存しているため、機械的に数十cm下げて第2面を設けている。一方、調査区南半で前記の鋳造遺構群の周囲と直下の土に炭・焼土・シルトブロックや遺物が多く出土している。これは13世紀中頃の整地層と見られ、この下面の暗褐色砂質土を第2面としている。第3面は、各グリッドで設定した第2面から機械的に数十cm下げて遺構検出面としている。なおこれより下の基盤の浅黄色砂中には、遺構は存在せず、ごく僅かに弥生時代中期の土器の破片を検出したのみである。

Fig. 6　第1面遺構配置図(1/100)　※アミは銅製品鋳造遺構
・ゴシックは今回報告する遺構

3　遺構検出各面の概要

(1) 第１面の概要（Fig. 6、ＰＬ．１－１・5）

地表下約　2.2～2.3ｍに設定した最初の遺構検出面である。この面の層序は前述のとおりである。検出した遺構は、中世～近世の井戸、近世の廃棄土坑・鍛冶炉の基部、中世の土坑・柱穴等である。中世の遺構は13～14世紀を主体とするが、調査区北半では一部11～12世紀のものも検出されている。土坑・井戸は濃密に複雑に切り合い、また明確な整地面が調査区全体には広がらないため、遺構検出当初は切り合いを誤ったことがしばしばあった。柱穴群は、井戸・土坑との切り合いと、あまりにも多数検出されたため、建物を復元するのは不可能な状況であった。第１面で特筆されるのは、調査区南部に群在して検出した銅製品鋳造遺構群である。これらはいずれも床と壁の立ち上がりに粘土もしくはシルトとを貼った浅い土坑状の遺構で、そのため明確に検出できた。調査区中央西寄りの上部に石積みのある土坑ＳＸ－216は、これらと離れるが、その構造と出土遺物から炉の基底部と見られ、時期や方位も同じであるので、一連のものと理解される。

また調査区北端

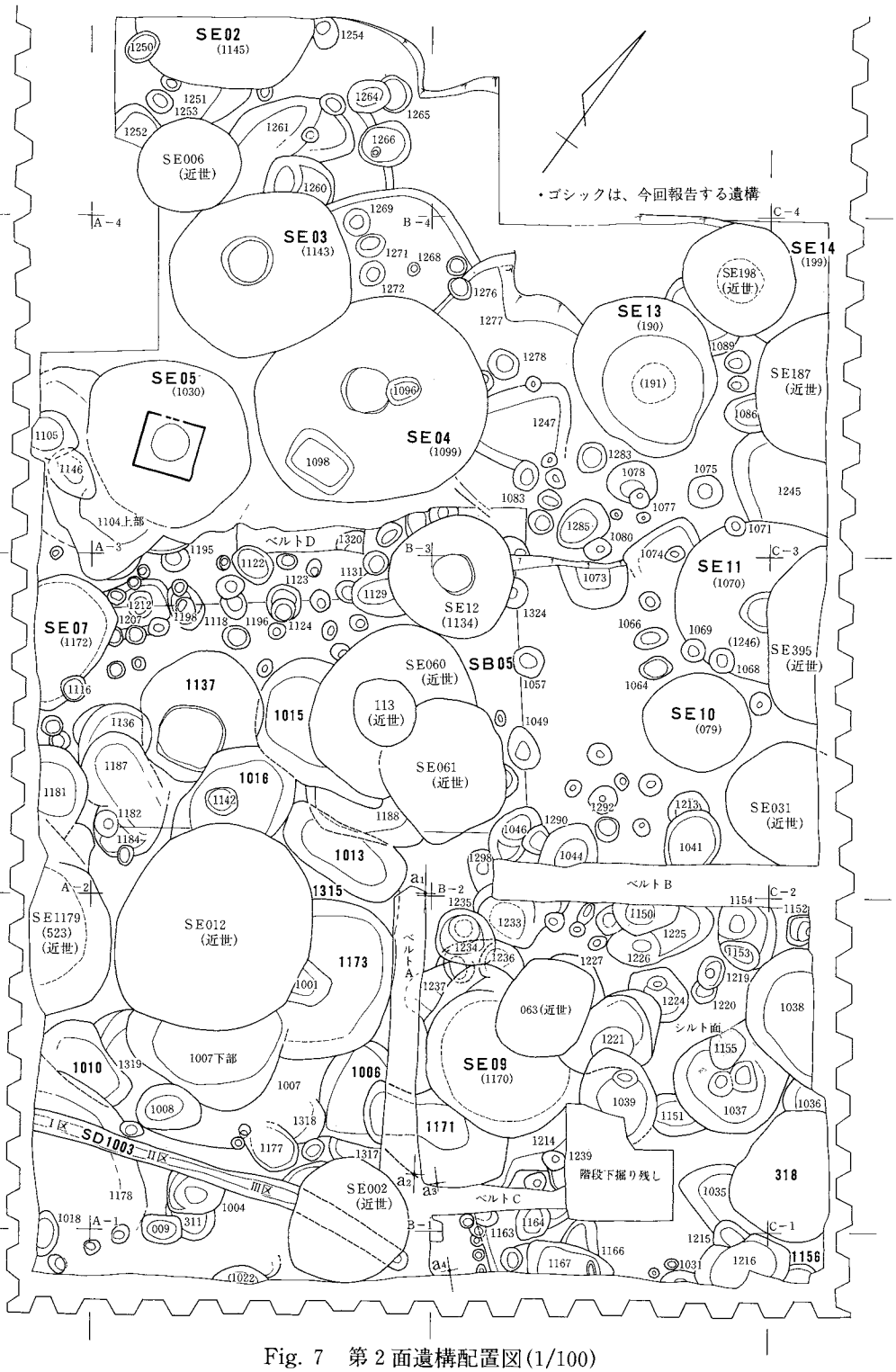


Fig. 7　第２面遺構配置図(1/100)

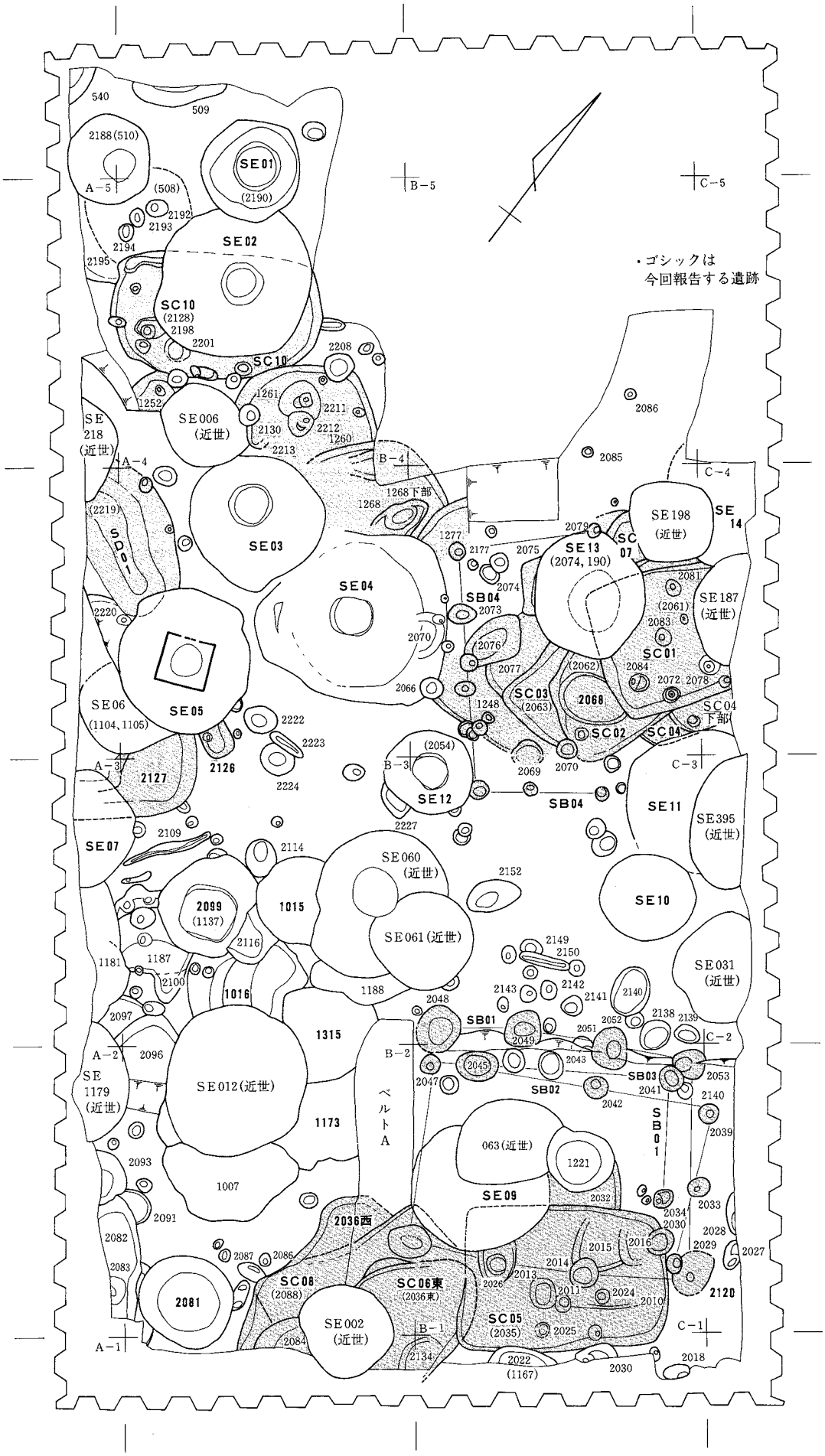


Fig. 8　第３面遺構配置図(1/100)　※アミは弥生後期～古墳前期の遺構

西側では、上部に多量の白磁が一括して廃棄されていた土坑ＳＫ510･513を検出している。

なお第１面においては、少なくない近世の遺構を検出しており、出土遺物も多数で遺物量は調査全体の⅓前後にものぼるが、整理の時間と紙数の制約によりそのほとんど一切を報告より割愛せざるをえない。御寛恕頂きたい。

(2) 第２面の概要（Fig. 7、ＰＬ．１－２）

第１面からおおむね30cm から50cm 下げたレベルで設定した検出面である。前述したように、基盤の砂丘地形や、調査工程の都合上、また実際の遺構の粗密等から、グリッド毎にそのレベルは異なる。調査区南部の一部においては、前述のように第一

面下の整地層（13 世紀）を除いたところで第２面としたが、実際には整地層下面よりも若干下げて遺構検出しているのでそれ以前の遺構も検出している。第２面全体としては、一部 13 世紀の遺構、主体は 11 ～ 12 世紀の遺構、また古代・古墳時代前期の遺構も若干検出している。遺構には、井戸・土坑・柱穴・溝などがある。特に「中世都市博多」の最初期のものである、11 世紀から 12 世紀前半の土坑・井戸の検出が目立ち、遺物も一括資料として良好なものが多い。また調査区中央において、掘立柱建物を１棟復元できた（ＳＢ 05)。なお、第１面から第２面への掘り下げの際には、土層の確認のためにベルトを数ケ所設けている（ベルトＡ～Ｄ、Fig. 5)。また排土置場の確保のため、調査区北端西では第２面を省略し第３面まで下げ、北端東側では第２面以下を省略しているが、実際には調査区北端では古代の砂丘上面まで鋤取りで下がってしまっていることと、北端東側では遺構自体が薄かったので、調査そのものにはあまり影響していない。

(3) 第３面の概要（Fig. 8)

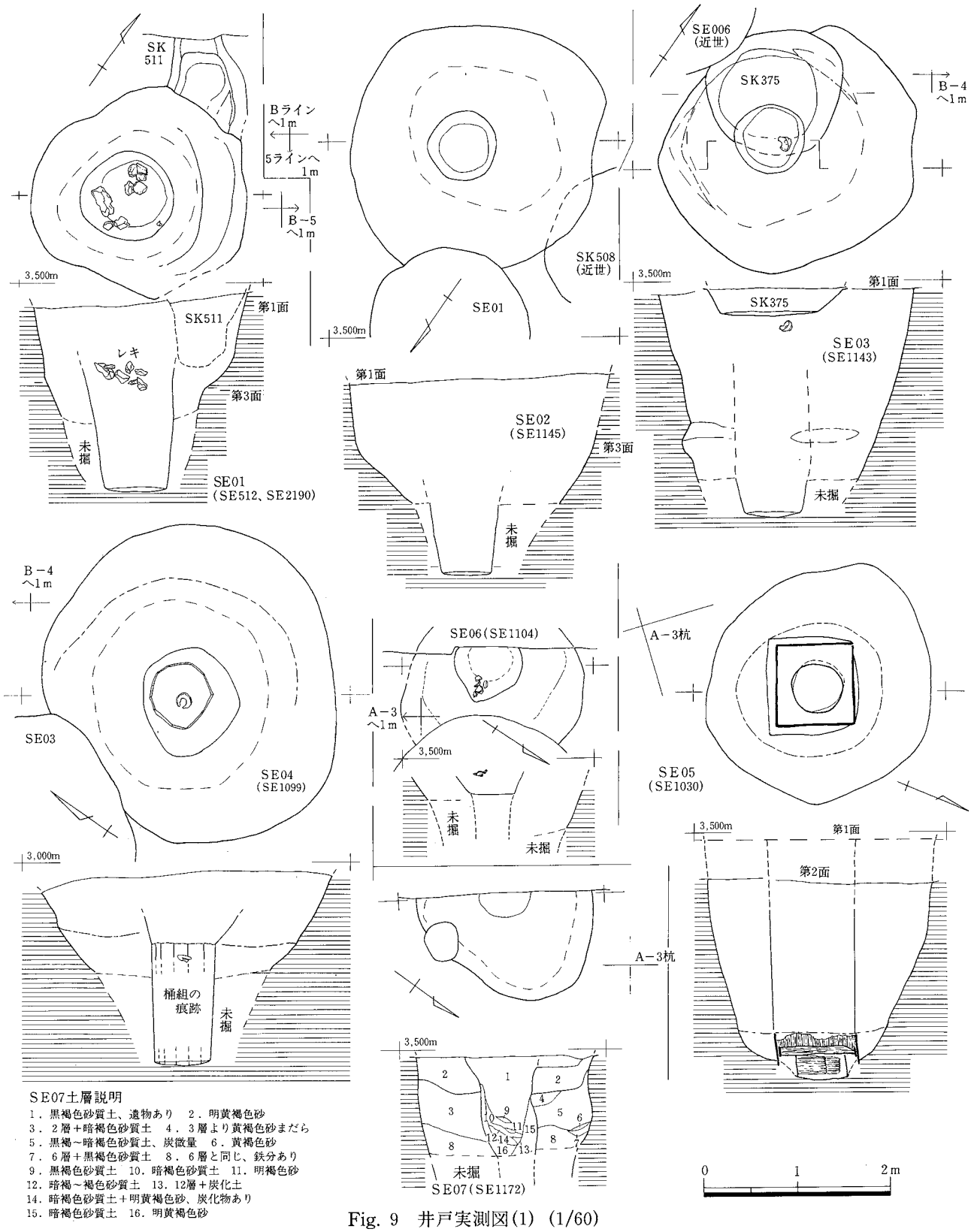
第３面は、古代から中世初期の包含層である暗褐色砂質土とその下部の古代の砂丘を除去したレベルで設定したが（古代の遺構・遺物は比較的少なかった)、これまで述べたような理由から、グリッド毎でそのレベルが異なる。Ａ－１グリッドでは標高 2.4 ｍ、Ｂ－１では 2.2 ｍ、Ａ・Ｂ－２は 2.5 ｍ、Ａ－３は 2.7 ｍ、 Ｂ－３は 2.6 ｍ、Ａ－４・５は 2.7 ｍのレベルが検出面になっている。検出された遺構は、第２面で検出しきれなかった中世初頭（11 世紀後半～ 12 世紀前半）の土坑、古代の土坑・柱穴、古墳時代前期および弥生後期後葉の竪穴住居・土坑・溝・柱穴などである。この面になると、上位の面からの井戸や深い土坑の占める面積が多く、良好な状況で検出された遺構は多くなく、竪穴住居なども断片的な遺構が多い。それでも、比較的多くの古墳初頭前後の遺構と遺物が残存していたのは幸いであった。古墳初頭前後の竪穴住居は、基盤の砂丘地形を反映して、そのレベルも調査区北端のものと南端のものでは、その掘り方底面において 50cm 以上の差がある。なお、弥生後期後葉から古墳前期の竪穴住居群は、２ケ所にその主要な分布があり（ＳＣ 01 ～ 04、ＳＣ 05・06・08)、その中で建て替えられた状況である。古墳前期の掘立柱建物を数棟検出している。ＳＤ 01 は、弥生後期後葉から古墳初頭の溝であるが、ＳＫ－ 2127 と組み合わさって方形周溝墓になる可能性もある。なお、南に隣接する 80 次調査では、97 次調査の最下層の浅黄色細砂に相当する層から弥生中期後半から後期前半の遺構が検出されているが、今回の調査地点では存在しない模様である。

4　古代末から中世の遺構と出土遺物

今回の調査においては、きわめて多数の遺構と遺物を検出したが、整理報告の時間と紙面の都合により、ごく一部しか報告できない。以下、主体を占める古代末から中世（11 世紀以降とする）の遺構と遺物について報告するが、博多の中世を代表する井戸遺構はなるべく大部分を報告するが、他の土坑などについては、特色ある遺構や、良好な一括遺物を出土した遺構に限って報告することにする。これ以外の遺構から出土した特色ある遺物については、本章（Ⅲ）の第７節で一部を紹介する。それ以外の遺構と遺物については、機会があれば順次紹介するということで、御寛恕頂きたい。

(1) 井戸（Fig. 9 ～ 11)

ＳＥ 01（Fig. 9 上段左、ＰＬ．２－５）調査区の北西部第１面で検出した。第１面では 551 号遺構、井戸側の落ち込みを 512 号遺構、第３面では 2190 号遺構としている。掘り方は上面径 2.3 ｍの不整円形、深さは 2.1 ｍを測る。ＳＫ－ 511（12 世紀後半）を切る。井戸側の落ち込みの上層には人頭大



SE07土層説明
1．黒褐色砂質土、遺物あり　2．明黄褐色砂
3．2層＋暗褐色砂質土　4．3層より黄褐色砂まだら
5．黒褐～暗褐色砂質土、炭微量　6．黄褐色砂
7．6層＋黒褐色砂質土　8．6層と同じ、鉄分あり
9．黒褐色砂質土　10．暗褐色砂質土　11．明褐色砂
12．暗褐～褐色砂質土　13．12層＋炭化土
14．暗褐色砂質土＋明黄褐色砂、炭化物あり
15．暗褐色砂質土　16．明黄褐色砂

Fig. 9　井戸実測図(1)（1/60）

の礫が落ち込んでいた。井戸側は残存していない。井戸側内最下層には、鉄製小柄（Fig. 12－12）が出土しており、井戸廃棄の際の祭祀を示すかと考えられる。

ＳＥ 02（Fig. 9上段中）Ａ－４グリッド第２面で検出した。1145号遺構。掘り方は上面径2.6ｍの円形、深さ2.1ｍを測る。北側をＳＥ01に切られる。井戸側は残存していない。最下層は標高1.0

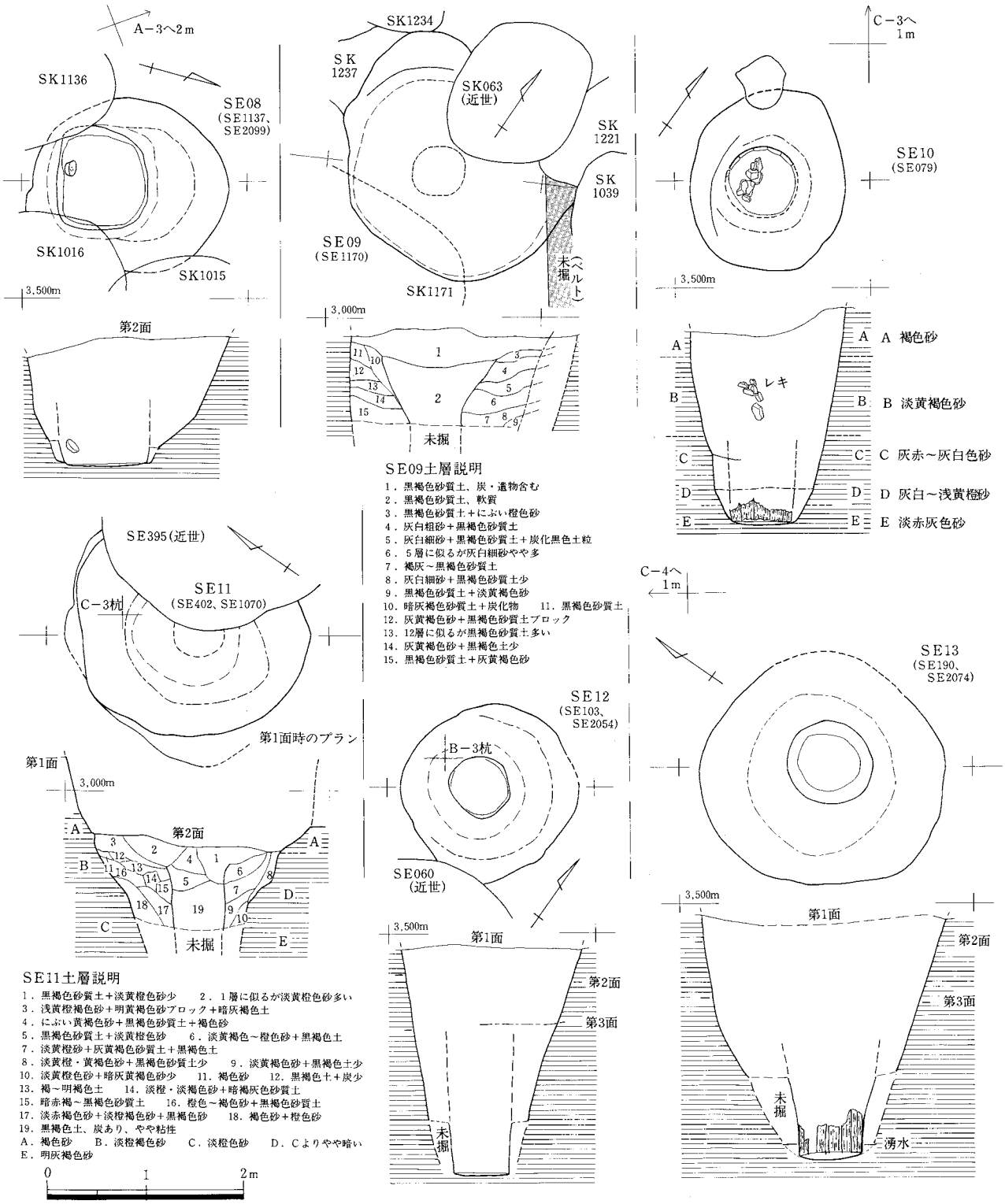


Fig. 10　井戸実測図(2)（1/60）

m前後で、今でもさかんに湧水している。

ＳＥ 03（Fig. 9上段右）Ａ－３グリッド第１面で不十分ながら検出した（461号遺構）。第２面で全体のプランを確認している（1143号遺構）。第１面で375号遺構（14世紀頃）と重複している。掘り方は径2.7ｍの略円形、深さは2.4ｍを測る。井戸側は中央よりわずかに西側に寄る。井戸側は残存していない。東側のＳＥ 04を切る。

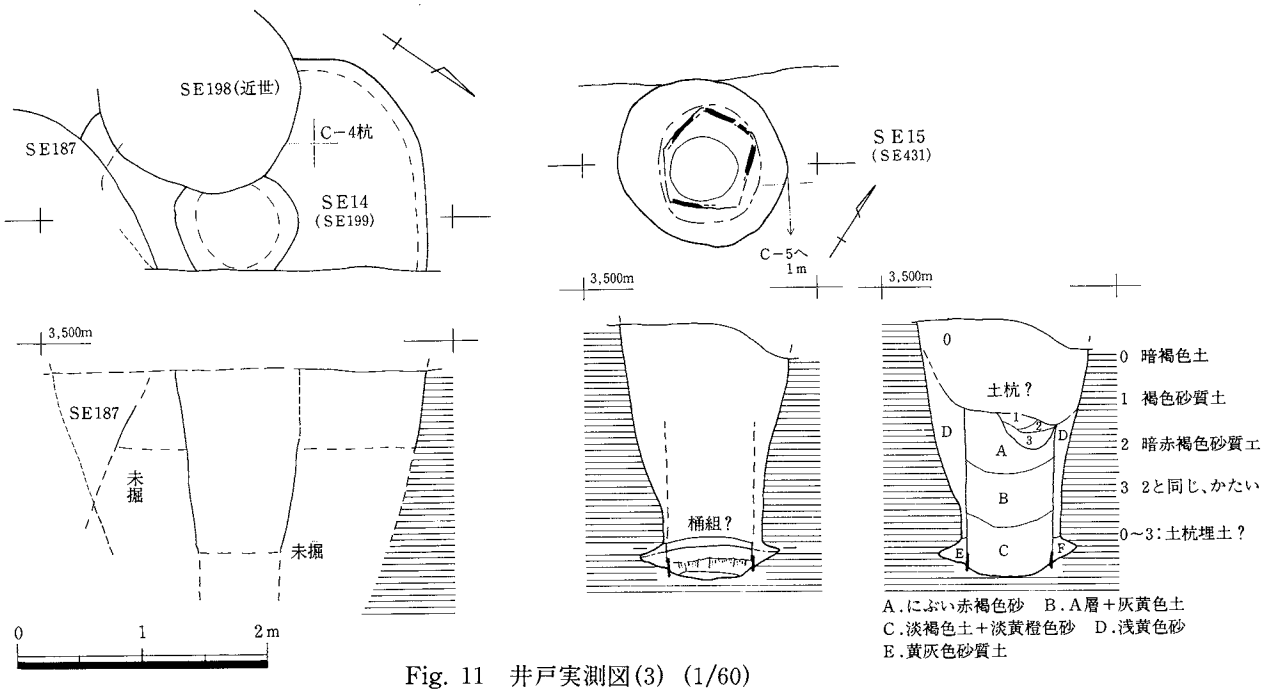


Fig. 11 井戸実測図(3) (1/60)

ＳＥ 04 (Fig. 9下段左) Ａ－３グリッド第２面で検出した（1099号遺構)。西側をＳＥ３に切られる。掘り方は径3.2～3.4ｍの略円形、深さは2.1ｍを測る。井戸側は桶側の残欠の木質および痕跡が辛うじて残っていた。

ＳＥ 05 (Fig. 9下段右、ＰＬ．２－７・８) Ａ－３グリッド第１面で不十分ながら検出し（262号遺構)、第２面で全体のプランを検出した（1030号遺構)。西側でＳＥ 06を切る。第１面で検出されたＳＫ－249はＳＥ 05の方形の井戸側の落ち込みであった可能性が高い。掘り方は径2.5ｍの略円形をなし、深さは2.6ｍを測る。井戸側は、底部に残存していた。内側に幅10cmほどの横板（1段のみ残存)、外側に縦板（腐朽して一枚の幅が良く分からなかった）を組み合わせ、方形の井戸側とする。さらにこの下に、高さ25cm、径50cm 強の曲物を据えて水溜としている。こうした板材の組み合わせによる方形井戸側の各隅に確認されることの多い杭材は確認できなかった。

ＳＥ 06 (Fig. 9下段中上) Ｚ・Ａ－３グリッド第２面で検出（1104号遺構)。井戸側の落ち込みと見られる部分を1105号遺構とした。西側が調査区外となる。他の遺構との重複もあり、プランが不明確にしか確認されておらず、調査区壁際で危険なために完掘していないので、はたして井戸かどうか断言できない。土坑が重複しているに過ぎない可能性もある。一応、井戸の可能性ある遺構として報告する。掘り方の上面径は2.0ｍ強であるが、平面プランは楕円形をなす可能性もある。

ＳＥ 07 (Fig. 9下段中下) Ｚ－２グリッド第１面で不十分ながら検出し（105号遺構)、第２面で広がりを確認した（1172号遺構)。西側が調査区外となる。平面確認では不明確であったが、土層の観察により井戸側の落ち込みを確認できた。掘り方は上面径1.9ｍの略円形である。調査区壁際で危険なため、掘削は途中で止めている。

ＳＥ 08 (Fig. 10 上段左、ＰＬ．１－12) Ａ－２グリッド第２面で検出した（1137号遺構)。第３面では2099号遺構とする。掘り方は上面径 1.8～2.0ｍの略円形、深さ1.4ｍを測る。井戸側は残存していないが、その痕跡として90×100cmの隅丸方形の落ち込みがあり、本来方形板組の井戸側であったと考えられる。また井戸側は掘り方の中央より南に寄っている。ただし、底面の深さが浅く現状では湧水点に達していないので、井戸というよりは溜枡状の土坑かもしれない。

ＳＥ 09 (Fig. 10 上段中) Ｂ－１グリッド第２面で検出した（1170号遺構)。当初北半を1238号遺構としている。また ＳＫ－1171に切られるが、確認時にはこの切り合いを誤認し逆に掘ってし

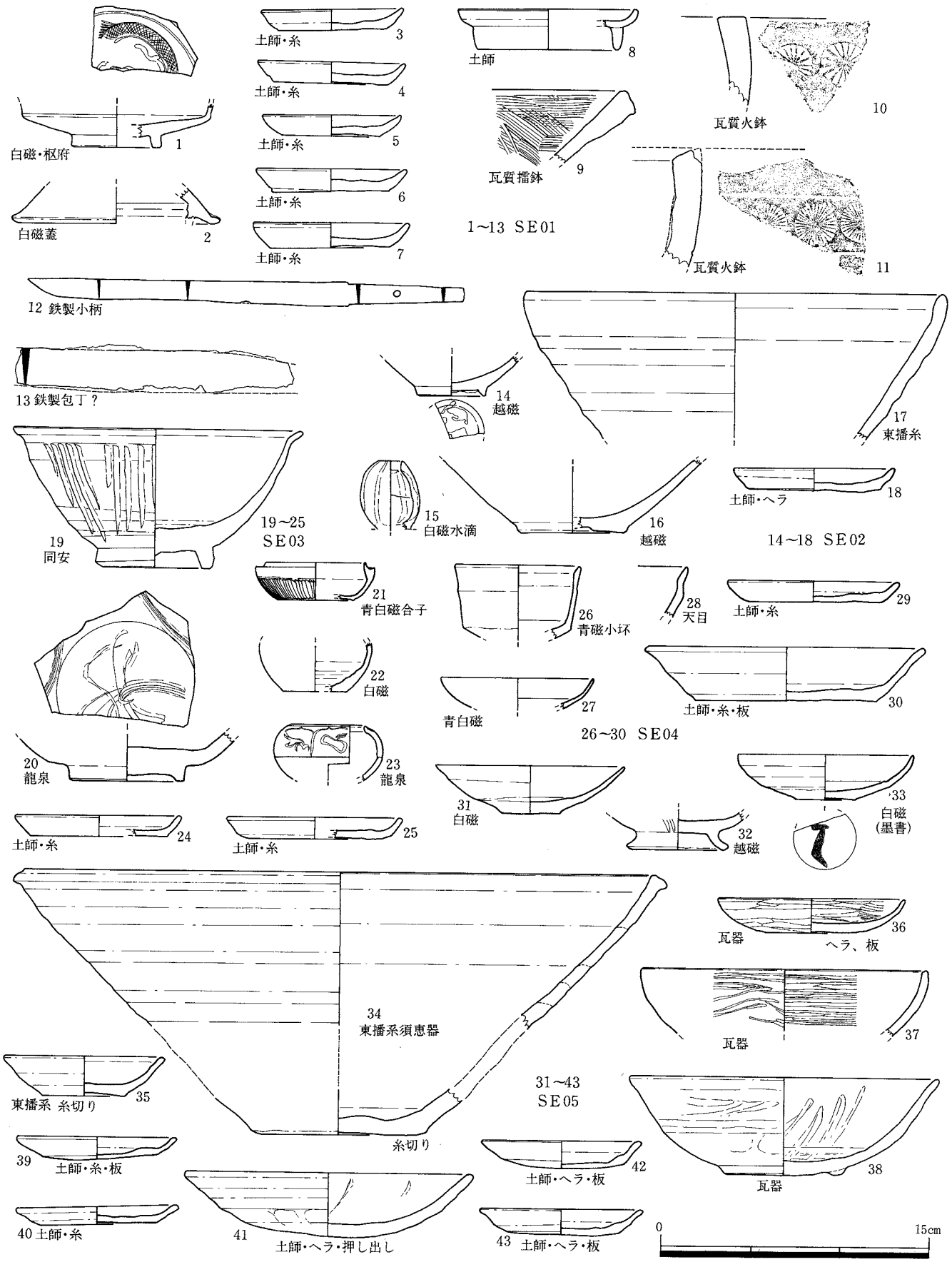


Fig. 12　井戸出土遺物実測図(1)　(1/3)

※23はSK375出土

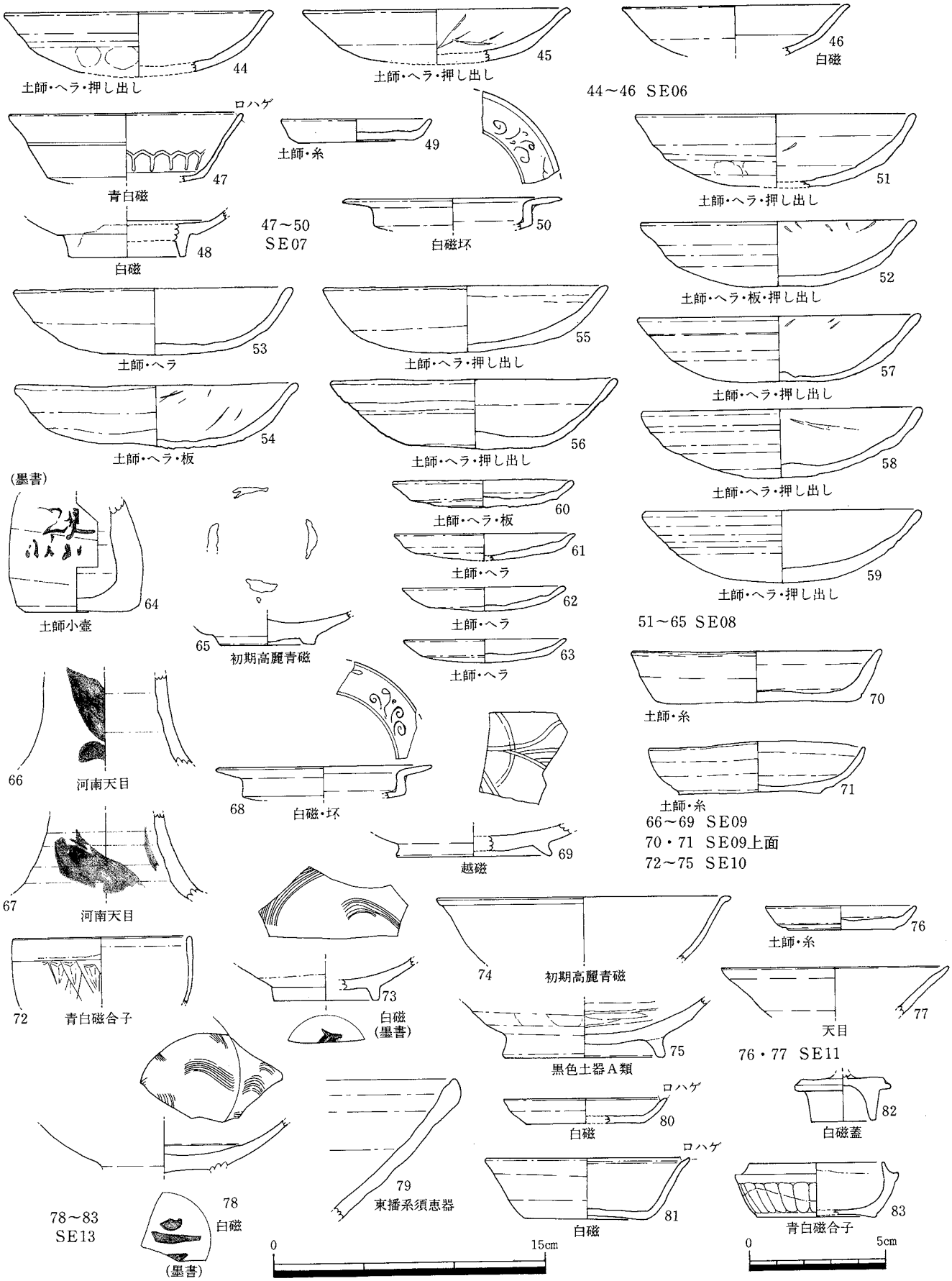


Fig. 13　井戸出土遺物実測図(2)　(1/3、1/2)
※82・83のみ1/2

まっている。北半部を近世の深い廃棄土坑であるＳＫ－063に切られるためと、調査期間の都合により、完掘できなかった。井戸側は土層観察によりその落ち込みを確認している。掘り方は上面径2.5

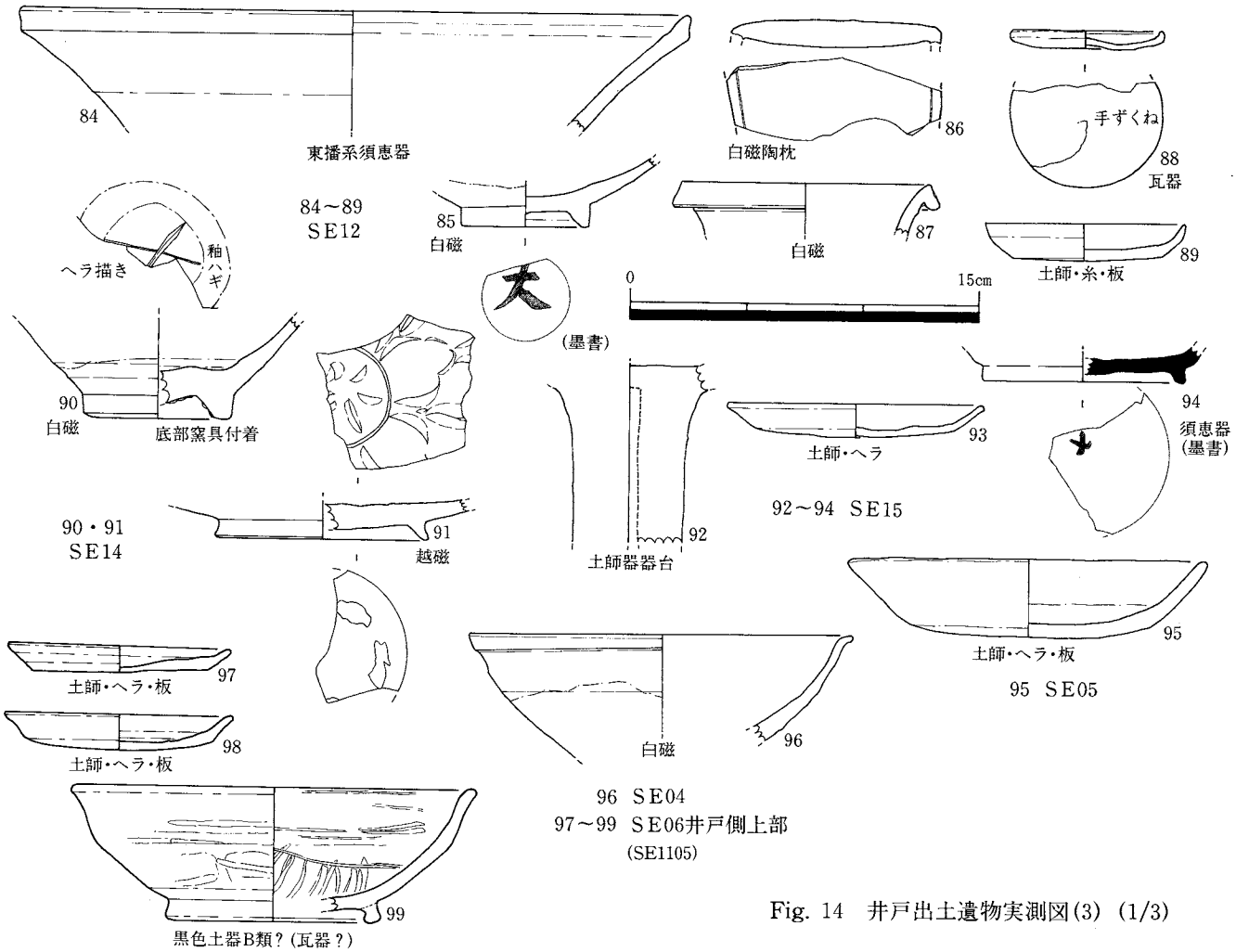


Fig. 14　井戸出土遺物実測図(3)（1/3）

m前後の略円形をなす。

ＳＥ 10（Fig. 10　上段右）Ｂ－２グリッド第１面で検出した（079号遺構）。掘り方は上面径1.6～1.9ｍの楕円形、深さ2.25ｍを測る。井戸側は最下部で、桶側の木質が痕跡的に確認できた。井戸側の落ち込みの中層付近には、10～20cm の礫の落ち込みが見られる。後述するように、出土遺物は土師器の細片も含めて12世紀前半までのもので占められるが、出土量自体が少なく、検出面のレベルからすると、井戸自体はもう少し新しい可能性もある。ただし、遺物から推定される年代と切り合い関係は矛盾しているわけではなく、Ｂ－２グリッドの第１面の検出面がすでに褐色砂質土層であったので、12世紀前半の遺構としてもさしつかえないと一応考える。

ＳＥ 11（Fig. 10　下段左、ＰＬ．３－13）Ｂ－２グリッド北東で検出。第１面で一部確認し（402号遺構）、第２面で全体を確認した（1070号遺構）。東側は近世のＳＥ395により大きく切られており、完掘できなかった。掘り方は上面径2.5ｍの略円形をなす。井戸側はその落ち込みを土層観察により確認している。

ＳＥ 12（Fig. 10　下段中、ＰＬ．２－11）Ｂ－２グリッド北西第１面で検出（103号遺構）。第２面では1134号、第３面では2054号遺構とする。掘り方は上面径1.8ｍの円形、深さ2.4ｍを測る。井戸側は残存していなかったが、その位置は中心よりわずかに北西に寄っている。

ＳＥ 13（Fig. 10　下段右、ＰＬ．２－９・10）Ｂ－３グリッド第１面で検出（190号遺構）。第３面では2074号遺構とする。掘り方は上面径　2.3～2.5ｍの略円形、深さ2.5ｍを測る。井戸側は、下層において部分的に残存しており、桶側である。桶側の各板材の幅は10cm強を測る。井戸側の位置は、中央よりわずかに東に寄るようである。

ＳＥ 14（Fig. 11　左）　Ｃ－３・４グリッド第１面で検出した（199 号遺構）。近世の井戸２基（ＳＥ 194、ＳＥ 187）に大きく破壊され、しかも東半分は調査区外になるため、完掘できなかった。掘り方は上面径 3.0 ｍの略円形である。

ＳＥ 15（Fig. 11　右、　ＰＬ．　２－６）調査区北端東側で検出した（431 号遺構）。ＳＫ－432 と重複関係にあるが、平面の確認では新旧関係をつかめなかった。ただし、検出面以下 0.75 ｍの所で埋土の土質が変わり、ピット状のプランが東寄りに検出できたことから、ここまでがＳＫ－432 であった可能性が高い。井戸の掘り方は上面径 1.4 ｍの略円形、深さ 2.1 ｍを測る。井戸側は、底面付近で木質の残欠を検出した。腐朽が著しく痕跡的であるので確実なことは言えないが、桶側もしくは板材による多角形（五角形？）の井戸側であったようである。

・井戸出土遺物（Fig. 12 ～ 14）

ＳＥ 01 出土遺物（Fig. 12 － 1 ～ 13）1・13 は掘り方下層、2 ～ 8・11 は掘り方上層、9・10・12 は井戸側内最下層出土。**1** は元代の**枢府白磁**の高台付碗。**2** は**白磁の合子蓋**であろうが天地逆かもしれない。**3 ～ 7** は**土師器小皿**で、口径は 7.8 ～ 8.8cm を測る。底部は全て回転糸切り（以下単に糸切りとする）。**8** は高台付の**土師器小皿**。口径 9.8cm、底部糸切りか。**9** は**瓦質擂鉢**の破片。**10・11** は**瓦質火鉢**の破片で口縁直下に菊花文を連続的に施す。いずれも暗灰色、形態的には古相のもの。**12** は**鉄製小柄**で全長 24.3cm。全体に細身。茎に目釘穴が一つ。非常に残りが良い。13 は鉄製の包丁か？背が先端に向かって丸くなる。残存長 15.5cm、幅 2.35cm。銹化し残りは悪い。1・10・11 の時期が 13 世紀末から 14 世紀前半で、土師器小皿は若干古い傾向があるか。ＳＥ 01 の時期は、総合的に見て 13 世紀末から 14 世紀初頭であろう。なおＳＥ 01 からは、取瓶や鋳型、炉壁の破片、銅滓が少なからず出土しており、時期的にも調査区南半の銅製品鋳造遺構群と共存していたのであろう。

ＳＥ 02 出土遺物（Fig. 12 － 14 ～ 18）14・16 は掘り方上層、15・17 は掘り方下層、18 は井戸側内最下層出土。**14・16** は**越州窯青磁碗**、16 は 9 世紀代、14 は 11 世紀前葉。**15** は**白磁水滴**。**17** は**東播系**（？）須恵器鉢でも古相のものか。赤味のある灰色を呈する。**18** は口径 9.0cm の**土師器小皿**で、底部ヘラ切り。17・18 より、ＳＥ 02 は 12 世紀前半か。

ＳＥ 03 出土遺物（Fig. 12 － 19 ～ 24）19・20 は井戸側内、他は掘り方内出土。**19** は**同安窯系青磁碗Ⅱ類**。口縁が外反屈曲。見込みは輪状に釉ハギ。外面の櫛描きは非常に粗い。釉はオリーブ黄緑色、胎土は灰色。**20** は**龍泉窯系青磁碗Ⅰ類**。**21** は**青白磁合子**。**22** は**白磁小壷**。**23・24** は**土師器小皿**で、口径 9.2 ～ 9.8cm。底部糸切り。ＳＥ 03 は総体的に 12 世紀後半～末の範疇か。なお 25 はＳＫ－375 出土の龍泉窯系青磁小壷。型押しの陽刻がある。元代（13 世紀後葉～ 14 世紀）のもの。

ＳＥ 04 出土遺物（Fig. 12 － 26 ～ 30、Fig. 14 － 96）26 は掘り方出土、28 は井戸側内最下層、96 は井戸側内上層、27・29・30 は上部遺構または埋土（第１面）出土。**26** は**青磁の小形坏**。淡オリーブ色。類例不詳。**27** は**青白磁皿**。宋代か。**28** は黒色不透明釉の**天目碗**。福建産か。**29** は**土師器小皿**で、口径 9.6cm、**30** は**坏**で口径 15.6cm。**96** は**白磁碗Ⅵ類**の範疇。外面の施釉は中位までで、釉の色調は青灰色気味。ＳＥ 04 の時期は 29・30 を下限とするが、ＳＥ 03 との関係から、12 世紀後半か。

ＳＥ 05 出土遺物（Fig. 12 － 31 ～ 43、Fig. 14 － 95）31・33・34・39 ～ 43 は井戸側内、95 は第１面井戸側落ち込み内、他は掘り方出土。**31** は**白磁平底皿Ⅱ類**、**33** は同じく**Ⅲ類**。外底面に**墨書**あり。**32** は**越州窯青磁碗**で 10 ～ 11 世紀。**34** は**東播系須恵器**の鉢。底部糸切り。内面は使用痕で、平滑化。暗灰色。**35** も**東播系の小皿**。口径 9.0cm。他に比べやや新相か。**36** は**畿内系？の瓦器小皿**で、手ずくね成形の可能性あり。**37** は**楠葉系瓦器椀**。口縁端部に微妙な凹線。ミガキが細かい。**38** は**在地の瓦器椀**。雑なミガキ。**39 ～ 43・95** は**土師器の小皿と坏**。小皿は口径 8.8 ～ 9.2cm で、底部糸切

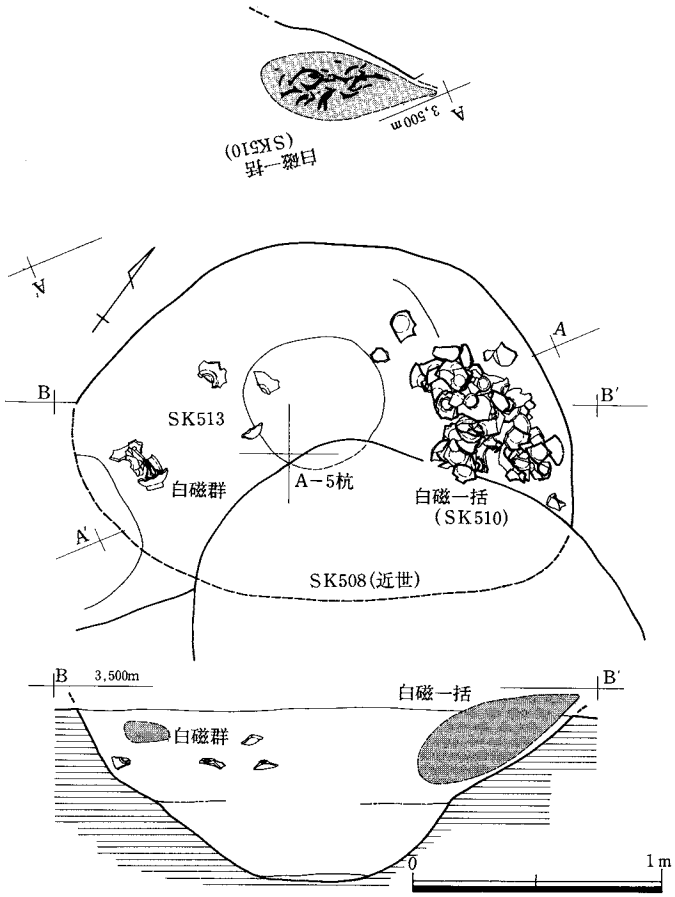


Fig. 15　SK−510・513実測図(1/30)

りとヘラ切りが半々。41は底部押し出しの丸底坏。内面に工具のコテあて痕。底部ヘラ切り。95は口径15.5cmの坏で底部ヘラ切り。ＳＥ05は、土師器から12世紀前半ないし中頃の時期であろう。

ＳＥ06出土遺物（Fig. 13－44～46、Fig.14－97～99）44～46は掘り方(1104号遺構)、97～99は井戸側落ち込み(1105号遺構)の出土。**44・45**はいずれも底部押し出しの**丸底坏**で、ヘラ切り。**46**は**白磁の皿**だが、11世紀代の古相の型式という教示を受けた。**97・98**は**土師器小皿**。口径9.4～9.8cm。底部はいずれもヘラ切り。**99**は**瓦器椀**だが焼成やや不良でむしろ黒色土器Ｂ類とすべきか。ＳＥ06の時期は、総体的に11世紀末～12世紀初頭頃であろう。

ＳＥ07出土遺物（Fig. 13－47～50）**47**は**青白磁の腰折皿**。口ハゲ。**48**は広東系の**白磁碗0類**。**49**は口径8.2cm**土師器小皿**。底部糸切り、板状圧痕。**50**は**白磁の坏**。軟陶質。47・49は13世紀末～14世紀前半で、遺構の時期を示すと思われるが、いずれも最上層出土で、下限を示すと考えた方が良い。ＳＥ07は遺物少なく時期比定が不明確。

ＳＥ08出土遺物（Fig. 13－51～65）51・57～59・61は井戸側内、53～56・60・64は井戸側内最下層、他は掘り方内出土。**51～59**は**土師器の坏**で、おおむね丸底坏ないし丸底を指向する形態。口径15.2～15.9cm。**60～63**は**土師器小皿**。口径9.0～10.1cm。以上はいずれも底部ヘラ切り。**64**は**土師質の小壷**で、外面に**墨書**。調整はヨコナデと、外面下半ケズリ。底部工具ナデ。**65**は**初期高麗青磁碗**か。内底に白土の目跡。高台畳付は釉ハギ、目跡あり。オリーブ緑色。胎土は粗い。ＳＥ08は、土師器から11世紀後葉～末の遺構であろう。

ＳＥ09出土遺物（Fig. 13－66～69）**66・67**は**河南天目の瓶**（ＰＬ．8－55）。よく似ているが別個体。いずれも黒褐色の不透明釉の上に茶褐色の施文。内面は露胎。軟陶質。12世紀前半頃。68は白磁（やや軟陶質）の坏。屈曲する口縁の内面上方に施文。化粧掛けあり。50と同一とも思われるが、厚みが微妙に異なり接合しないので別個体か。11世紀後半頃。**69**は**越州窯青磁碗**。外底に目跡あり。北宋前半期。70・71はＳＥ09の上部で重複するＳＫ－1171の土師器坏。いずれも底部糸切り。口径13.8および12.0cmを測る。ＳＥ09は遺物少なく、66～69の資料では遺構の時期の確証が持てず、ＳＫ－1171が13世紀中頃？（後述）であり、これ以前で、66・67の12世紀前葉以降としか言えない。

ＳＥ10出土遺物（Fig. 13－72～75）**72**は**青白磁合子**の身。**73**は**白磁碗Ⅵ類**。外底に**墨書**。**74**は**初期高麗青磁**の碗。オリーブ緑色透明釉。**75**は最上層出土の**黒色土器Ａ類**の高台付椀。内面のみミガキ。以上、75のみ古相の時期だが、他は11世紀後半から12世紀前半。ＳＥ10は遺物少量、土師器も細片のみで時期比定には躊躇する。前述のように遺物の時期より若干新しい遺構の可能性あり。

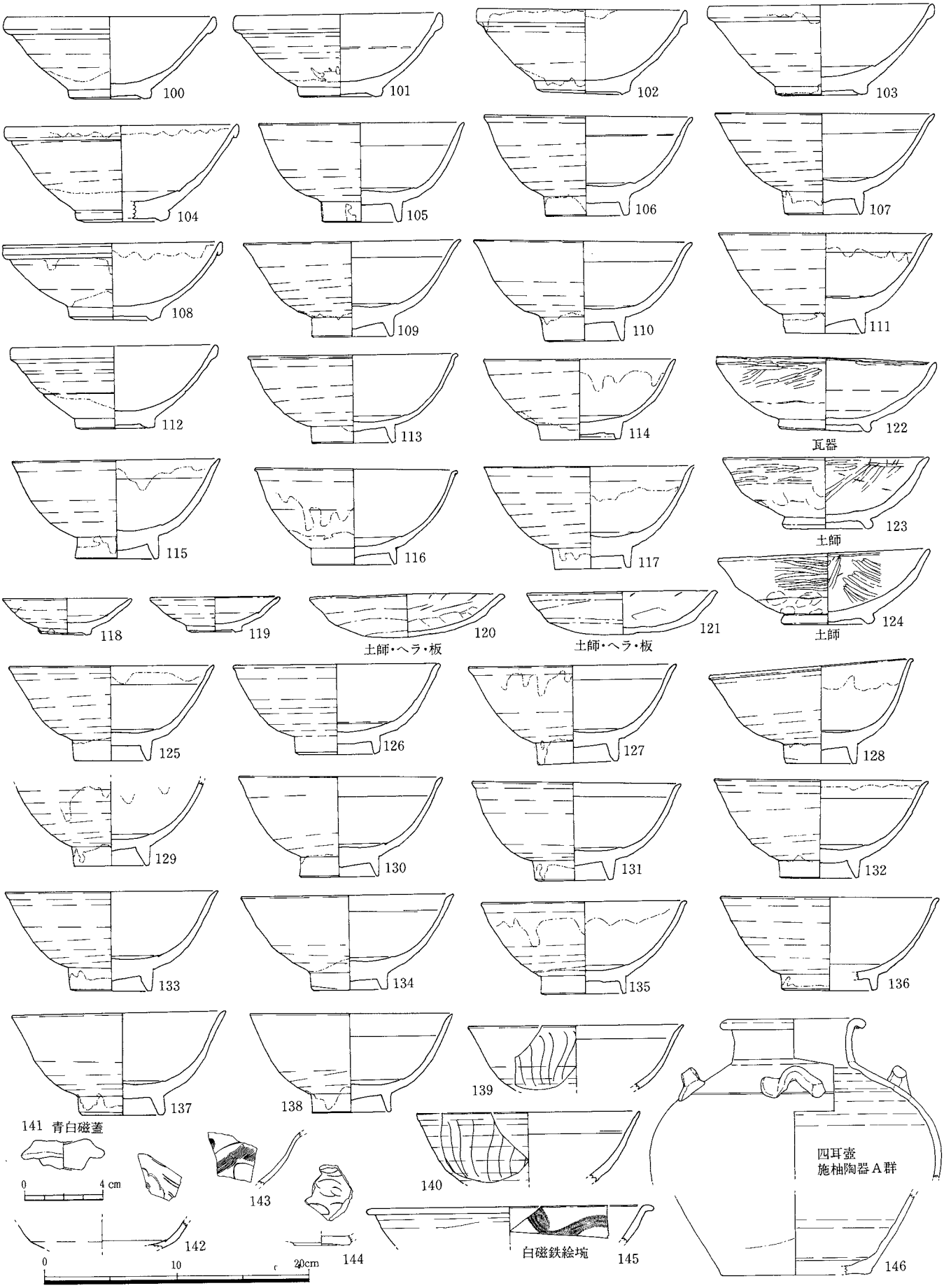


Fig. 16　SK－510・513出土遺物実測図(1)　(1/4、1/2)

※100～119、125～140、143～145白磁、141のみ1/2

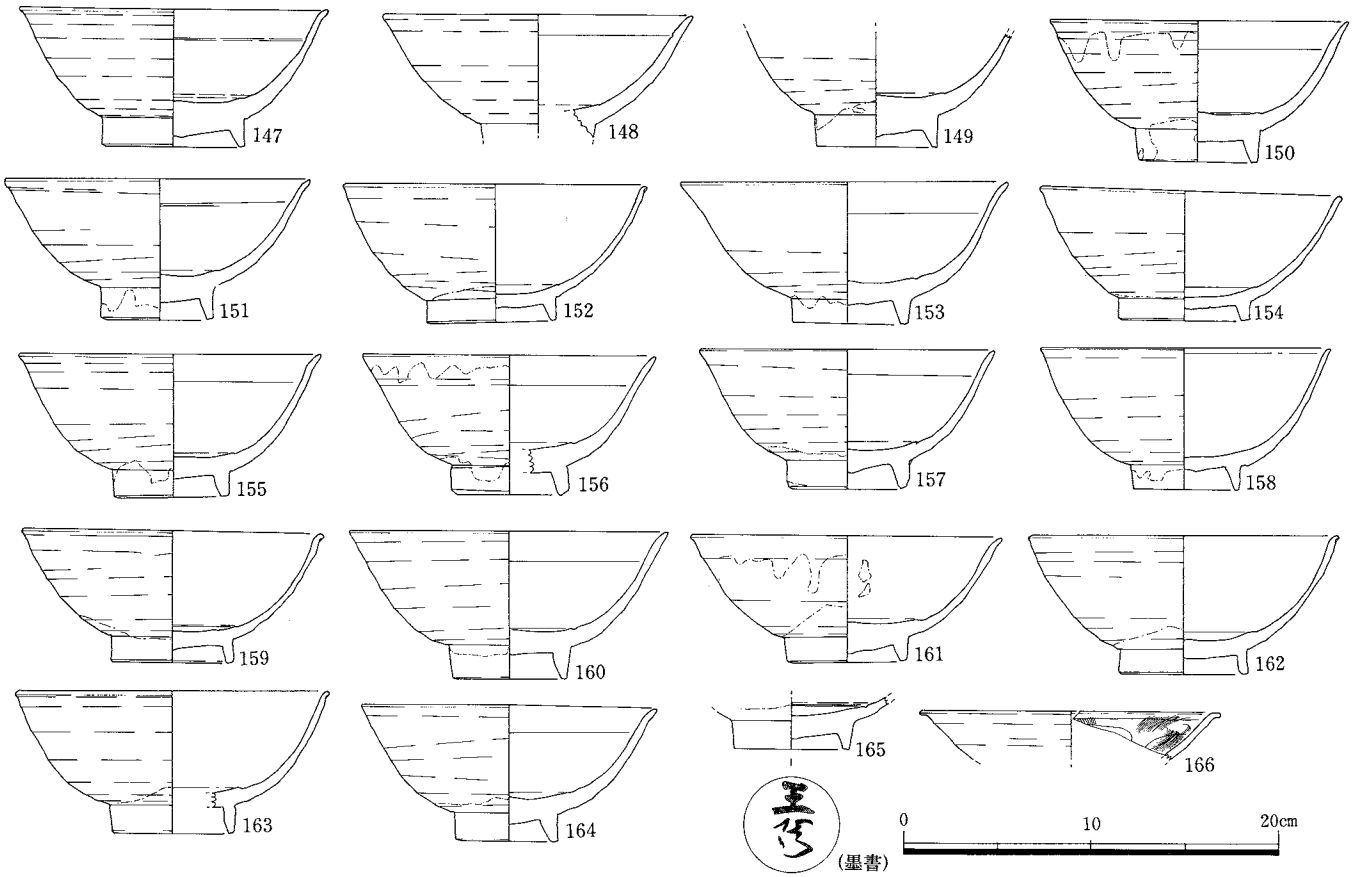


Fig. 17　SK－510・513出土遺物実測図(2)　(1/4)
※全て白磁

ＳＥ 11 出土遺物(Fig. 13－76・77) **76** は**土師器小皿**で、口径8.2cmで13世紀中頃前後のもの。**77** は**天目碗**で、漆黒色の釉。時期は76と矛盾しない。ＳＥ11は、遺物が少量なため注意を要するが、上記の時期で大過あるまい。

ＳＥ 12 出土遺物(Fig. 14－84～89) 88は井戸側内下層、85～87・89は掘り方から出土。84は井戸側の内外の破片が接合。**84** は**東播系の鉢**。**85** は**白磁碗Ⅱ類**、外底に**墨書**。**86** は**白磁の陶枕**。**87** は**白磁の壷**。**88** は**畿内系の瓦器小皿**で、外底に粘土板手ずくね成形痕。底部中央が内に凹む。口径

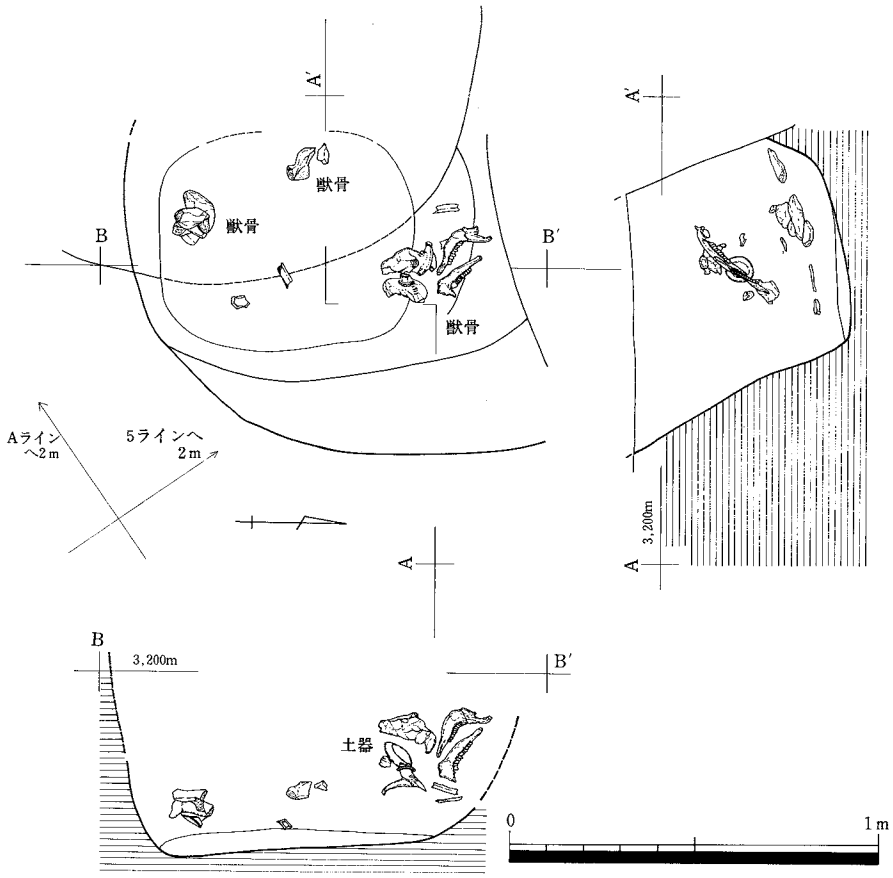


Fig. 18　SK－556実測図(1/20)

6.6cm。**89**は**土師器小皿**、口径8.6cm。底部糸切り、板状圧痕。84・89から、ＳＥ12は13世紀初頭～前葉であろうか。

ＳＥ13出土遺物（Fig. 13－78～83）78・79は井戸側内、81・83は井戸側内下層、他は掘り方出土。**78**は**白磁の高台付皿Ⅲ類**。外底に**墨書**。**79**は**東播系の鉢**。**80・81**はいずれも**口ハゲの白磁**。**82**は**白磁の蓋**。つまみが欠損している。**83**は**青白磁合子**の身。ＳＥ13の時期は、80・81から13世紀後半～14世紀前半の中にあろう。

ＳＥ14出土遺物（Fig. 14－90・91）いずれも井戸側内出土。**90**は**白磁碗Ⅸ類**。内底に「×」のヘラ描き、同心円状の釉ハギあり。12世紀前半。**91**は**越州窯青磁の皿**。内底はヘラ彫花文、外底には目跡がつく。淡オリーブ黄緑色。五代から北宋前半期のもの。ＳＥ14は、遺物少なく時期比定困難。これら以外に龍泉窯系青磁の破片があり、12世紀後半頃の可能性がある。

ＳＥ15出土遺物（Fig. 14－92～94）**92**は**土師器の器台**。外面は指頭圧痕ではなくヨコナデを施す。11世紀頃。**93**は**土師器小皿**。底部ヘラ切り。口径11.0cm。11世紀前半。**94**は高台付の**須恵器坏身**。高台が目立たず、9世紀初め頃か。外底に**墨書**。なおＳＥ15では**古代の瓦**片が少なからず出土した（Fig. 45－530・531他）。ＳＥ15の時期は、92・93などより、11世紀前葉～中頃となるか。

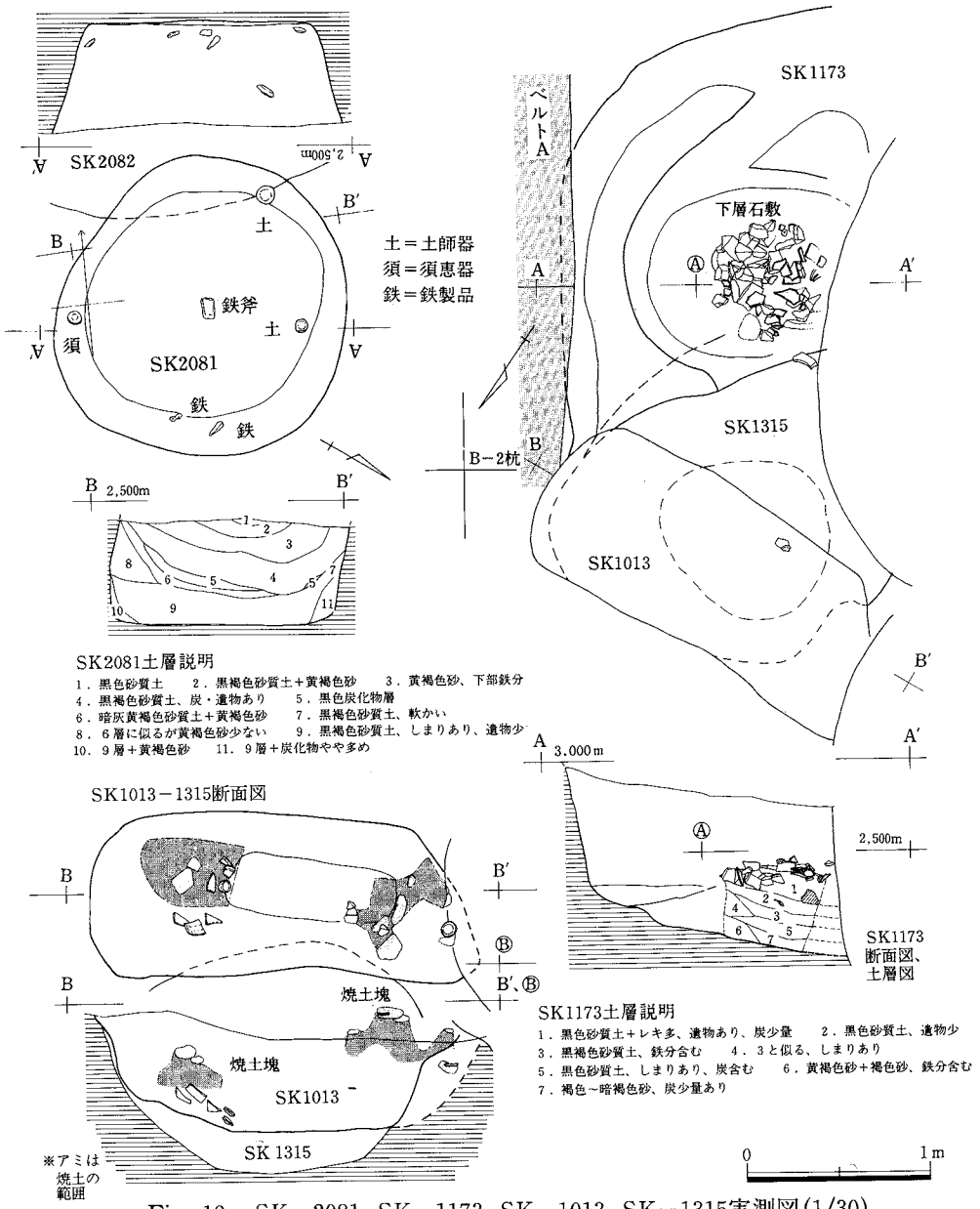
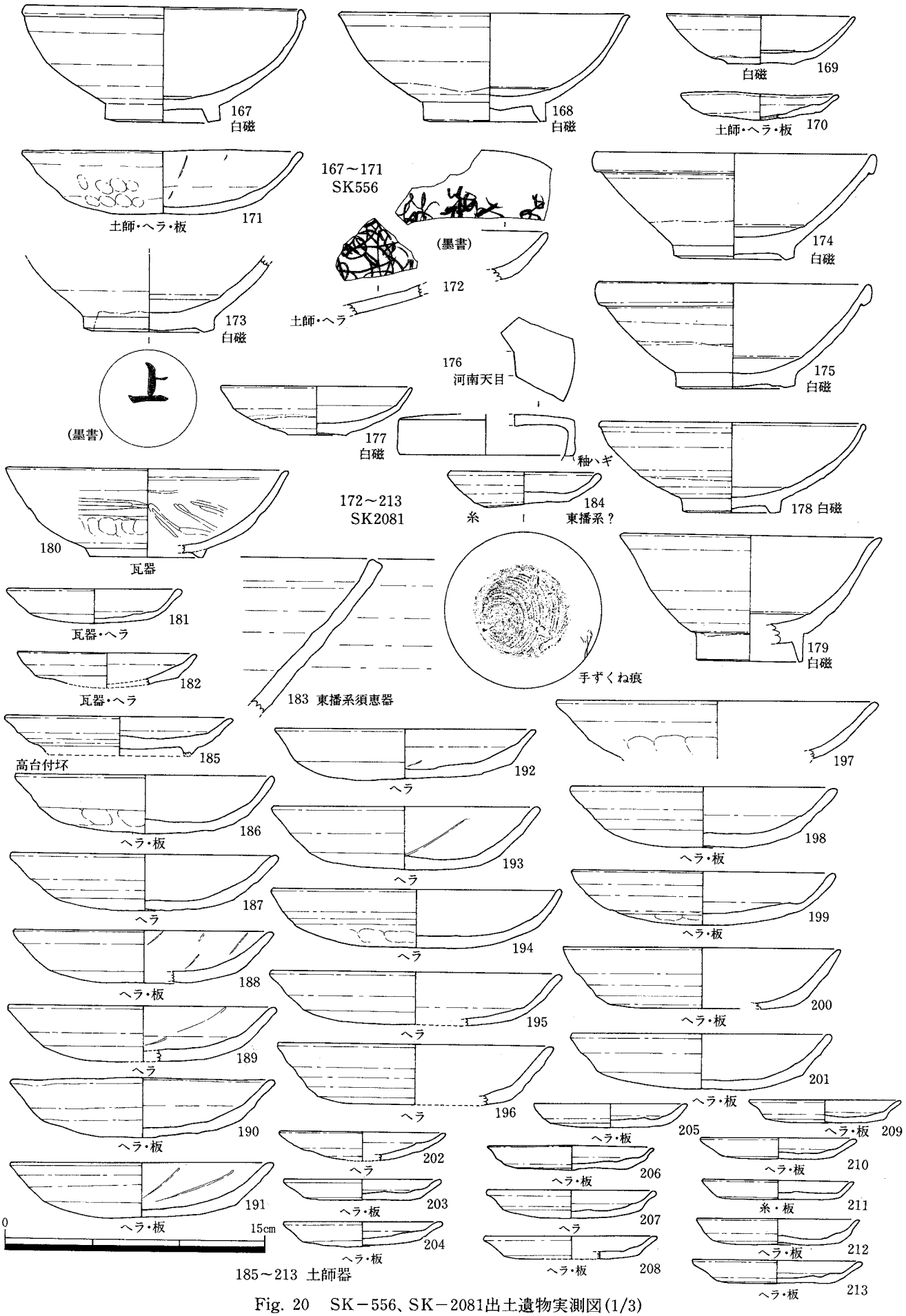


Fig. 19　SK－2081、SK－1173、SK－1013、SK－1315実測図(1/30)



185～213 土師器

Fig. 20　SK－556、SK－2081出土遺物実測図(1/3)

(2) **土坑**（Fig. 15・18・19・23・24・27・28）

ＳＫ－510・513(Fig.15、ＰＬ.3－14) 調査区北端西側第1面で検出した**白磁を多量に出土**した遺構。初め東側の白磁集中部を単独の遺構としたが(ＳＫ－510とする)、精査後全体として上面で東西2.05m、南北1.5mの楕円形、深さ0.75mの一つの土坑であることが判明した。以下の記述では、白磁集中部と土坑東部上半層をＳＫ－510、他をＳＫ－513とする。南側は近世の廃棄土坑ＳＫ－508により大きく破壊されている。本来ＳＫ－510の部分に帰属する白磁が、遺構の壁の地山砂の崩落によってＳＫ－508に流れ込んでいる状況が看取されたため、Fig.17には一部そうした遺物も掲載した。ＳＫ－510は、ＳＫ－513がある程度埋没した後に、東上面から土坑の中央に向かって一気に白磁群が捨てられた出土状況である。ＳＫ－510の白磁群は、残存率が高いものも多いが、それ以上あまり接合せず、口縁部や底部のみの破片も少なくないので、どこか別の場所で破損したものが集められ廃棄されたようである。白磁の大半は碗のＶ類で、一部碗Ⅳ類、わずかに小皿等がある。ＳＫ－513には土師器なども出土した。底部によって白磁碗の個体数を数えると、163個体(以上)となる。内訳は、ＳＫ－510が87、ＳＫ－513が49、ＳＫ－508に流れ込んだものが27である(互いに接合するものは1個体とし、ＳＫ－510のカウントを最優先し、次にＳＫ－513を優先した)。層位的には差があるが、ＳＫ－510出土の破片と、ＳＫ－513の上～最下層までの破片が接合する例が多く、型式的に同一で、ＳＫ－510・513出土遺物は、一括資料として扱えよう。

ＳＫ－510・513出土遺物（Fig. 16・17）108・118・119・140～142・144・147～151・153～157・159・160・163・164はＳＫ－513出土、113・114・134・146・152・158・162はＳＫ－510・ＳＫ－513各出土の接合、120～124・139・145・161・163はＳＫ－513最下層出土、165・166はＳＫ－508への流れ込み、他は全てＳＫ－510出土である。**100～102・108・110**は**白磁碗Ⅳ－1類**、**103・104**は**Ⅳ－2類**、**105～107・109～111・113～117・125～138・147～165**は**Ｖ－1類**、**139・140**は**Ｖ－2類**、**143**は**Ⅵ－2類**（？）、**142**は**広東系白磁碗**、**145**は**白磁鉄絵碗**である。**118・119**は**白磁高台付皿Ⅱ類**、**166**は**高台付皿Ⅲ類**、**144**は**平底皿0－Ⅰ類**か。**141**は**青白磁の壷の蓋**。**146**は施釉陶器Ａ群の**四耳（双耳？）壷**で、オリーブ暗緑色。肩部は沈線。**120・121**は**土師器坏**。口径14.5～15.0cm。いずれも底部ヘラ切り。**122**は在地の**瓦器碗**。ミガキはやや雑。焼成もやや甘い。**123・124**は瓦器碗に似せた**土師器の高台付椀**。一部灰色を呈するが、土師質の焼成。ミガキもやや雑。**165**は、外底に「王□」の**墨書**（ＰＬ．8－52)。ＳＫ－508出土だが、ＳＫ－510に本来帰属する。博多における白磁の大量廃棄例には、これまで墨書土器は含まれていないようだが、本資料はこれを覆す。以上のＳＫ－510・513の遺物群は、11世紀末頃の一括資料とすることができよう。

ＳＫ－556（Fig. 18、ＰＬ．4－20）調査区北端西側第１面で検出。北側をＳＥ01に、西をＳＫ－557に大きく切られるため本来の形状は不明確であるが、上面径1.2ｍ前後の円形土坑か。深さは0.6ｍである。この土坑には、**猪・鹿等の獣骨**が下層において多く廃棄されていたことが特筆される。なお獣骨については第Ｖ章の鹿児島大学教授西中川　駿の分析を参照して頂きたい。

ＳＫ－556出土遺物（Fig. 20－167～171）167・168・171は最上層で出土。他は下層の獣骨と同じレベルで出土。**167～169**は**白磁**で、それぞれ**碗Ⅱ－1類**、**碗Ⅱ－2類**（Ｖ類？）、**平底皿Ⅱ類**。170は土師器小皿だが、底部焼成前穿孔。170・171ともに底部ヘラ切り。法量から12世紀初頭頃か。白磁も同様の時期で問題ない。ＳＫ－556からは**ガラス玉**も出土(Fig. 44－2028)。径1.15cm、深緑色、巻付法か。

ＳＫ－2081（Fig. 19左上、ＰＬ．3－15・16）第３面Ａ－１グリッド南西隅で検出。上面径1.25ｍの略円形、深さ0.5ｍ弱を測る。西側をＳＫ－2082に切られる。遺物は比較的多く出土。中位に炭化物層（5層）があり、これを境に上・下層に分離できる。底面直上に、鉄製品の遺棄が見られた。後述するように12世紀初頭の遺構であり、上層の廃棄は型式的に漸移し、12世紀前葉頃である。

ＳＫ－2081 出土遺物（Fig. 20－172～213）

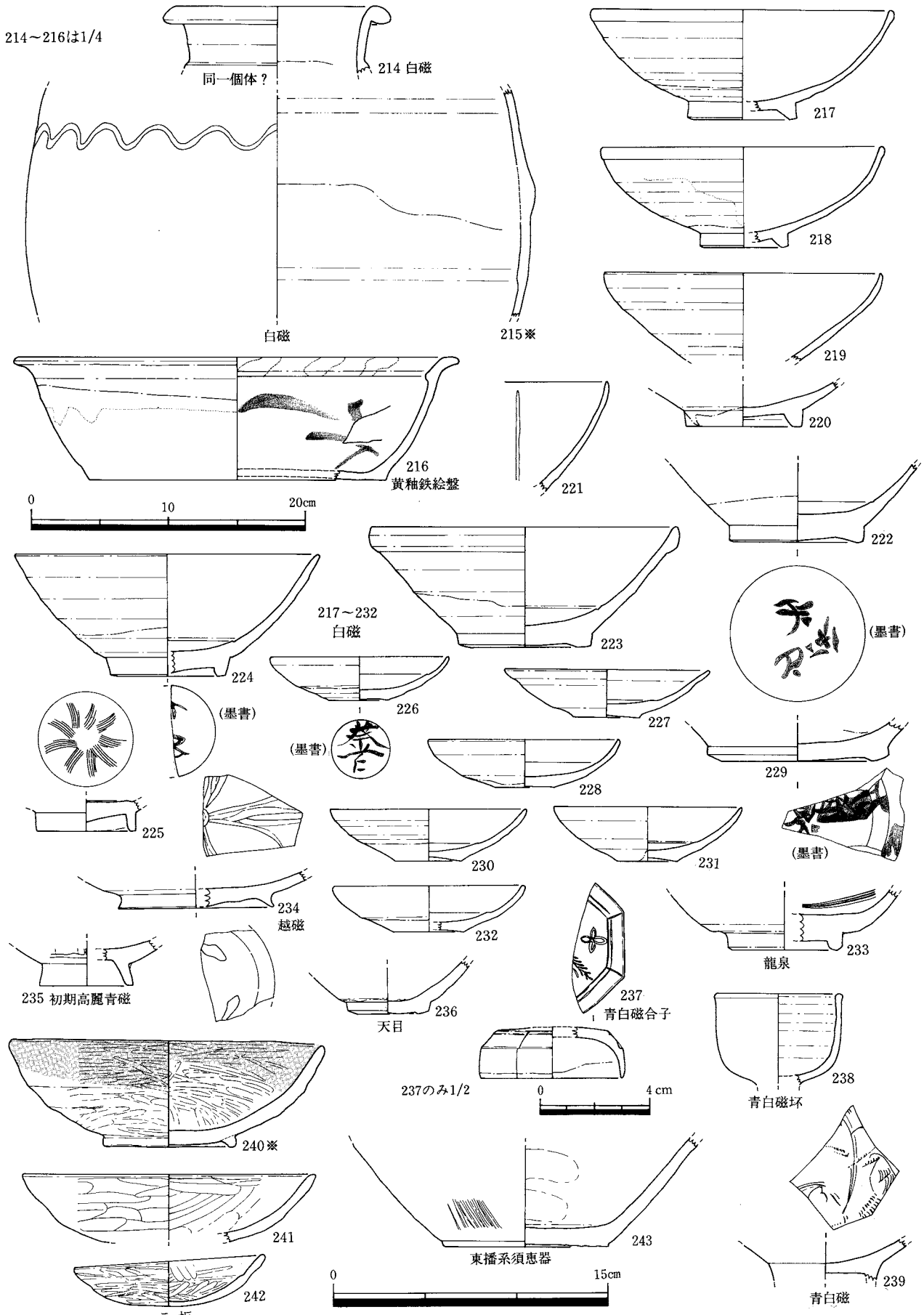


Fig. 21　SK－1173出土遺物実測図(1)（1/3）

※はSK1315上層の可能性あり

184・190・206は最下層、194・197・211は下層、203・210は上面出土。他は土坑一括であげている。**186～213**は**土師器の坏・小皿**であるが、底部の調整は大多数がヘラ切りである（1点のみ糸切りの小皿を図示した）。土層確認のためのベルト内のものは層位ごとにあげているが、図示できなかった破片資料を含めてそれらの個体の底部調整を見ると、最下層～下層では糸切りが2点、上層では同じく5点前後と微増し、土坑確認時の上面資料では逆に糸切りがヘラ切りを凌駕する。土坑全体を層位ごとに調査することができなかったので確実なことは言えないが、下層から上層にかけて12世紀初頭から前葉にかけての微妙な型式的変化が反映していた可能性がある。また、少なくともこの土坑の資料では、小皿の方が糸切りが早く出現する傾向がある。**172**は土師器の坏だが内面に**墨書**が広がる。判読不能だがまじないに関係するものか（ＰＬ.8－53）。185は高台付の坏。口径13.2cm。**173～175・177～179**は**白磁**。**173～175**は**碗Ⅳ類**。**177**は**平底皿Ⅲ類**。**178**は**碗Ⅱ類**で**広東系**のもの。**179**は**碗Ⅴ類**。**176**は黒釉の**河南天目**の蓋。天井部に方形？の透かしがある。口縁部の端面は釉ハギ、内面露胎。**180～182**は**瓦器**の碗と小皿。いずれも在地系だが、図示できなかった資料で畿内系の瓦器碗の底部あり。**183・184**は**東播系須恵器**の鉢と小皿。184の底部は糸切りと板状圧痕。以上の土師器以外の資料も、土師器からする年代観と矛盾せず、または白磁の組み合わせでは古い傾向さえあり、ＳＫ－2081は12世紀初頭頃の遺構であろう。なお、土坑の底部には鉄製品がいくつか出土している（Fig.44－2031・32等）。

ＳＫ－1173（Fig.19右、ＰＬ.3－17）Ａ－1グリッド第2面で検出。西側を近世のＳＥ－012により大きく切られているが、上面径2.4ｍの略円形、深さ0.8ｍ強を測る。中央部で、底面から0.3ｍの高さに石敷状の施設があり、一部の遺物は石の間にはさまるように出土した。石の一部は焼けていた。

ＳＫ－1173出土遺物（Fig. 21、22－244～264）遺物は土坑全体に散漫に出土したが、上部と石敷部に出土の中心がある。上部を上層、石敷部までの間を中層、石敷より下を下層とする。上層出土遺物については、ＳＫ－1315との切り合いを初め誤って調査したので、出土位置によってはＳＫ－1315に帰属するべきものもある。222～224・229・233・237・239～242・245・246・248～250・253・254・256～261は上層、217・218・221・225～227・231・232・236・244・252は中層、214～216・238・247・251は石敷部、219・220は下層、243・255・262～264は上面（上部整地層含む）、他は一括である。土師器は、ヘラ切りが大部分であるが、中層で糸切りが一部出現し（244の坏は糸切り後ハケメ状の調整）、上層では小皿に糸切りが多くなり（坏はヘラ切りが多い）、上面では糸切りが大部分となる。ＳＫ－1173は、遺構自体は12世紀初め頃であるが、その埋没は12世紀中葉頃であろうか。土師器の坏は丸底坏が多く、糸切り底の採用が遅れる傾向がある。245の坏にはヘラ記号あり。**216**は**黄釉鉄絵盤**（陶器Ａ群）（ＰＬ.8－56）。**214・215・217～232**は**白磁**。**214・215**は同一個体とみられ、**広東系の壷**。内面にも施釉及ぶ。釉の下に化粧掛あり。肩部に波状の沈線。**217～221**は**碗Ⅱ類**で広東系。221の内面には白堆線。**222・223・229**は**碗Ⅳ類**。**224**は**碗Ⅴ類**。**225**は**碗Ⅵ類**で内底に櫛描文。**226**は**平底皿Ⅲ類**。**227～232**は**平底皿Ⅱ類**で広東系白磁。**222・224・226・229**の外底には**墨書**あり。**233**は**龍泉窯系青磁**の碗Ⅰ類。**234**は**越州窯青磁碗**で内面ヘラ彫り花文、外底目跡。北宋前半代のもの。**235**は**初期高麗青磁**の小碗。外面はヘラ彫りと蓮弁。暗青緑色の厚い釉。畳付釉ハギ、目跡残る。**237**は**青白磁合子**の蓋。天井部陽刻文。**238**は**青白磁の坏**。内外施釉。**239**は**青白磁の碗**。**240～242**は**瓦器**の碗と小皿。240は、内外の上半部のみ黒灰色化。他は灰色。在地の瓦器碗としてはミガキ丁寧。241はミガキ粗い。**243**は**東播系須恵器**の鉢。底部糸切り。ＳＫ－1173からは、陶器を転用した**ガラス坩堝**や炉壁の破片も多く出土。**Fig. 44－2021**は**無釉陶器盤口壷**（陶器Ｃ群）で、内外に溶融した**鉛ガラス**が付着。他に土師質製のガラス坩堝（取瓶？）の破片も出土。今回の調査では12世紀前半頃の他の遺構にも関連遺物が出土し、この地でガラス生産がなされていた可能性がある。以上のＳＫ－1173の遺物群は、12世紀初頭～前半の良好

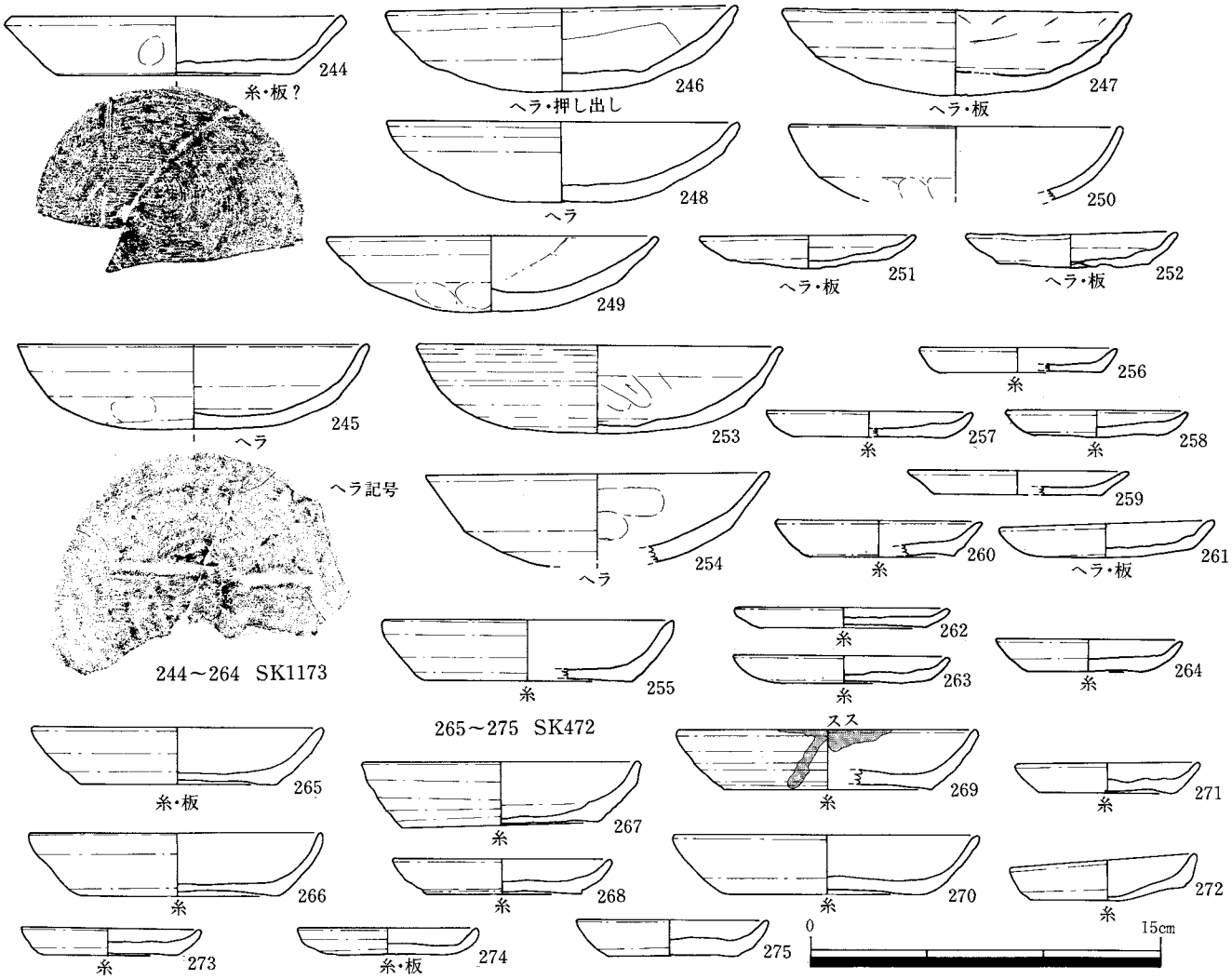
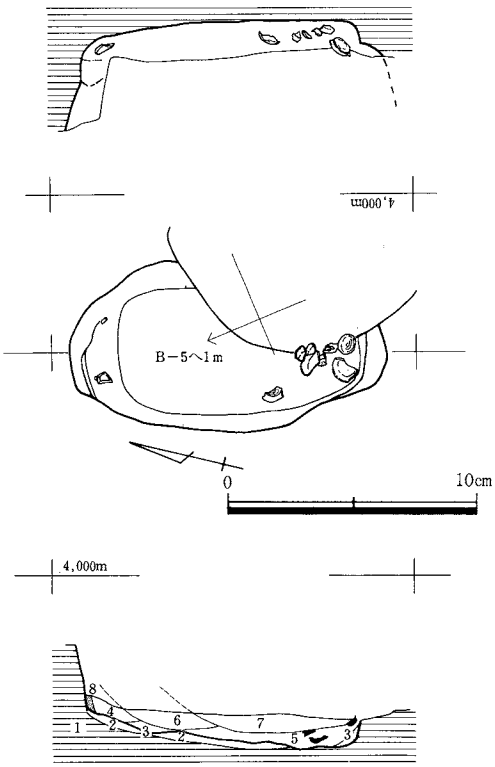


Fig. 22　SK－1173出土遺物実測図(2)・SK－472出土遺物実測図(1/3)
※全て土師器

な一括資料と言えよう。

ＳＫ－472（Fig. 23、ＰＬ．3－18・19）Ａ－４グリッド東辺第１面で検出。東側１／３を近世のＳＥ－471により切られる。平面形楕円形ないし不整長方形で、長径1.3ｍ、短径0.7ｍ弱を測る。深さは北側で最大40cm確認しているが、全体的に下がってしまった。南側に土師器の坏・小皿が落ち込み、検出時上面にも土師器がやや多数出土した。遺構のプランと遺物出土状況から、**土壙墓**の可能性を考えたい。墓とした場合、底面レベルから北頭位となるが、この位置の土層の観察から小口板の存在が推定できる（8層）。なおこの土坑の西に重複するより古いＳＫ－475も（Fig.6参照）、方位とプランから土壙墓の可能性があるか。ＳＫ－472出土遺物（Fig. 22－265～275）265・267・269・271は土坑の南側下層、他は上面検出時の出土。検出時には他にも多数出土している。いずれも土師器で、全て底面は糸切り。口径は、坏が11.9～13.2cm、小皿は7.7～8.9cm。形態・法量から、13世紀後葉であろう。



SK472土層説明
1．褐色～淡褐色砂（包含層）　2．褐灰色砂（遺構外？）
3．淡褐色砂＋黒褐色土　4．黒色粘質土＋砂を少し含む
5．黒褐色シルト＋砂＋炭化物、土器含む、やや粘性
6．黒褐色シルト、やや粘性　7．黒褐色砂質土
8．黒色粘質土、木棺小　板痕跡か

Fig. 23　SK－472実測図(1/30)

ＳＫ－1013・1315（Fig. 19右・下）Ａ－２グリッド東南隅第２面で検出した二つの重複する土坑。**ＳＫ－1013が新**しく、ＳＫ－1315はＳＫ－1173を切る。**ＳＫ－1013**は、東西に長い不整長方形の溝状土坑。東西1.6m、南北0.65m、深さ0.5mを測る。中～上層に焼土ブロックと焼土を含んだ土が多くあり、遺物は全体的に出土したが下層に一群がある。**ＳＫ－1315**はＳＫ－1013より深く、上面径1.3m前後の円形をなしていたようだが明確なプランは不明であった。深さは0.7ｍ。

ＳＫ－1013出土遺物（Fig. 26－329～339）**329～332**は**白磁碗Ⅳ類**。332は底部以外を打欠いたいわゆる瓦玉。**333**は**白磁高台付皿Ⅲ類**。**334**は**天目碗**で、茶黒色の釉（ＰＬ．８－54右）。福建産か。**335**は**白磁平底皿Ⅱ類**。**336**は**白磁高台付皿Ⅱ類**。**337～338**は**土師器小皿**で、338が底部ヘラ切り、他は糸切り。白磁の様相と、土師器小皿から、12世紀前葉～中頃であろう。

ＳＫ－1315出土遺物（Fig. 26－323～328）さきにあげた　ＳＫ－1173出土遺物のうちいくつかはＳＫ－1315に帰属する可能性あり（Fig. 21）。**323**は**白磁碗Ⅱ－１類**。**326**も**白磁碗Ⅱ類**の範疇。内面に白堆線。これらの胎土は磁質ではない。**325**は**白磁高台付皿Ⅱ類**。**327**は**白磁碗Ⅳ類**。**327**は**天目碗**。黒釉。**328**は底部ヘラ切りの**土師器小皿**。これらは12世紀初頭～前葉に位置付けられよう。

ＳＫ－1006・1171(Fig.24、ＰＬ.26･27)ベルトＡを境にＡ－１～２グリッド第２面、後述の銅製品鋳造遺構群を除去した面で検出した。上面～最上層に遺物が多く出土したが、土坑に伴うというよりは、埋没過程の最終時における**整地に伴うものが多い**と判断される(Fig. ５の９層)。西がＳＫ－1006、東がＳＫ－1171で、後者が一段低い。両者の関係は明瞭にできていない。平面的な状況からするとＳＫ－1171が古い遺構の可能性もあるが、遺物の出土状況からは一連の遺構でも矛盾しない。その場合、段掘りされた土坑になる。別の遺構とした場合、ＳＫ－1006は、上面で東西2.3m、南北1.6mの略長方形、深さ0.4mを測る。ＳＫ－1171は、東西2.3m、南北1.6mの不整形、深さ1.0m、西の段部で0.5mである。

ＳＫ－1006・1171出土遺物（Fig. 25）276～298はＳＫ－1171最上層、299～308はＳＫ－1171上層、309～319はＳＫ－1006最上層、**320～322はＳＫ－1171下層の出土**。**276**は**施釉陶器Ｂ群**の壺。胴部外面中位に櫛描の文様と平行文・波状文。暗緑茶色の施釉。釉下に鉄泥あり。胎土は淡灰褐色。12世紀後葉前後のもの(ＰＬ.８－57)。**277**は**龍泉窯系青磁の小皿Ⅰ－３類**。**278**はメンコとされる手ずくねの**土製円盤**。径4.9cm。**279～286**の**土師器坏**は全て底部糸切り。口径11.6～13.4cm。**287～297**は**土師器小皿**、全て底部糸切り。ただし**289**は**小坏ａ**か。口径7.3cmで灯明皿としての使用痕。これを除くと、口径は7.1～9.4cm。**298**は**土師器の鍋**。口縁部は貼付で、外方に屈曲し、ヨコナデ。胴部外面はハケメ。煤付着。**299～308**の**土師器坏**は全て底部糸切り。口径12.1～13.5cm。最上層と、形態・法量的にほとんど変わらないが、わずかに古相の型式の傾向があるか。**309～317**の**土師器坏**は、全て糸切り。口径10.8～13.2cm。ＳＫ－1171のものとほとんど変わらないが、わずかに新相の傾

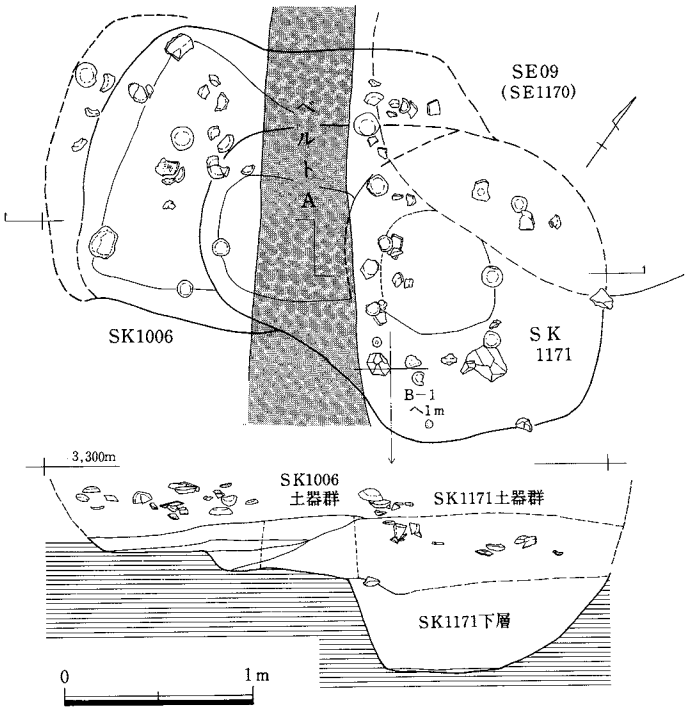


Fig. 24　SK－1006・1171実測図(1/40)

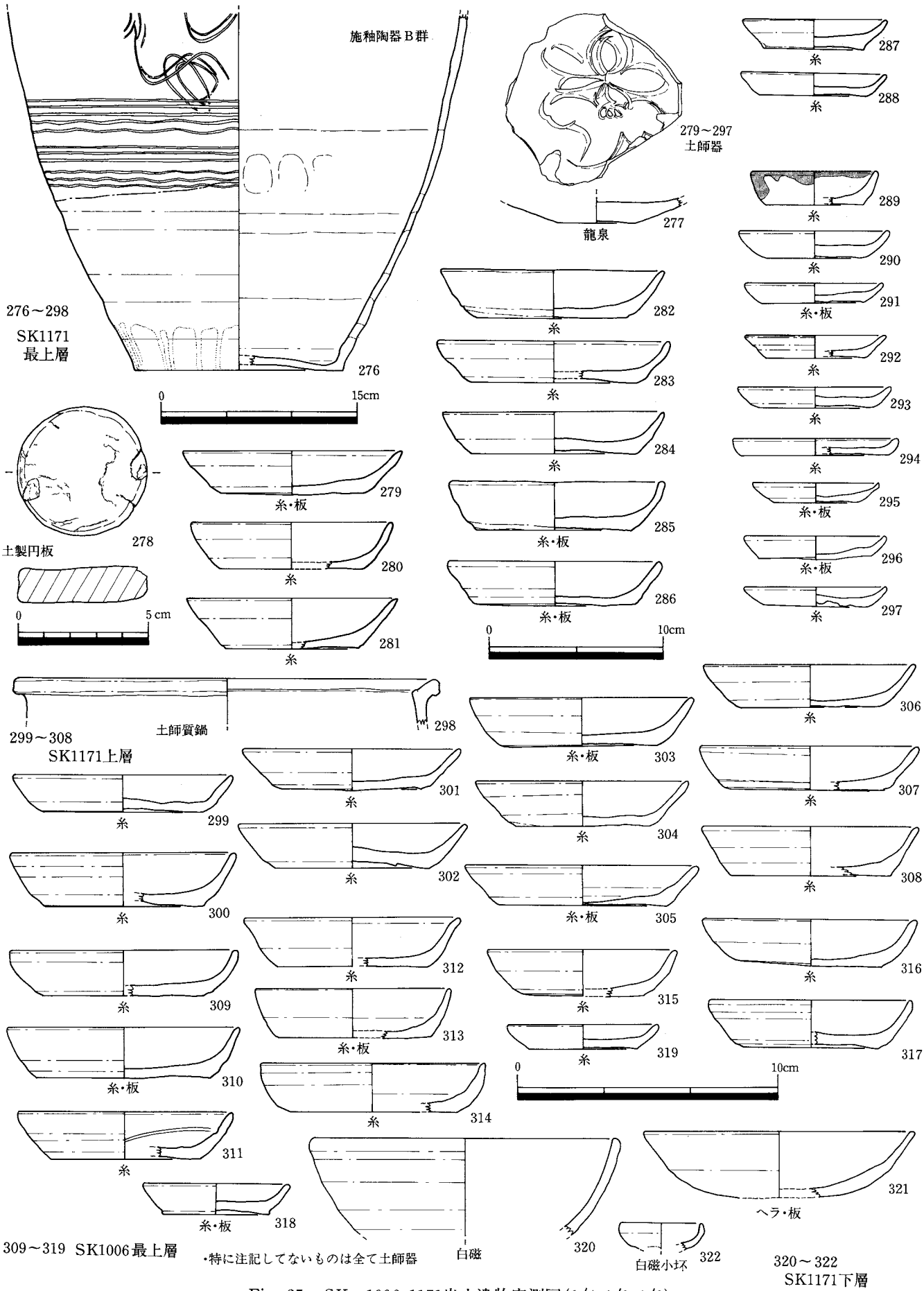


Fig. 25　SK－1006・1171出土遺物実測図(1/4、1/3、1/2)
※278のみ1/2、276のみ1/4

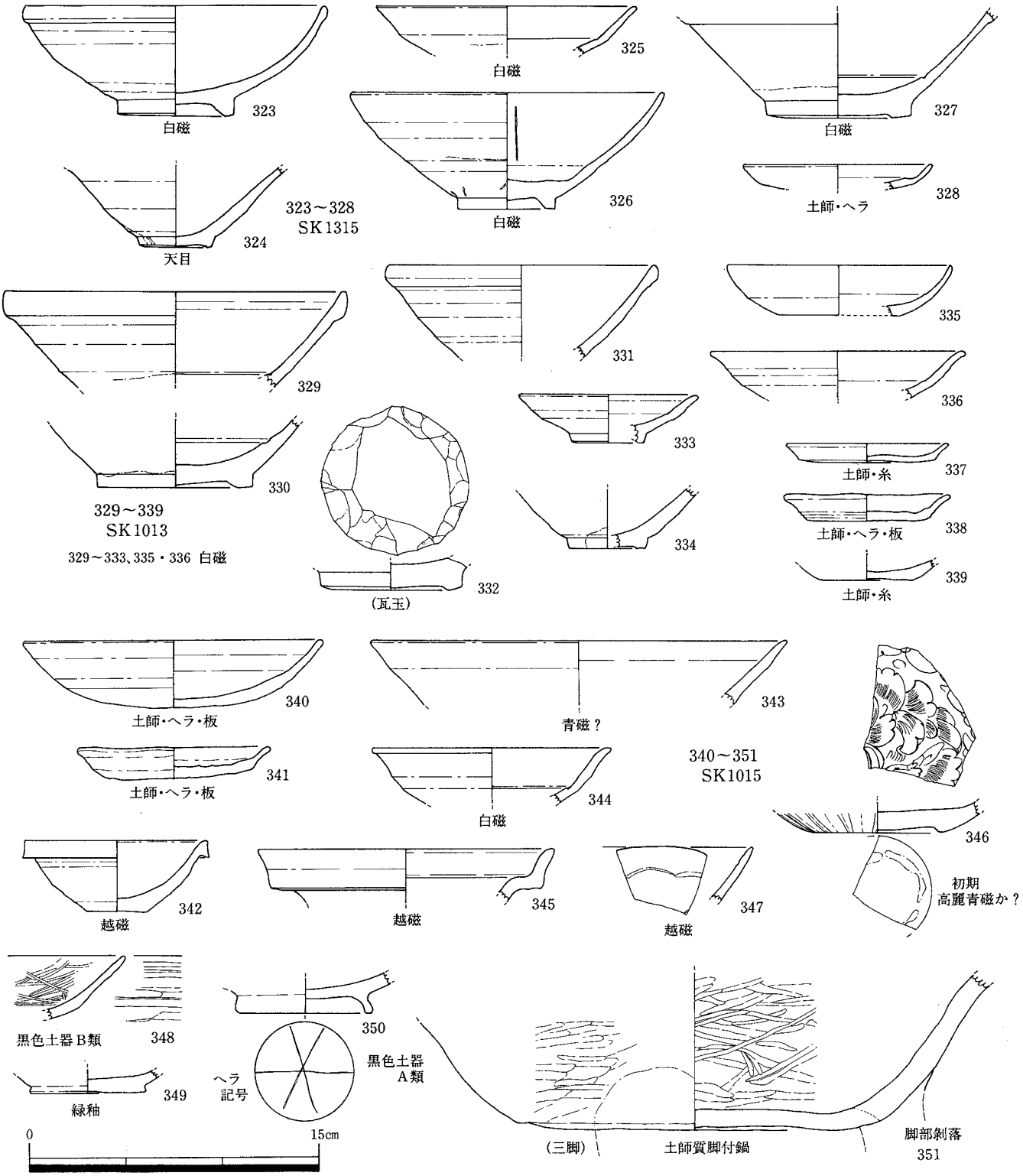


Fig. 26　SK－1315、SK－1013、SK－1015出土遺物実測図(1/3、1/4)
※351は1/4

向があるか。**318・319**の**小皿**は底部糸切り、口径8.5cm 前後。**320**は**白磁碗Ⅱ類**。**321**は押出しの**土師器丸底坏**。口径15.6cm。底部ヘラ切り。**322**は**広東系白磁の小坏**。320～322は、12世紀中頃。SK－1171はこの下層の遺物の時期の遺構の可能性もあるが、遺物少数で断定できない。上層ですでに13世紀代の遺物となり、遺構の時期も下降する可能性が高い。SK－1006最上層の遺物は13世紀

後葉(第3四半期)、ＳＫ－1171の上層～最上層は13世紀中頃～後葉であろう。この時期に周辺も整地されているようである。この年代は後述する**銅製品鋳造遺構群の上限年代**となる。

ＳＫ－1015（Fig. 27、ＰＬ．8－22・23・24）Ａ－２グリッド第２面で検出した。東側を大きくＳＥ－060(近世）に切られ、南側をＳＫ－1016に、西はＳＥ08に切られる。平面形は東西に長い不整長方形ないし楕円形、上面で東西2.4ｍ、南北1.8ｍ、深さ0.75ｍを測る。上面を若干下げた所で、炭化物層が全体に広がって検出された(1層、ＰＬ．22)。この下面に遺物の一括出土があり（2～4層)、この中に種は不明であるが脆くなった獣骨の出土があった(ＰＬ．23)。これらを取り除くと、脚付の鍋形土器の底部が伏せられた状況で廃棄されていた（ＰＬ．24)。土坑の底面はこれよりもさらに30cm強下部にあり、全体的に遺物が散漫に出土している。一種の廃棄土坑と考えられる。

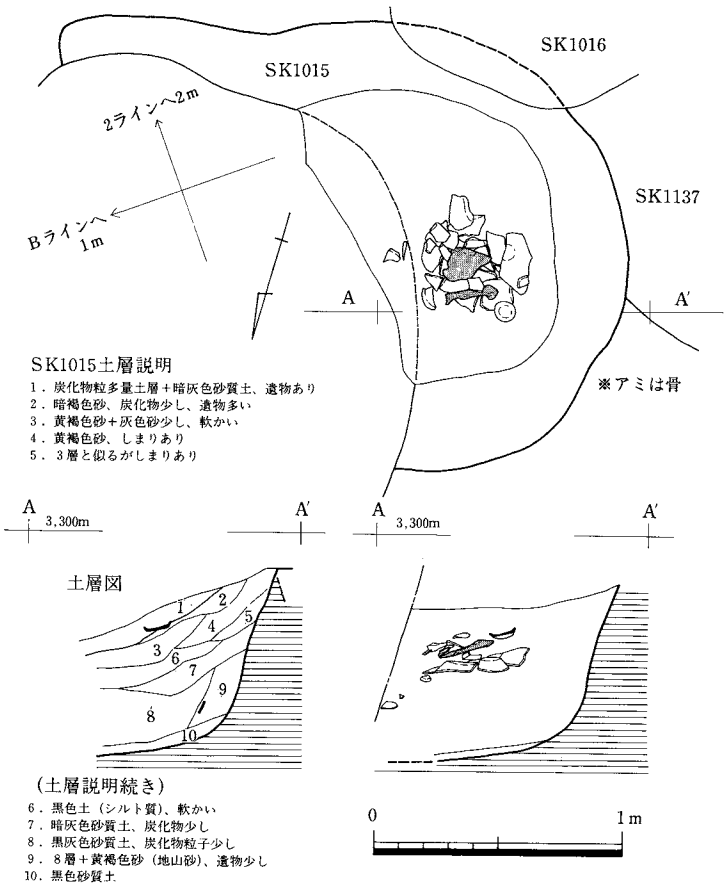


Fig. 27　SK－1015実測図(1/30)

ＳＫ－1015出土遺物（Fig. 26－340～351）**340**は**土師器丸底坏**、口径15.6cm、底部ヘラ切り・板状圧痕。内面ミガキ。最下層出土。**341**は**土師器小皿**、ヘラ切り・板状圧痕、口径10.0cm。中層出土。**342**は**越州窯青磁の坏**。硬陶質、淡オリーブ色の釉。最下層。**343**は**青磁または白磁の大碗（鉢)**。淡黄緑褐色の釉で白濁気味。やや軟陶質。**344**は**白磁高台付皿Ｉ類またはXI類**。最下層。**345**は**越州窯青磁**（粗製）の**盤口壷**。晩唐期の福建産かという。**346**は**越州窯青磁の皿**。淡青灰色の釉。内面毛彫りの花文。外底は目跡。初期高麗青磁の可能性もあるか。**347**は**越州窯青磁碗**（精製)。内面ヘラ彫りの花文。淡緑褐色の釉。**348**は**黒色土器Ｂ類の椀**。上面出土。**349**は**長門系？の緑釉陶器**。黄白色土師質胎土に黄緑色の釉。下層出土。**350**は**黒色土器Ａ類の椀**。外底にヘラ記号。瓦器に近い焼成。**351**は中層で一括出土した**土師質の鍋形土器**（ＰＬ．8－58)。外底に三ケ所、脚部の剥離痕跡あり。内外面ともやや雑なミガキ仕上げ。内面は黒くいぶし焼きされているが、外面に煤の付着や被熱痕跡がなく、形態的に鍋形と言えるに過ぎない。外面は黄橙色～淡黄褐色で大きく黒斑がある。以上のＳＫ－1015出土遺物は、時期的に古相の越州窯青磁碗などを含むものの、遺構の年代は、土師器などから11世紀後半の範疇におさまるであろう。

ＳＫ－005（Fig. 28上段左）Ａ－１グリッド第１面で検出。東をＳＸ－064（099）に切られ、下部で誤ってＳＤ－1003（312号遺構）を一緒に掘ってしまった。上面では遺構のプランが不明瞭で、やや下部で南北1.4ｍ、東西1.0ｍの不整形、深さ35cm の土坑を検出した。検出時上面から上半層にかけて、**土師器の坏・小皿が大量に出土**した。下層からも若干出土している。100個体以上を数えるが、完形になるものは意外と少なく、他の場所で壊されたものが廃棄されたようである。

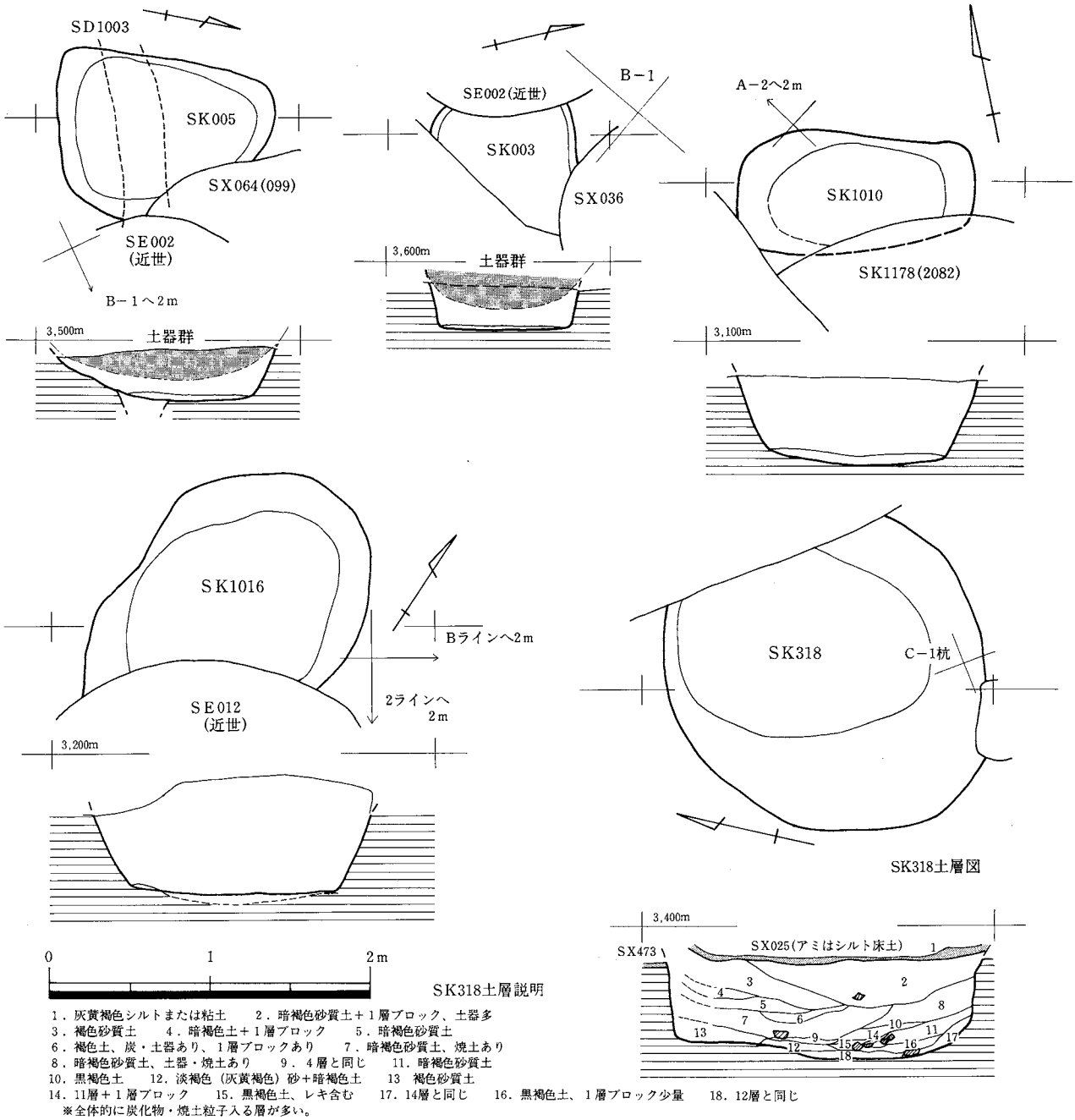


Fig. 28　SK－005、SK－003、SK－1010、SK－1016、SK－318実測図(1/40)

ＳＫ－005 出土遺物（Fig. 29 － 352 ～ 359）出土したのは細片を除き全て土師器である。底部は全て糸切りで、板状圧痕は若干見られる。坏の法量は、口径 12.4 ～ 12.6cm の間に分布のピークがあり、高さは平均 2.6cm である。小皿の法量は、口径 8.2cm にピークがあり、高さは平均 1.2cm である（以上の法量分布は抽出 72 個体による。図示したのはごく一部）。土師器から、ＳＫ－ 005 は、13 世紀後葉（第３四半期）に位置付けられよう。

ＳＫ－003（Fig. 28 上段中）Ａ－０グリッド第１面で検出した。南東側が調査区外になり、北はＳＸ－ 036 に切られる。上面から上層にかけて、土師器の坏・小皿をやや多く出土した。下層からは遺物がほとんど出土していない。

ＳＫ－003 出土遺物（Fig. 29 － 360 ～ 366）底部は全て糸切りの土師器である。360 ～ 362 の小皿

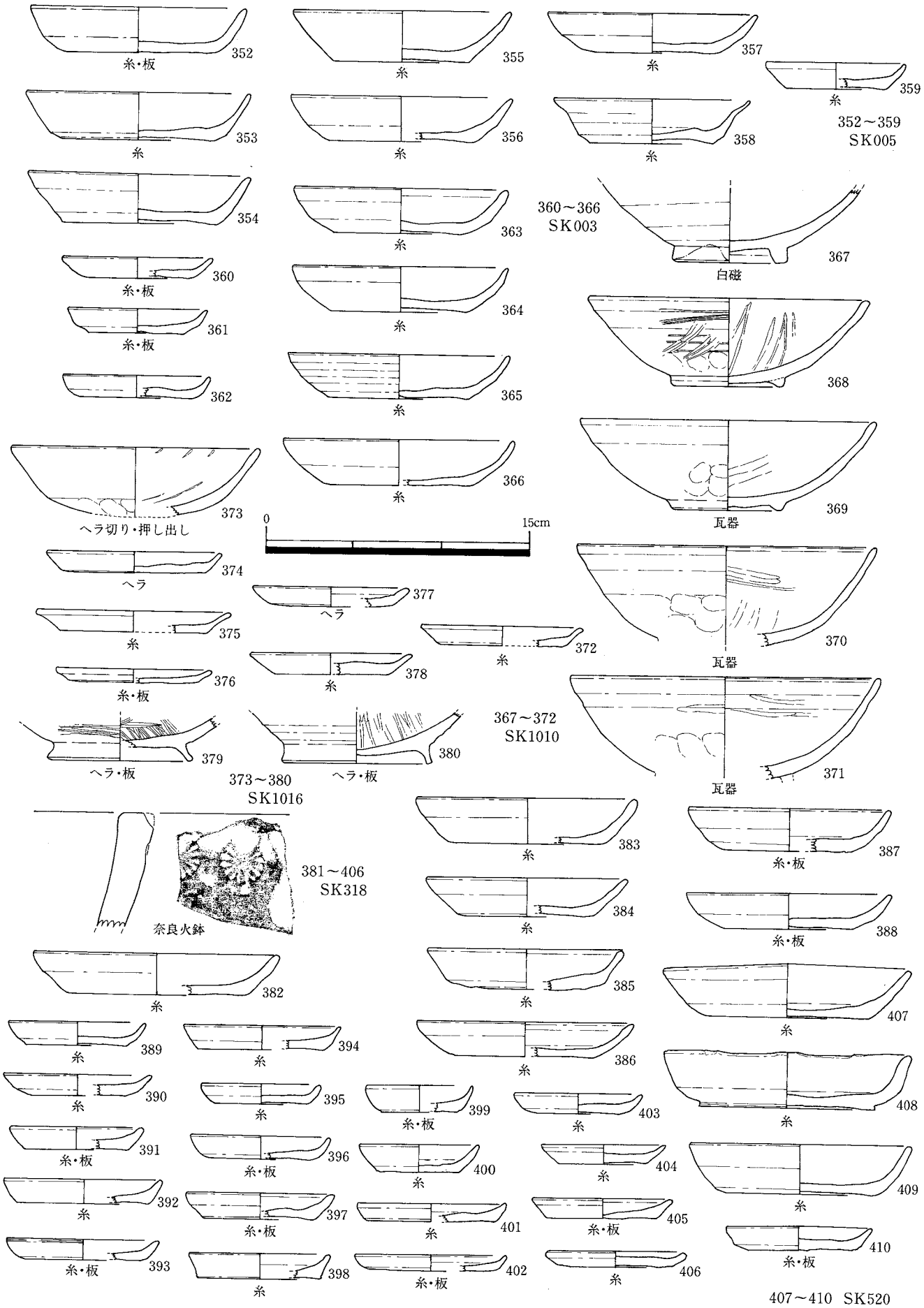


Fig. 29　SK－005、SK－003、SK－1010、SK－1016、SK－318、SK－520出土遺物実測図(1/30)
※特に注記のないものは土師器

は、口径　8.0～8.7cm、363～366の坏は、口径12.2～13.2cmである。13世紀の中頃か。

ＳＫ－1010(Fig.28上段右)　Ｚ・Ａ－1グリッド第2面で検出。南側をＳＫ－1178(＝2082)に切られる。上面で東西1.5m、南北0.78mの略長方形、深さ55cmを測る。プラン的に土壙墓の可能性もある。

ＳＫ－1010出土遺物(Fig. 29－367～372) 370～372は上面ないし上層から出土。他は中・下層出土。**367**は**白磁碗Ⅱ類**。**368～371**は**瓦器碗**。いずれも内外面のミガキが雑で、空隙が多い。外面に押し出し痕が残る。370・371は小片のため口径はやや疑問。**372**の**土師器小皿**は、底部糸切り、口径9.2cm。ＳＫ－1010の時期は、瓦器碗と小皿から、12世紀中頃～後半になるであろう。

ＳＫ－1016(Fig.28下段左) Ａ－2グリッド第2面で検出した。ＳＫ－1015、ＳＥ08を切り、南側をＳＥ－012(近世)に切られる。上面で、南北推定1.9m、東西1.4mの楕円形、深さ0.75～0.8mを測る。

ＳＫ－1016出土遺物(Fig. 29－373～380) 373・374は中・下層出土、他は上面～上層出土。**373**は**土師器の丸底坏**。内面コテあて痕残る。底部ヘラ切り。**374～378**の**土師器小皿**は、底部は糸切りとヘラ切りが半々である。口径は8.8～11.0cm。**379**は**黒色土器Ｂ類の椀**。内外面ともミガキが緻密で、**畿内系**の可能性がある。**380**は**黒色土器Ａ類の椀**。ミガキは粗い。379・380とも、底部はヘラ切り、板状圧痕。ＳＫ－1016の時期は、土師器小皿の型式から12世紀中頃であろう。

ＳＫ－318(Fig. 28下段右、ＰＬ．4－25) Ｂ・Ｃ－1グリッド第1面で検出。銅製品鋳造遺構のＳＸ－473を切り、ＳＸ－025が上に乗る。**出土遺物の時期は、銅製品鋳造遺構群の存続期間の1点を示す**。上面で、南北2.25m、東西2.0mの略円形、深さ60cmを測る。遺物の出土が多く、炭化物・焼土・灰黄色シルトブロック(鋳造遺構の床土)も多く含まれる。土師器の細片がきわめて多いが、完形になるものは全くなく、意図的に細かく壊されたものが廃棄された状況である。鋳造関係遺物(鋳型・中子、取瓶、炉壁など)も、量的には多くはないが、細片となって出土している(後述)。ＳＫ－318は、鋳造工房が機能していたある時期の、工房敷地内の廃棄土坑であると言える。

ＳＫ－318出土遺物(Fig. 29－381～406) 出土した遺物はかなりの量(数箱分)になるが、その

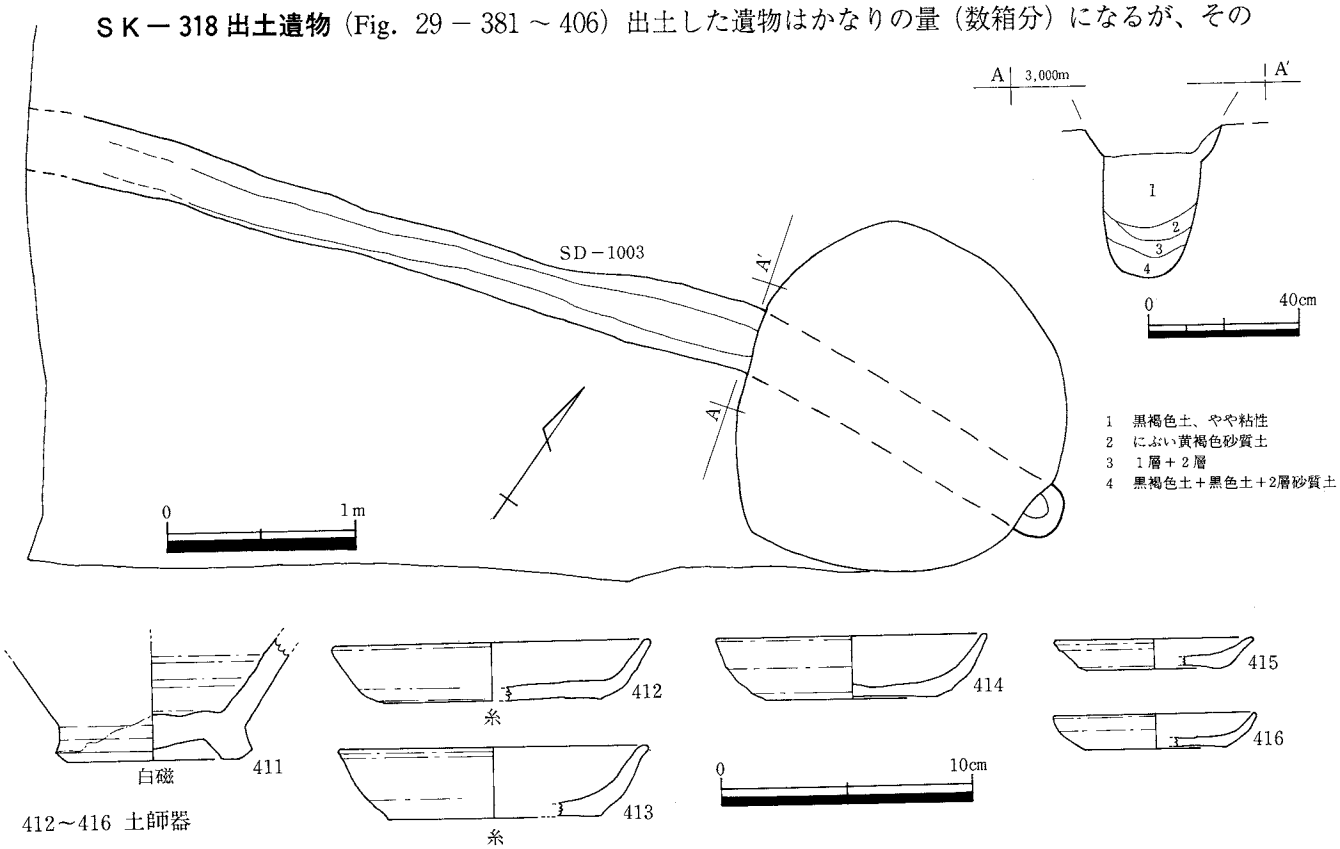


Fig. 30　SD－1003実測図(1/20、1/40)、出土遺物実測図(1/3)

一部を図示した。土師器の坏・小皿は、細片が多いため径の復元は多少前後すると思われる。**381**は**瓦質の奈良火鉢**で、菊花文を施す。淡赤褐色を呈す。型式的に古いもので、14世紀初頭～前葉のものか。**382～388**の**土師器坏**は、口径11.3～14.1cmを測る。**389～398・401～406**の**土師器小皿a類**は、口径7.1～9.0cm、**399・400**は**小皿b類**で、口径6.1～6.8cmを測る。なお土師器の底部は全て糸切りである。板状圧痕は少ないが認められる。以上のＳＫ－318の遺物群は、奈良火鉢の型式（浅鉢Ｉ式）や土師器の法量・型式から、14世紀初頭～前葉に比定され、銅製品鋳造遺構群の時期の１点を示す。

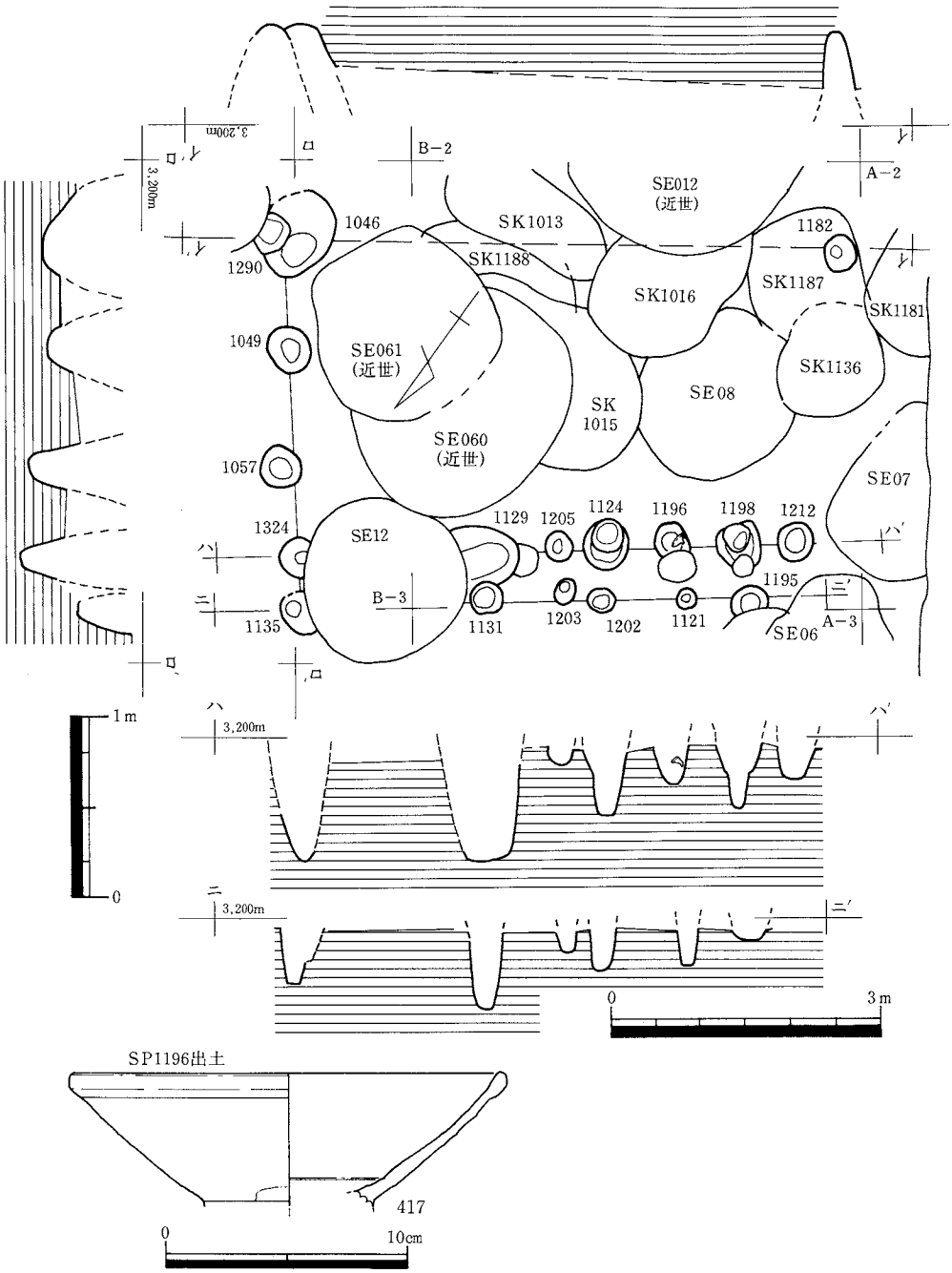
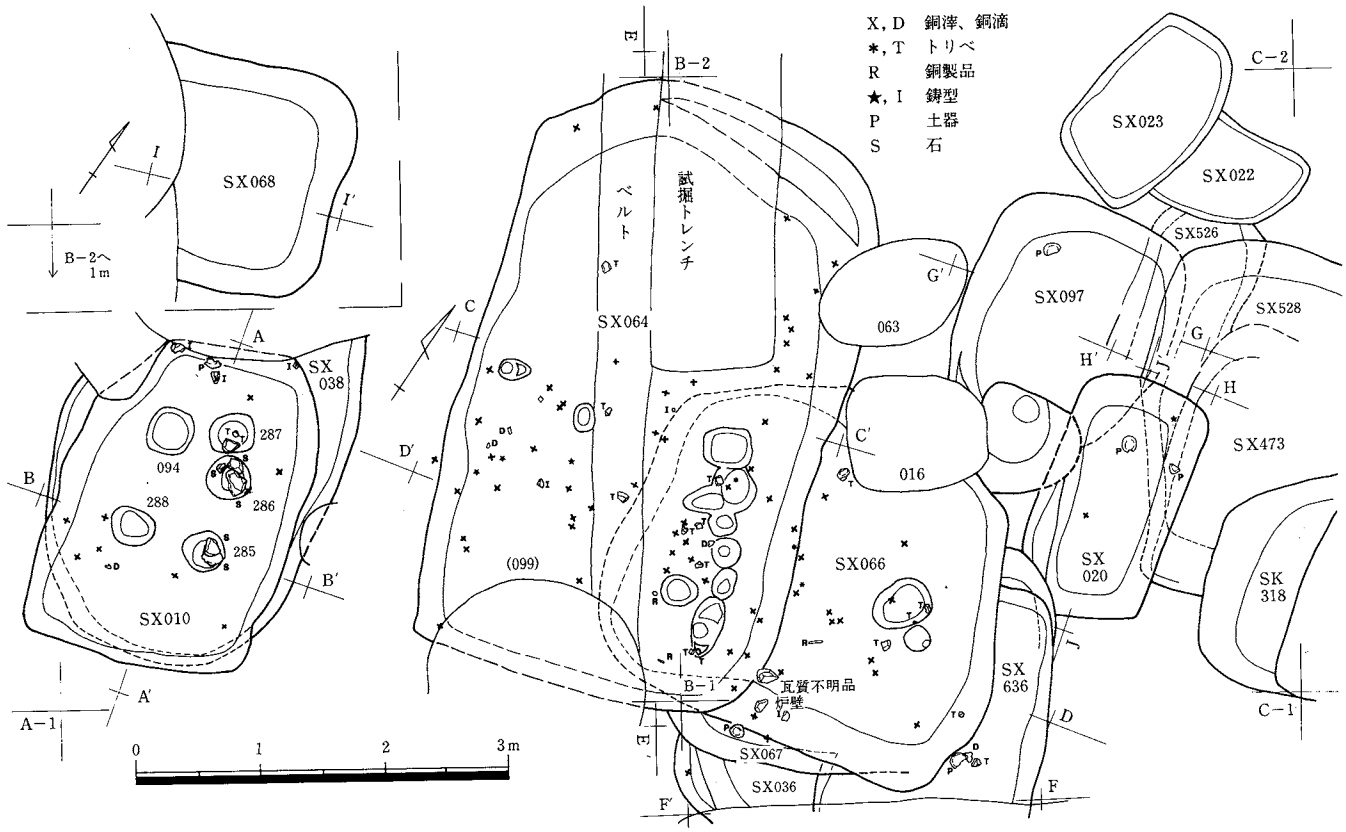
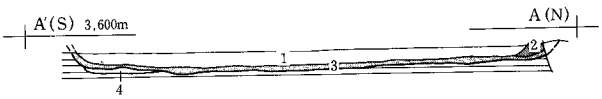


Fig. 31　ＳＢ－05実測図（平面1/80、断面1/40）、出土遺物実測図（1/30）

ＳＫ－520（Fig. 6全体図参照）Ｂ－１グリッド第１面で検出。ＳＸ－097、ＳＸ－020を切る。上面径0.8～0.9ｍの不整円形、深さ33cmを測る。土坑というより柱穴の可能性があり柱の抜き跡？層から遺物（ほとんどが土師器）が多く出土した。全体的に、焼土・炭・灰白色の有機物（骨の腐食化？）が多く含まれていた。

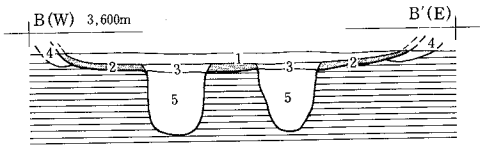
ＳＫ－520出土遺物（Fig. 29－407～410）いずれも土師器で、底部は全て糸切り。**407・408**はいずれも**口径14.2cm前後の坏**。409は口径12.7cmの坏。410は口径8.4cm、高さ1.4cmの小皿で、煤付着する灯明皿。板状圧痕あり。これらの時期は、407・408が問題となるが、法量がやや大きいものの、体部（口縁部）の立ち上りの丸い408などはかなり新しいものと思われ、409が法量的に14世紀前半であるのと共存するのではなかろうか。切り合い関係からも、ＳＸ－020が14世紀前半であり、これを遡ることはない。本報告の97次調査の鋳造遺構群と有機的関連を持つ博多80次調査のＳＫ－48（鋳造関連遺構）出土の土師器坏の中に、類似した法量の坏がある（14世紀前半）。他の例でも、博多では13～14世紀頃の土師器坏には、12～13cmの一般的な口径のものとは別に、一部に口径のやや大きい（14cm以上）一群があるようであり（博多62次の報告等）、今後の編年上の課題であろう。





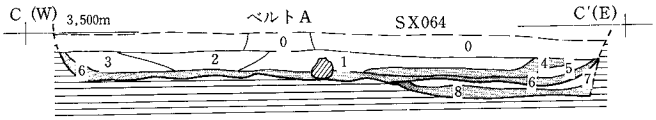
SX010土層説明(A−A′)

1 黒褐色土、灰色シルト塊含む、炭・焼土少量
2 暗褐灰色粘質土
3 明褐灰色粘質シルト、炭粒含む
4 SX038床土、暗褐色土＋褐灰色シルト



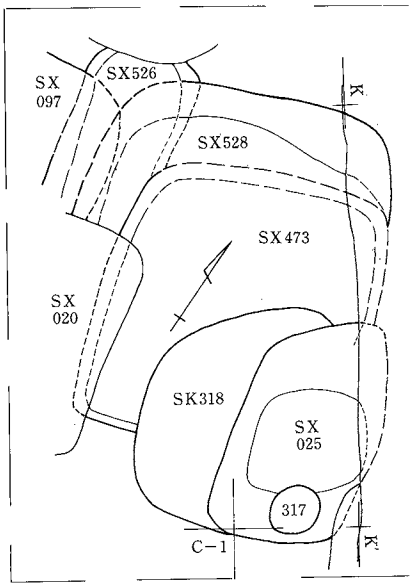
SX010他土層説明(B−B′)

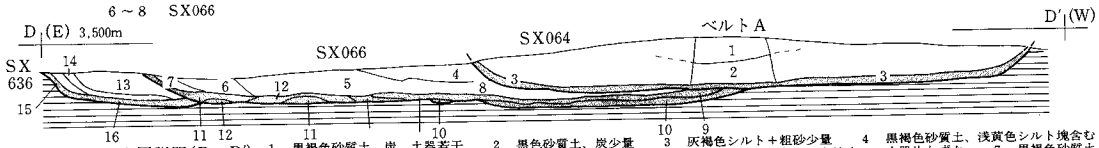
1 A−A′の1層　2 A−A′の2層
3 2層＋5層　4 A−A′の4層
5 黒褐色土、焼土ブロック含む



SX064・066土層説明(C−C′)

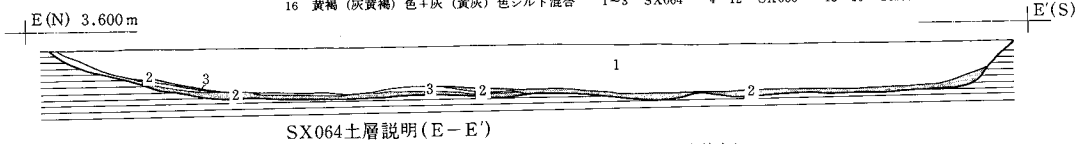
0 黒褐色土、灰色シルト小塊あり、　1 黒褐色砂質土、炭少量
2 1層＋灰色シルトブロック、炭少量　3 1層＋黄色砂少量混入
4 1層と暗灰黄褐色粘質土の混合層　5 4層に似るが粘性劣る
6 オリーブ黄〜にぶい黄色（灰黄色）の粘質シルト、砂少量混入
7 黒褐色砂質土　8 暗灰黄〜暗黄灰色シルト
6〜8 SX066





SX636・066・064土層説明(D−D′)

1 黒褐色砂質土、炭、土器若干　2 黒色砂質土、炭少量　3 灰褐色シルト＋粗砂少量　4 黒褐色砂質土、浅黄色シルト塊含む
5 黒褐色砂質土＋浅黄色シルト塊少量、土器片多い　6 4・5層に似る、粘質浅黄色シルト塊多い、土器片わずか　7 黒褐色砂質土　8 暗黄灰〜暗灰色粘質土
9 黒褐色砂質土＋灰褐色シルト小塊、炭少量　10 暗灰黄＋灰色シルト混合（SX067床土か？）　11 にぶい黄色＋灰黄色・灰色シルト混合
12 暗灰色＋にぶい黄色・灰黄色シルト混合、焼土・炭含む　13 黒褐色砂質土　14 暗褐灰色砂質土＋粘質土　15 暗褐灰色砂質土
16 黄褐（灰黄褐）色＋灰（黄灰）色シルト混合　1〜3 SX064　4〜12 SX066　13〜16 SX636



SX064土層説明(E−E′)

1 黒褐色砂質土、炭・焼土少量、遺物包合、灰・黄褐色シルト塊含む
2 暗褐色砂質土＋3層　3 灰色〜灰褐、にぶい黄色シルト（やや粘質）

Fig. 32 銅製品鋳造遺構群平面図(1/60)・土層図(1) (1/40)

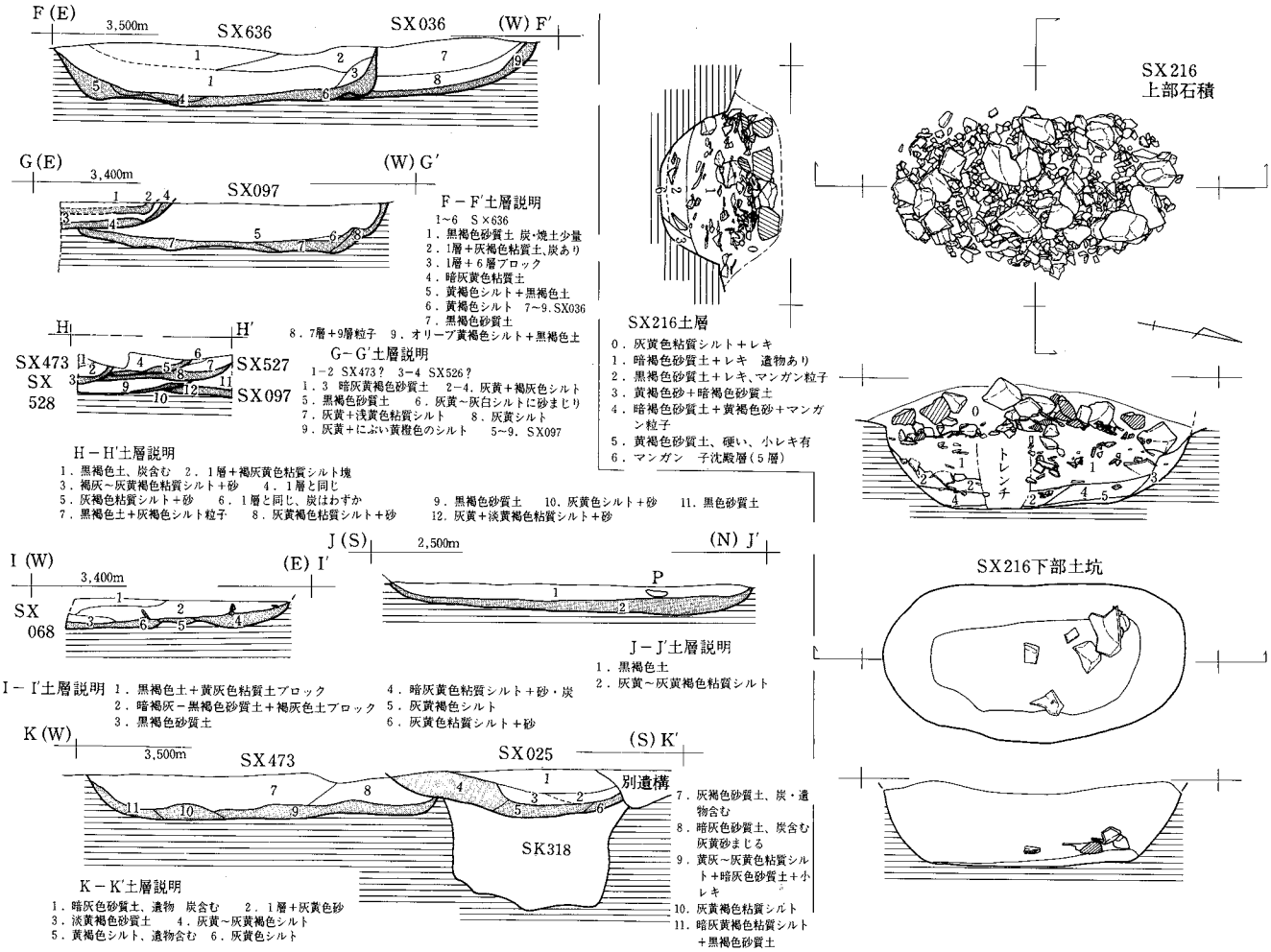


Fig. 33 銅製品鋳造遺構群土層図(2) (1/40)・SX－216実測図(1/30)

(3) 溝状遺構（ＳＤ）

ＳＤ－1003（Fig. 30、ＰＬ．5－29）Ａ－１グリッド第２面で検出。東側の一部をＳＥ－002（近世）に切られる。延長は6m確認し、方位はＮ－75°～85°－Ｅである。上面幅は35cm 前後、深さ40～60cm を測る。西が深く、東は浅くなり途切れる。方位的に南の80次調査のＳＤ－181と関連するか（Fig. 3参照）。しかし同一面の周辺遺構との関係性は不詳である（ＰＬ．4－21参照）。遺物は上層（1層）から上面を中心に出土した。細片が多いが、残りの良い遺物の一部を図示する（Fig.30下段）。他の遺構との関係や下層に遺物が少ないことから、これらの遺物の年代よりも掘削時期はやや古いか。**411**は**白磁の壷**。**412～414**は**土師器の坏**で、口径10.8～12.6cm。414の口径は他より小さい。415・416は土師器小皿で、口径7.8～8.0cm。土師器は全て底部糸切り。414は別として、法量的に13世紀中頃か。

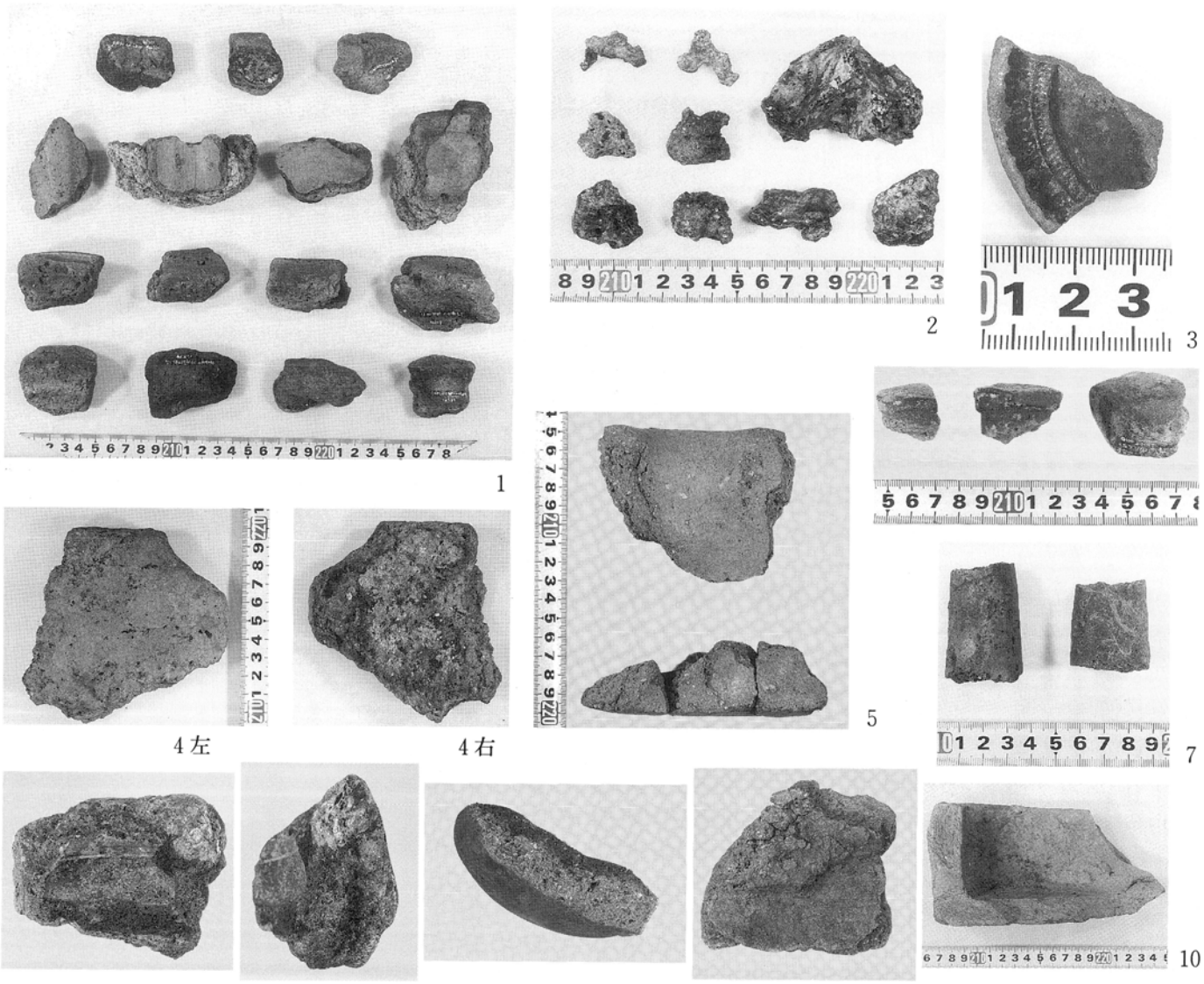
(4) 掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢ－05（Fig. 31）Ａ・Ｂ－２第２面で検出。現場では、北側の柱穴列の存在に注意したが、掘立柱建物としたのは整理段階である。しかしハ－ハ'・ニ－ニ'の柱穴（桁行と縁の列）は、一定の間隔で深い－浅いという規則性が見られ、建物の復元は問題ないだろう。浅いピットは束柱であるのでこれを除くと、梁間３間×桁行４間（以上）で北側に縁または庇のある構造となる。建物方位はＮ－53°－Ｅ。**ＳＰ－1196**からは、**417**の**白磁**が出土した。**碗Ⅳ－２類**。約１／３の残存。建物の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係等から、12世紀代のある時期になるであろう。

(5) 銅製品鋳造関連遺構（ＳＸ）（Fig. 32・33、ＰＬ．30～43）

第１面の調査区南側で、**銅製品の鋳造遺構**（工房跡）とみられる遺構を多数検出した。これらは全て、平面形が隅円の長方形ないし小判形で、底面が皿状をなす浅い土坑であり、床面から壁面に、灰

褐色～黄灰色の粘質シルトや粘土を数cmの厚さで貼っていることに特徴がある(Fig.32･33の各土層図参照)。検出時に、そのシルトの立ち上がりが上面で複雑に切りあっていることや、銅滓・鋳型等の鋳造関連遺物が多量かつ一面に出土することに注意を喚起され、特殊な遺構群と認識し慎重な調査を行った。また検出時上面を除き、可能な限り鋳造関係遺物については出土位置を記録した（Fig.32上段)。検出遺構は、お互いに複雑に重複しながらも、ほぼ同方位を向いている（N－15°～20°－W)。その一方、規模には大小があり、鋳造関係遺物の出土も、遺構によって出土量や種類にばらつきがある。特に調査区西側から中央にかけてその分布が集中し、東側の遺構には少ない。これらの事実は、構造が同じに見えてもその機能・性格が相違することを示唆するのであろう。西から各遺構について説明する。**ＳＸ－010**は南北2.65m×東西1.9m、検出面からの深さ10cmで、上面で**鋳型小片**が特に多く出土し（ＰＨ.1－1)、床面では**取瓶**が出土した（ＰＬ．32)。５つのピットが検出されたが、これは大形の鋳型を支える型枠に関連するものか。ＳＸ－038を切る(ＰＬ.31)。**ＳＸ－064**(ベルトＡの西側は現場では099号遺構とした）は、4.9×2.9m、深さ25～30cmで、北辺が若干段状の立ち上がりとなる。ＳＸ－010もそうだが、床のシルト面が硬化している。ＳＸ－064も**鋳型や取瓶の破片が多く出土**し、**銅滓**が大小散っている。これに切られる**ＳＸ－066**は、同様に鋳造関連遺物が多く出土し、東西3.2m×南北2.8mの不整方形、深さ25cmを測る。ＳＸ－066は、古い順に**ＳＸ－036→ＳＸ－636→ＳＸ－067**とな



PH．1　銅製品鋳造関連遺物写真

1　ＳＸ－010出土鋳型破片　2　各鋳造遺構群出土銅滓　3　ＳＸ－016（ＳＸ066か？）出土飾金具鋳型　4　ＳＸ－066出土炉壁片（左・右＝表・裏）　5　ＳＸ－216出土炉壁片　6　各鋳造遺構群出土鋳型中子　7　鋳造遺構群出土「サナ」　8　ＳＸ－066出土鍋？鋳型　9　ＳＸ－010出土取瓶　10　ＳＸ－066出土瓦質容器状製品

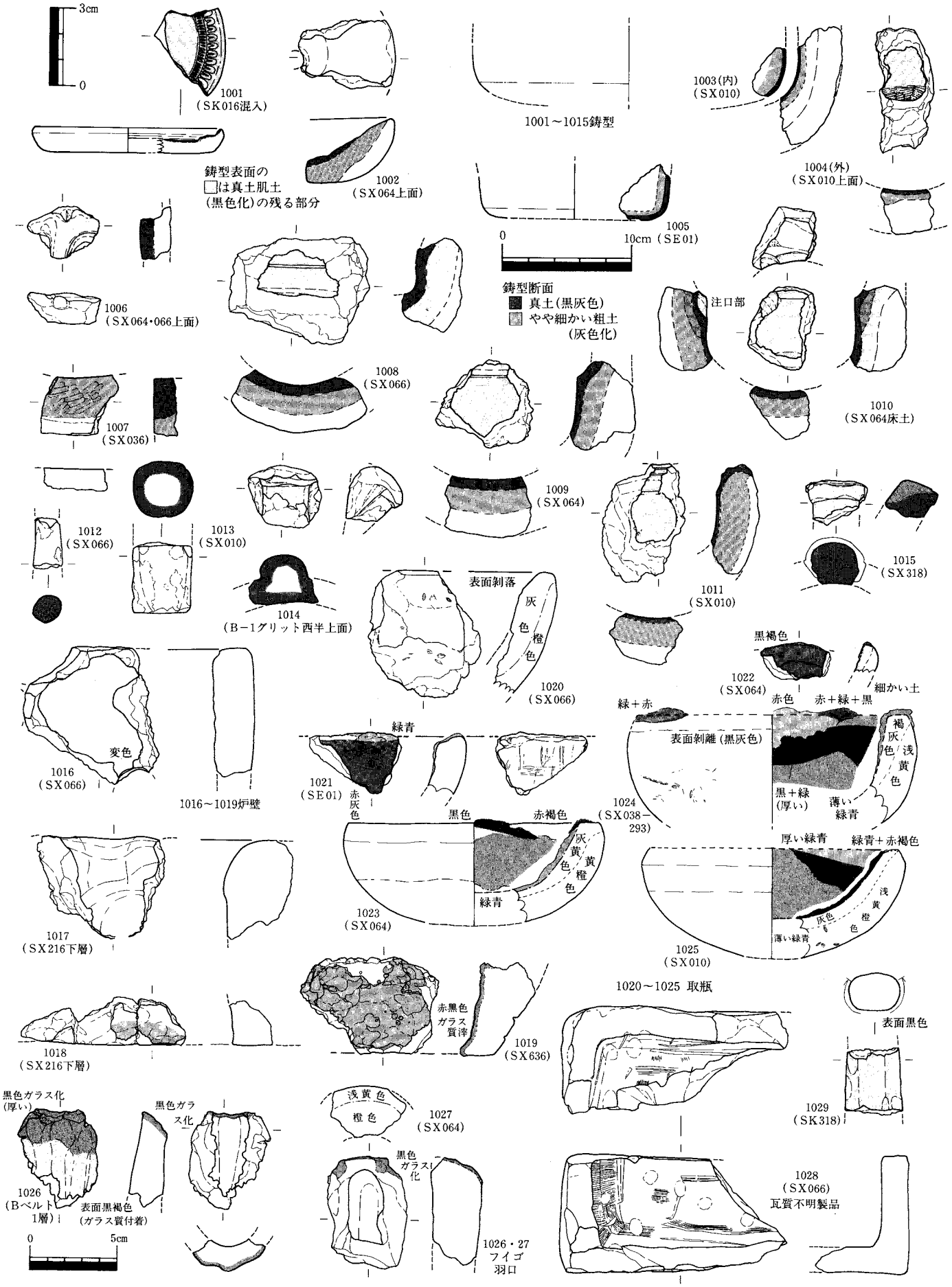


Fig. 34　銅製品鋳造関連遺物実測図(1001＝1/2、1002～1005・1008～1011、1016～1025、1029＝1/4、1006・1007・1012～1015、1026・1027＝1/3)

る同様の構造の遺構と重複する(ＰＬ．35)。これらも取瓶や銅滓等を出土する。**ＳＸ－636**は小規模で、南北推定2.0ｍ×東西1.7ｍ、深さ20cm を測る。ここまでの西側の遺構群に比べ、次の東側の遺構群は、概して規模が小さい傾向にあり、上面検出時を含め鋳造関連遺物の出土が少ない。一案であるが、前者は実際に**鋳造をする場所**（鋳型を設置し、鋳込む施設）であり、後者はおそらく**溶解炉の下部構造**であろう。いずれも床面にシルトや粘土を貼るのは、下からの湿気を排することが第一義であろうか。前者については作業床としての土間の必要性もあろう。鋳型は、当時の地表面（検出面より10cm 程度上と推定)より下に設置するわけだが、土坑に足場板等をかけるか、または土坑に埋め込むことで、上から溶銅を流し込んだと推察する。東側の遺構群はより複雑に重複する（Fig. 33の各土層図参照)。**ＳＸ－020**は、ＳＸ－097･473･528･593を切り、南北2.0m×東西1.0m、深さ16cm。**ＳＸ－097**は、2.0×1.7ｍ、深さ26cm を測る。**ＳＸ－022・023**は非常に浅く、検出面で床土のシルトが検出された。**ＳＸ－473**と**ＳＸ－528**は同一遺構としたいが、床のシルト面が不自然に段となる部分があり、重複かもしれない。同一遺構の場合、2.9×2.6ｍの略方形、深さ25cm を測る。ＳＸ－473はＳＫ－318に切られ、ＳＫ－318はＳＸ－025に切られる（前述)。**ＳＸ－025**は1.8×1.2m、深さ26cm を測るが、床のシルトの断面が、中央で凹む（Fig. 33下)。憶測だが、この形状は溶解炉の基部がはまる部分と考える。**ＳＸ－068**は、ＳＸ－064の北側１ｍにあり他の同様の遺構と重複しない。西は近世のＳＥ－061に大きく切られるが、南北1.8ｍ、東西推定２ｍ強の略方形、深さ20cm を測る。銅滓が若干出土した。次に**ＳＸ－216**は、Ｚ－３グリッドで検出し、他の鋳造遺構群とは離れ、構造も異なるが、**溶解炉の基部の一類型**の可能性が高いこと、遺物の時期や主軸方位が同じであることから、これも銅製品鋳造工房の一施設と推定する（Fig.33右、ＰＬ.39～43)。最上面は10～20cm の塊状の礫、その下は数cm ～ 10cm 前後の礫・割石が、灰白色の粘質シルトで固められて積まれていた。**銅滓**が若干出土し、**炉壁の破片**も出土した。以上の石積の下部は、1.3×0.65m、深さ35cm の土坑となり、備前焼の壷の底部が埋置されていた（ＰＬ.43)。土坑の下部には、酸化マンガンの沈殿が見られ、この構造物が排湿を目的とするものであったことを示すか。なお、上面礫やシルトの広がりの裾部のあり方から、この遺構の検出面は当時の生活面に近く、その場合溶解炉は地上に設置されたことになる。

銅製品鋳造関連遺物（Fig.34－1001～1028、ＰＨ.1）上記の鋳造関連遺構や、第1面検出時包含層、同時期の他の土坑や井戸からは、**鋳型**や**取瓶・坩堝**、**フイゴ羽口**、**炉壁**の破片や、**銅滓**が多く出土した。図示したのはそれらのうちのごく一部である。なお、特に鋳型や炉壁については、全体の形状をとどめるものはなく、意図的に壊されたと考えたくなるぐらいに細片ばかりである。図示したものは、その中でも残りが良いものである。**1001～1015**は**鋳型の破片**である。**1001**は重複関係にある近世の土坑から出土したが、もとは**ＳＸ－066に伴う**か(ＰＨ.1－3)。鋳型真土の肌面には、銀色の粒子が付着しあるいは錫か。仏具の一部の**蓮華座等の飾金具**か。胎土は真土のみ。**1002**は、表面の真土肌土は剥離するが、胎土が、真土中土(微細な砂混入)－やや細かい荒土－スサ・砂礫を含み軽い土からなる荒土、の三層構造(ＰＨ.1－8参照）をなし、鋳型であろう。他の鋳型も同様で、さらに鋳造面には黒色化した真土肌土があり、ミガキが施されている。1002は内型を支えるための型持孔がある。碗などの**容器の外型**か。**1003～1005･1008～1011**は**鍋や湯釜などの鋳型**で**外型**と**内型**がある。1010には注口部がある。**1006**は不明鋳型であるが、**飾金具の一部**か。胎土は真土のみ。**1007**は不明鋳型だが、**鍋等の鍔部**か。**1013**や**1014･1015**(ＰＨ.1－6）は**鍋や釜の注口部の中子**であろう。**1012**も、何らかの**中子**と推定される。**1016～1019**は**炉壁の破片**(ＰＨ.1－4･5)。いずれも荒土。1016はフイゴ羽口を差し込む穿孔があり、上辺に抉りがある(天地逆の可能性もある)。内面は高熱で白色化。1018の内面も同じ。1019は、高熱で赤黒色のガラス質滓状となる。**1020～1025**は**取瓶**。口径20cm 強のものが多い。**1020･1024**のように深いも

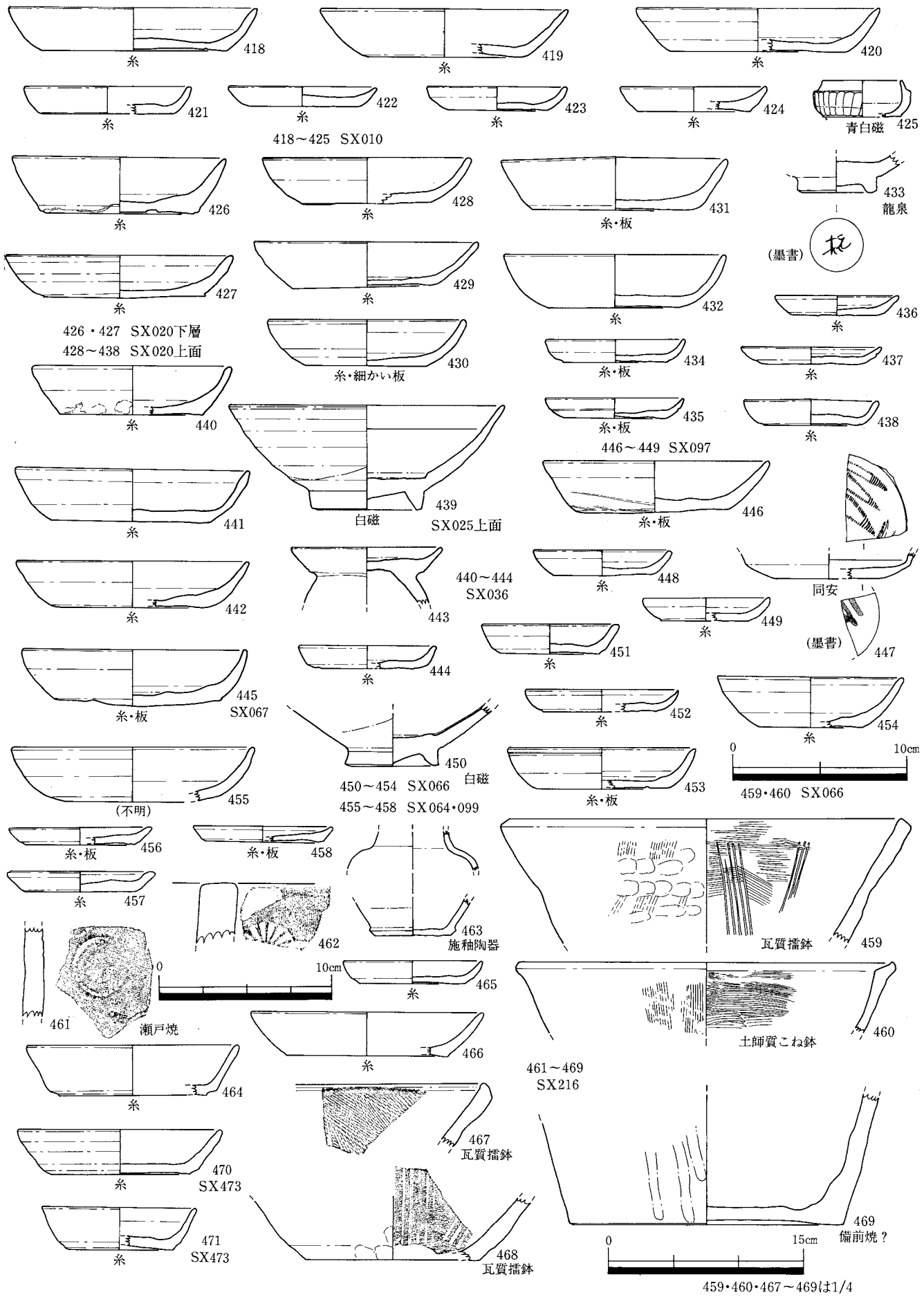


Fig. 35　銅製品鋳造遺構群出土土器・陶磁器実測図(1)　(1/3、1/4)

※特に種類の注記のないものは土師器

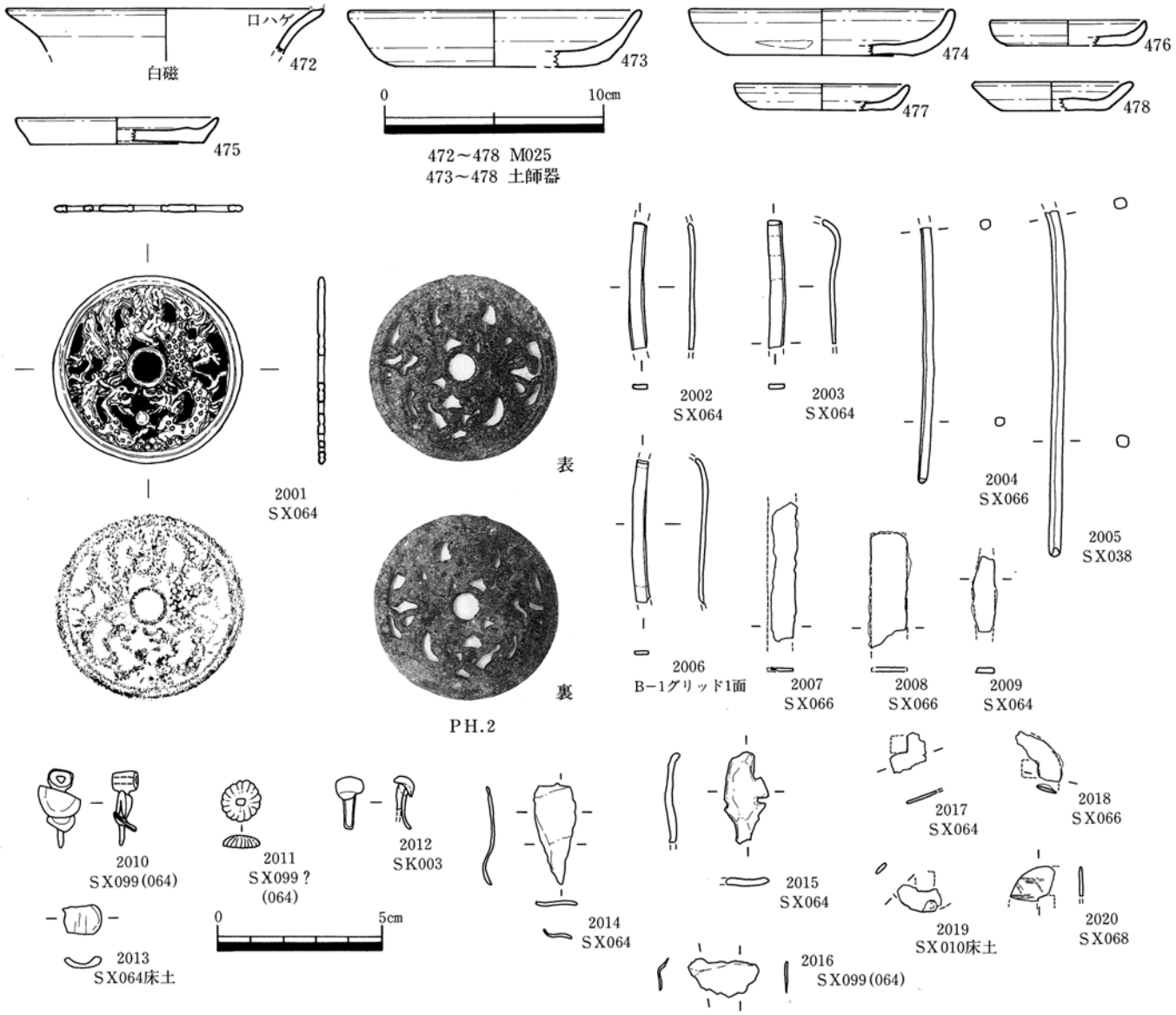


Fig. 36　銅製品鋳造遺構群出土土器・陶磁器実測図(2)(1/3)、鋳造遺構群出土銅製品実測図(1/2)

のは**坩堝と兼用**の可能性が高い。**1022**はかなり**小形の取瓶**。飾金具等の小形の製品用だろう。いずれもスサや砂礫の入る荒土（鋳型の外土に同じ）だが、内側はやや細かい胎土。外面は板ナデ・ナデで平滑にする。内面には、緑青状の銅成分や赤褐色、黒色の銅滓が厚く張り付く（ＰＨ.1−9)。破断面に銅滓や緑青が付着するものがあるので、高熱で割れたために廃棄されたか。**1026・1027**は**フイゴ羽口**の破片。全体的に高熱を受け変色している。先端部は黒色～赤褐色のガラス質滓が付着。以上の鋳型、炉壁、取瓶、フイゴ羽口は、胎土が粗く、かつ高熱を受けているために、きわめて脆くなっているものが大部分で、簡単な保存処理を要した。**1029**は「**サナ**」と呼ばれる屋内の火処に用いる棒状製品の破片。片面が黒灰色化している。この「サナ」の破片が鋳造遺構群に偏っていくつか出土しており、鋳造に火を用いることと何か関係があ

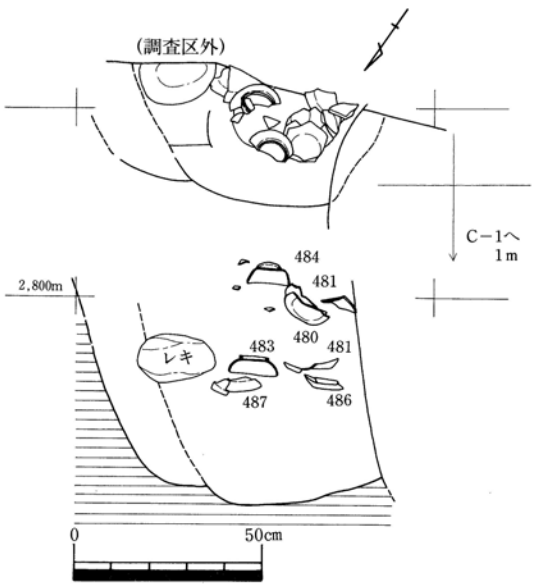


Fig. 37　SK−1156実測図(1/20)

るかもしれないので紹介した(ＰＨ.1－7)。**1028**は**瓦質の箱状の製品**の破片(ＰＨ.1－10)。図の左の破断面の一部に生きている面がある。何らかの孔であるが、遺物自体が類例・性格が不詳で、機能も不明。

鋳造遺構群からは、**ここで製作された可能性がある銅製品**も出土 (Fig.36－2001～2020)。**2001**は径5.75cmの**円形飾金具**。表裏に**双龍文**が鋳出され、透かしがある。全体的に鋳上がりが悪く、透かしが本来広くなる部分や、あるはずの部分に溶銅がまわってしまっている。さらに裏面とした部分の鋳出はきわめて悪い。型崩れと湯冷えを同時に起こしている。仕上げの研磨が不明で、鋳放しの状況に近い。失敗品で廃棄されたものだろう。**2002～2004**は**毛抜き**か。極細の板状品を折り曲げる。**2005・2006**は径4mmほどの**棒状品**。箸のようなものか。**2007～2009**は、**細い板状製品の破片**。**2010～2012**は、**鋲や小形の飾金具**。2013は不明だが、小さく丸く折り曲がる。**2014～2016**は、**薄い銅板の破片**だが、製品を鋳出後、加工する際に生じた屑であろうか。**2017～2020**は**銅銭を鋏で切ったような破片**。用途などは不明である。またFig. 44 － **2023・24**は大小の**匙状製品**もこの鋳造遺構の生産かもしれない。その他、鋳

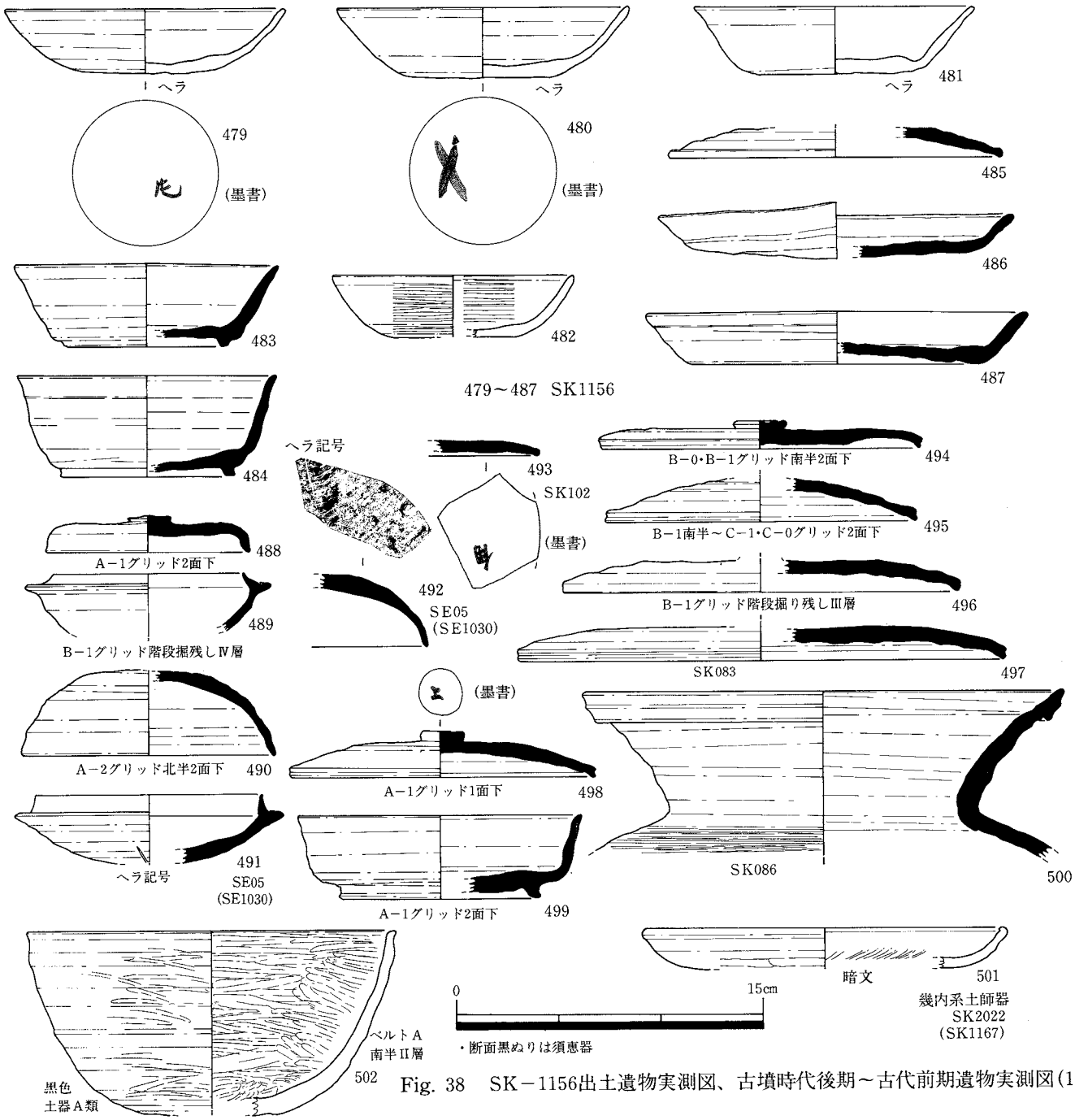


Fig. 38　SK－1156出土遺物実測図、古墳時代後期～古代前期遺物実測図(1/3)

造遺構群からは、多数の**銅滓・銅滴**が出土。さまざまなタイプがあり（ＰＨ．１－２)、緑青状の銅成分の高いもの（銅滴）が多いが、銅滓には暗緑褐色、黒褐色、暗赤褐色、赤色などのさまざまな色があるほか、状態もガラス質の滓、発泡化したもの、コールタール状のもの等があり、不純物の種類や鋳造の工程の違いを示すか。いずれにしてもここで銅製品を生産していたのは疑いない。

鋳造遺構群からは**土器・陶磁器**の破片も多く出土しているが、二次的に廃棄されたものが大部分である。それらの一部をFig.35･36に図示した。多くは**土師器の坏・小皿**である。**坏**の口径は12～13cmのものが多いが、一部14cm代のものや、10cm前後の一群がある。**小皿**は、口径7.1～9.7cmであるが、平均8.0～8.2cm前後である。底部はいずれも糸切りで、一部に板状圧痕がある。時期的に13世紀後半から14世紀中頃までの幅におさまるだろう。なお426はＳＸ－020の床土中、427は床面に埋置された状況で、446はＳＸ－097床直、441はＳＸ－636下層、445はＳＸ－067下層、470はＳＸ－473床土中からそれぞれ出土している。**433**は**龍泉窯系青磁の碗Ⅰ類**で、**墨書**あり。**439**は**白磁碗Ⅸ類**。**447・450**は**同安窯系青磁**。**447**は**平底皿Ⅰ類**で、**墨書**あり。**450**は**碗Ⅱ類**。**461**は**瀬戸系の瓶**(壺)か。**462**は**瓦質火鉢**。菊花文の印刻。**463**は中国産の施釉陶器で、黒色不透明釉。**459・467・468**は**瓦質の擂鉢**。**460**は**土師質の捏鉢**。**469**は**備前焼の壷**の底部と思われ(ＳＸ－216下部土坑)、淡灰褐色の胎土、器面は赤茶褐色、内底に自然釉、外面に自然釉の釉ダレあり。**472**は**ロハゲの白磁皿**。これらの陶磁器は、おおむね13～14世紀におさまり、上記の土師器の年代観と矛盾しない。**銅製品鋳造遺構群の年代**は、これらの遺物の年代や、ＳＫ－318･520の時期(前述)、直下の整地層の時期(ＳＫ－1006･1171上層～上面など)、複雑に重複し一定の操業期間が考えられることから、**13世紀**後半でも末の**第4四半期から14世紀中頃まで**の時間が考えられよう。

5　古墳時代後期から古代前期の遺構と遺物

古墳時代後期から古代前期（奈良時代）の遺構は、周辺調査に比べやや少ない。遺物としては、奈良時代のものは量的に少なくないが、明確なその時期の遺構は少なく、大半は包含層資料か中世遺構への混入品である。例えば朝鮮の無釉陶器である**高麗陶器**はパンケース１箱分の破片があるが、遺構に伴うものは無く、全体の形状をとどめないものばかりである。**土師器の移動式カマド**も２個体以上出土するが、やはり中世遺構や包含層資料である（うち１点はＰＬ．８－59)。

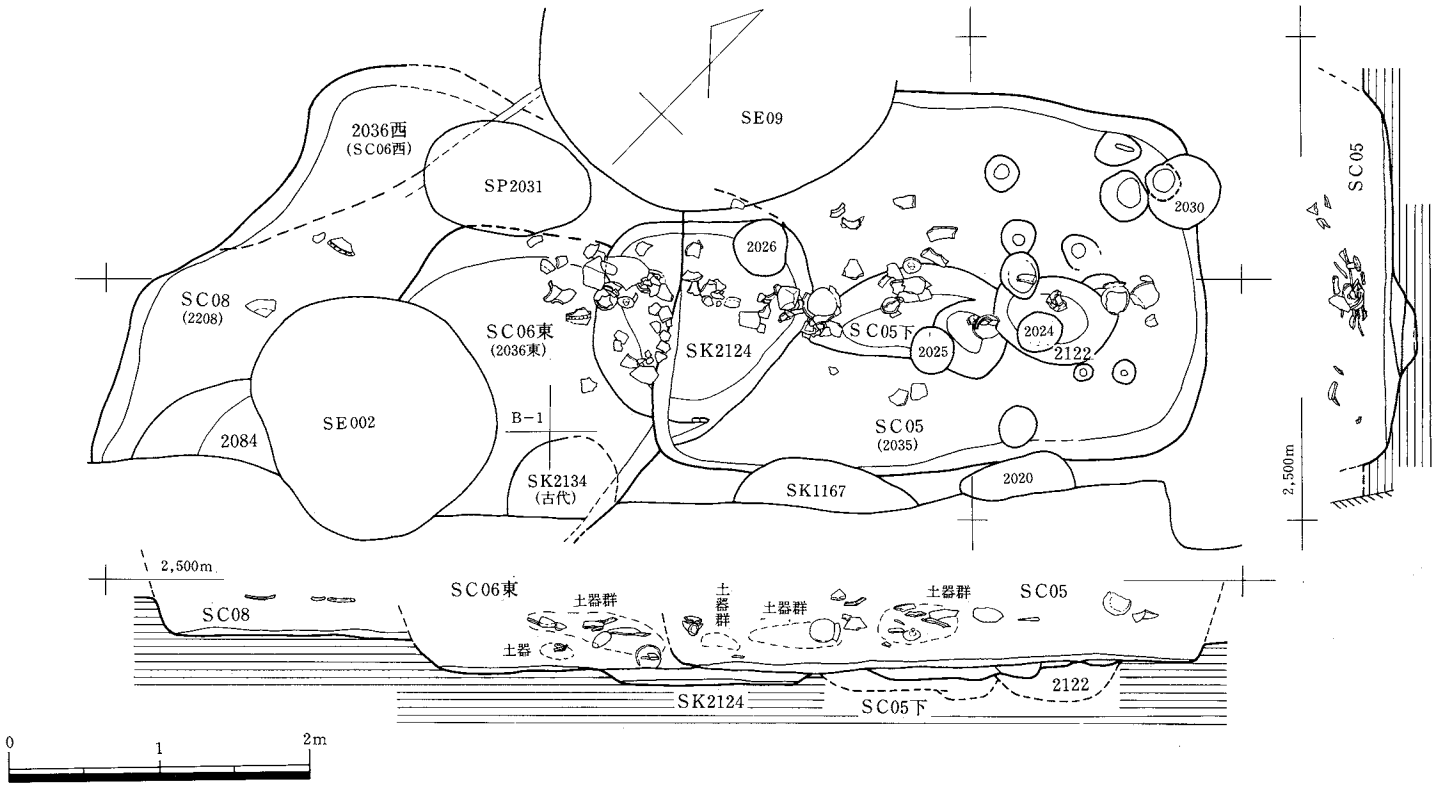


Fig. 39　ＳＣ05・06・08実測図（1/50）

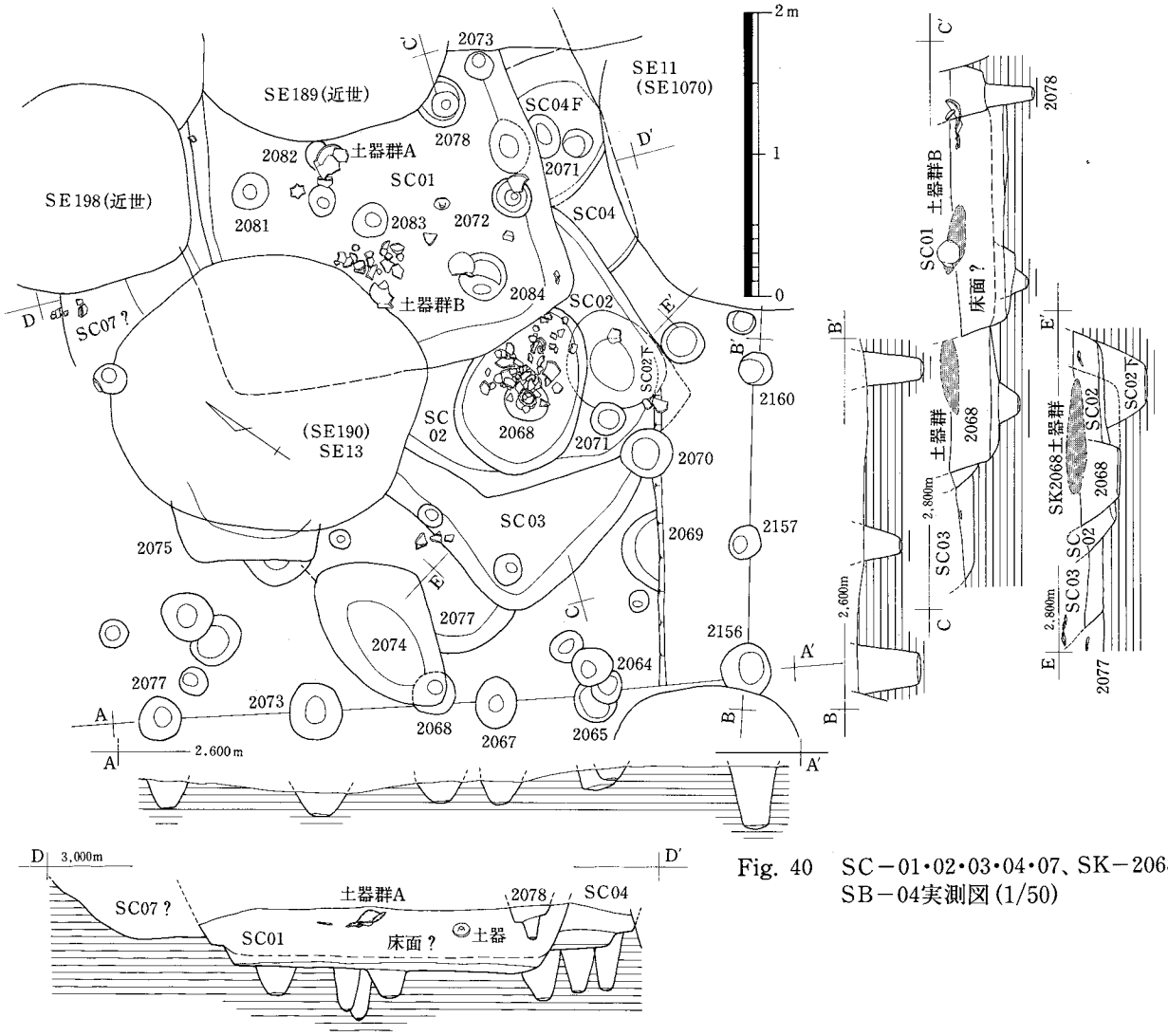


Fig. 40　SC－01・02・03・04・07、SK－2068、SB－04実測図(1/50)

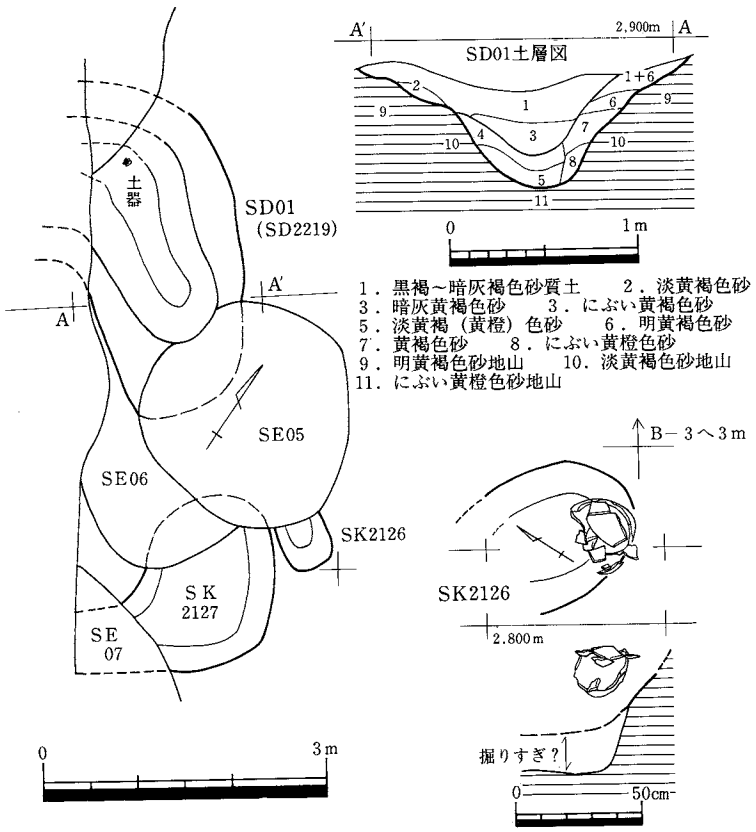


Fig. 41　SD－01(SD－2219)・SK(SD?)－2127実測図(1/80、1/40)、SK－2126実測図(1/30)

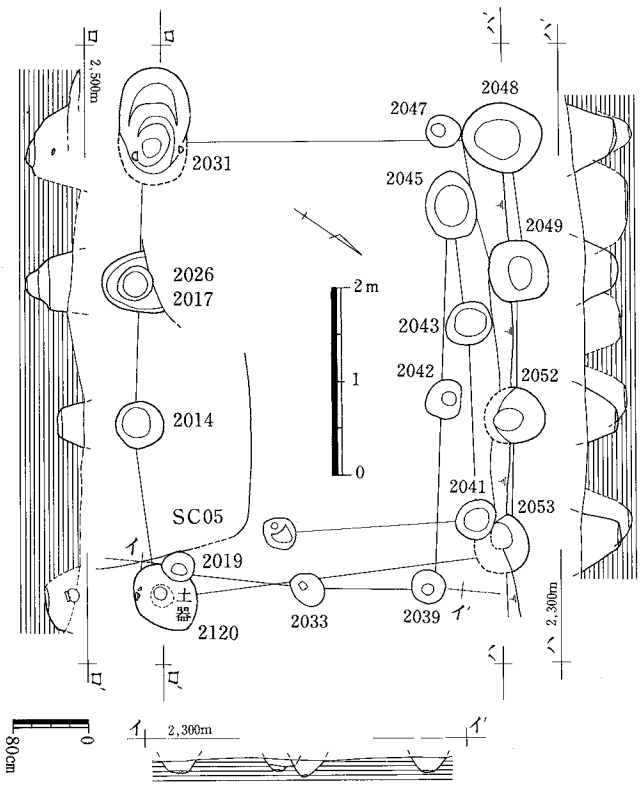


Fig. 42　SB－01・02・03実測図(1/80)

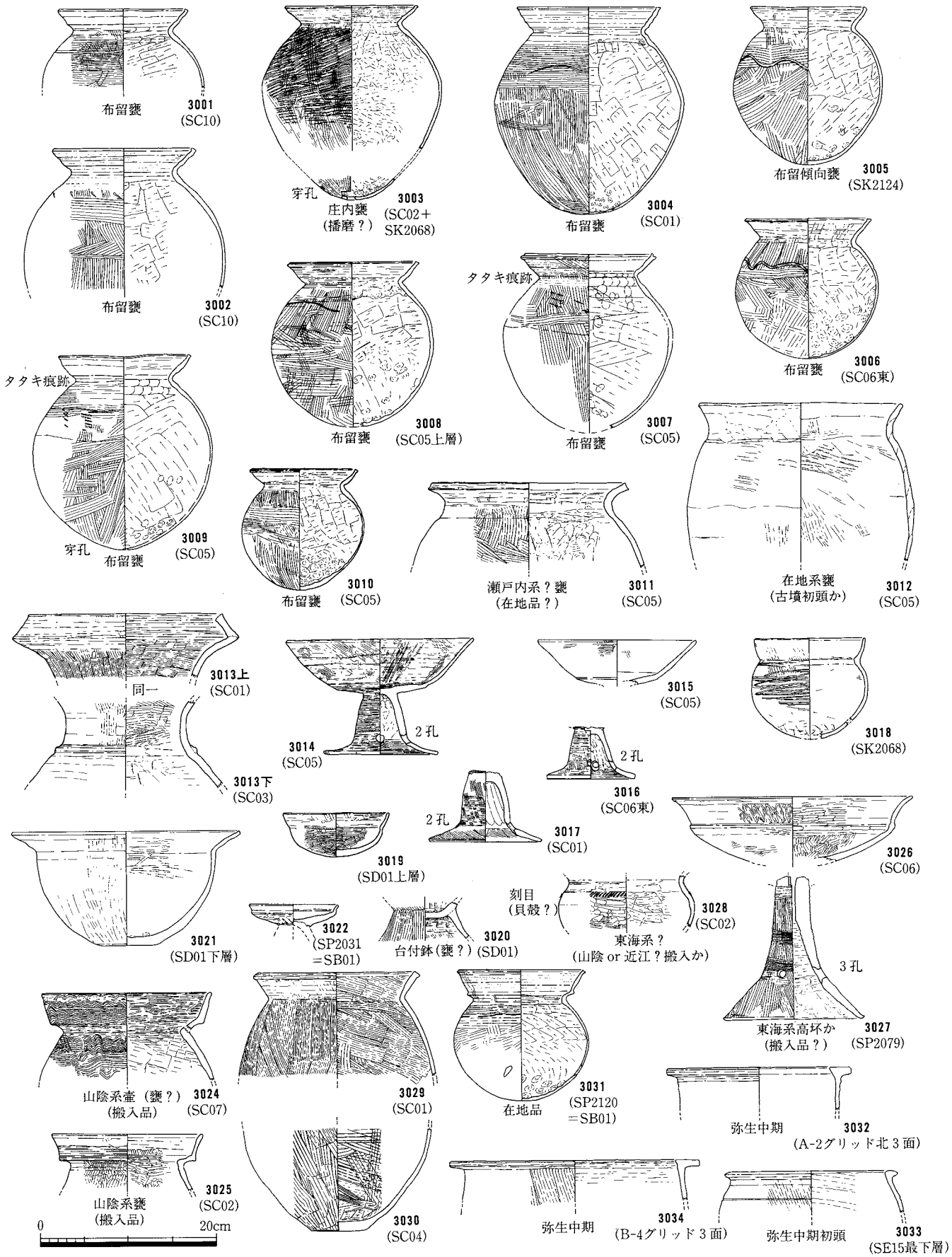


Fig. 43　弥生時代～古墳時代前期遺物実測図（S＝1/6）

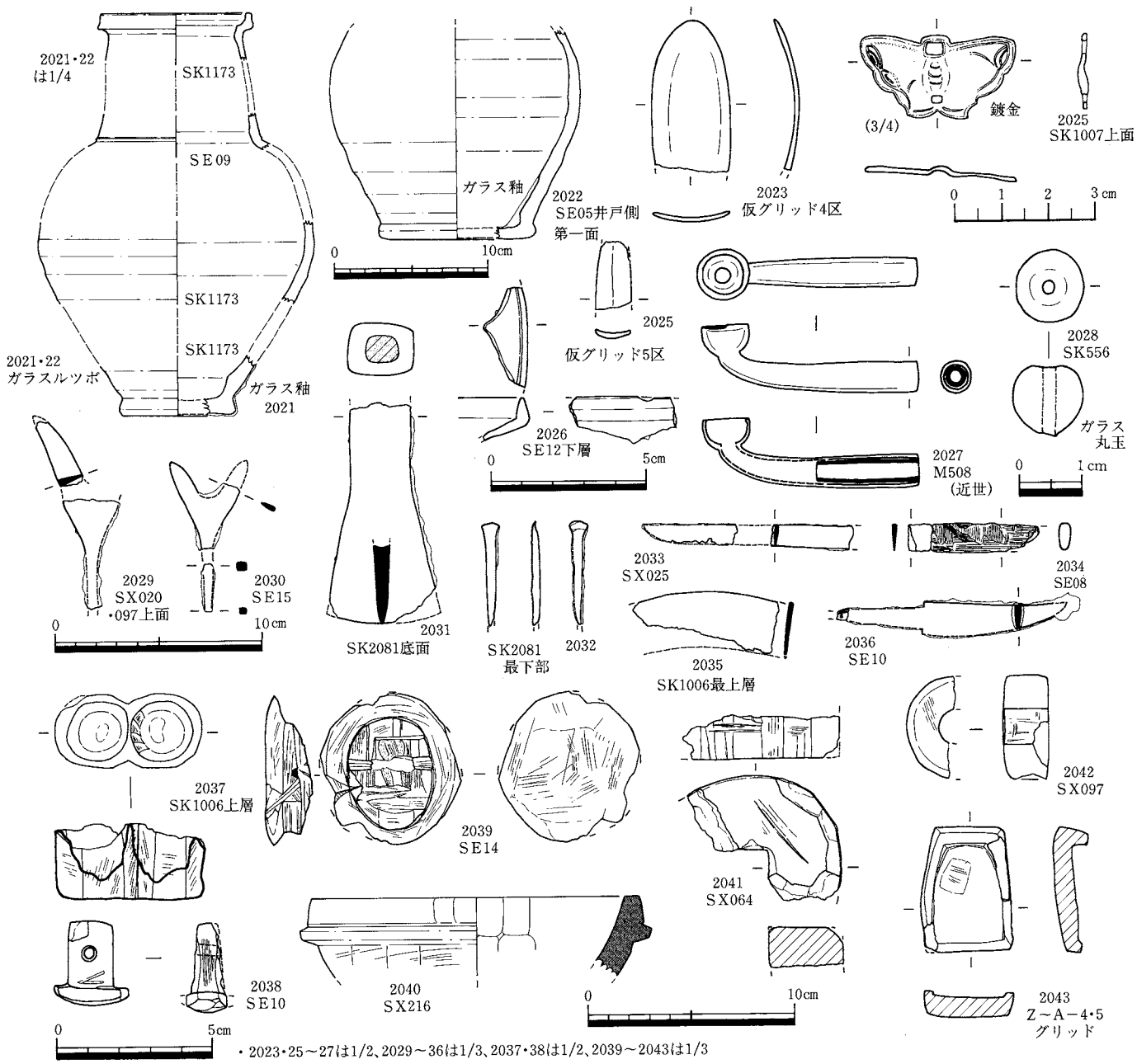
ＳＫ－1156は、数少ない明確な奈良時代の遺構の一つである(Fig. 37、ＰＬ．5－28)。Ｃ－0グリッド第2面で検出。大半が調査区外。ＳＫ－1216に切られる。上面径80cm 以上、深さ70cm の土坑。須恵器・土師器が一括して出土。Fig. 38－**479～487**は**ＳＫ－1156出土遺物**。**479～482**は**土師器の坏**。**479・480**は丁寧なヨコナデ仕上げ、外底に**墨書**。481は口縁部内面に油煙痕。482は丁寧なヨコミガキ。**483～487**は**須恵器**。**483・484**は**高台付の坏身**。**485**は**坏蓋**。**486・487**は**皿**。法量に幅がある。以上の須恵器はⅦ期中相か。ＳＫ－1156の年代は、土師器も考慮して8世紀中頃であろう。

Fig. 39－**488～502**は、**古墳後期～古代の遺物を抽出**したもの。**488～500**は**須恵器**。**488～492**は**6世紀後半～7世紀前半の坏身と蓋**。488・489はⅣ期、490～492はⅢＢ期に比定されよう。**500**は**6世紀後半頃の甕**。本調査地点では、古墳前期中頃以来この時期になりようやく遺構・遺物が認められる。また7世紀後半の遺物が少なく、博多遺跡群の全体的な調査結果と同様の状況である。**493～495・498**は**坏蓋**。**496・497**は**皿の蓋**。**499**は**高台付の坏身**。これらは**8世紀前葉～中頃**のもの。**493**は内面に、**498**はつまみ部に**墨書**がある。**501**は**畿内(都城)系の土師器皿**。内面に放射状の暗文。外底はケズリ。特徴的な口縁端部。7世紀末か。ただし出土遺構は12世紀末の溜桝状土坑(**ＳＫ－1167**)。**502**は**黒色土器Ａ類の椀**。深い体部と丁寧なミガキが特徴的。**畿内系**か。外面にススが付着する。**9世紀後半頃**。

6　弥生時代から古墳時代前期の遺構と遺物

第3面の淡黄橙色～浅黄色砂層の上面において、弥生後期から古墳前期の竪穴住居をはじめとする遺構群を検出した(Fig. 8)。遺構の覆土は、上面では暗灰褐色、下層では黄褐色のものが多い。調査区北半の一部では第2面で遺構を検出した。**竪穴住居**は、次の**3群**がある。Ａ－4グリッドの**ＳＣ10**、Ｂ－3グリッドの**ＳＣ01～04・07**(Fig. 40、ＰＬ．7－44)、Ａ・Ｂ－1グリッドの**ＳＣ05・06・08**(Fig. 39、ＰＬ．7－46)である。ＳＣ01・05・10は古墳前期前葉(布留式古相併行)、ＳＣ02・06東は古墳初頭(布留式最古)、ＳＣ03・04・06西・08は弥生後期後葉～終末。**ＳＣ10**は3.7×2.1ｍの長方形、布留形甕等を出土。**ＳＣ01**は南北2.6ｍ×東西2.5ｍ以上だが、推定東西に長い長方形で、**ＳＰ－2083が主柱穴**の一つか。最上層に土器が一括して出土(ＰＬ．7－47)。**ＳＫ－2068**はこれに切られ、最上層に土器を一括出土した1.2×0.85ｍの楕円形の土坑。ＳＣ02を切るが、ＳＣ02覆土中の土器片と接合するものがあり、時期的には同じ土器様式の範疇。**播磨産とみられる庄内甕**も出土(ＰＬ．8－66)。**ＳＣ02**は1.8×2.0ｍ以上の長方形。**ＳＣ03・04・07**および**2077号遺構**は、**弥生後期後葉～終末の竪穴住居**とみられるが、新しい住居や後世の遺構との重複で、規模・プランを明確にしえない。その時期の土器の多くも、ＳＣ01・02に混入して出土している。**ＳＣ05**は3.5×2.6ｍの長方形。床面からは浮いているが、下層に土器が一括して出土(ＰＬ．7－45)。**ＳＣ06東・06西**(2036号西遺構)・**08**は、土層観察のためのベルトＡを残したためもあり、平面的な関係が不明瞭になってしまった。**ＳＣ06東**はＳＣ05に切られるが、プランは不明確。古墳初頭の土器を一括して出土するも、より古い弥生後期後葉の土器が混在する。古相の土器群はＳＣ06西に帰属するか。ＳＣ05にも古相の土器が混入する(ＰＬ．9－75・77等)。下層に凹み**ＳＫ－2124**があり、布留式最古相の土器を出土(ＰＬ．7－48)。**ＳＣ08**は、在地系の大形壷の口縁部などを出土し、弥生終末か。3.0ｍ以上×2.0ｍ以上の長方形か。古墳前期の遺構では、**掘立柱建物**が3棟復元される。**ＳＢ01**(Fig. 42)はＳＣ05を切る。1×3間、4.0×5.2ｍの規模。**65次調査**で同様の建物が検出されている。柱穴から山陰系甕や小型器台を出土。**ＳＢ02・03**も同様で、建替えであろう。古墳前期前葉～中頃。**ＳＢ04**は、4×2間以上、4.2×2.2ｍ以上の建物で、Ｂ－3グリッドで検出(Fig. 40)。弥生終末か。**ＳＰ－2079**は建物の一部の可能性があるが、**東海地方の山中式系の高**

坏脚部を出土した（ＰＬ．９－76)。以上のうち、古墳前期の遺構は竪穴住居・掘立柱建物ともに全て類似した方位(Ｎ－55°－Ｅ前後)であることが注意される。ＳＤ01はＺ・Ａ－3グリッドで検出した溝(Fig.41、ＰＬ.7－49･50)。延長３ｍ確認、上面幅1.8ｍ、深さ70cmを測る。弥生後期後葉の土器を出土するが（ＰＬ．８－63)、一部古墳初頭を含む。溝は調査区外では西に屈曲するらしい。ＳＫ－2127は古墳初頭の不整形土坑。ＳＥ07に切られるが、溝状に西へ続きＳＤ01と対をなす可能性もある。方形周溝墓かもしれない。ＳＫ－2126は、単独で古墳初頭の布留形甕を出土した小土坑(Fig.41右下)。小児用の甕棺か。以上の遺構群出土のうち、古墳初頭から前期の土器群は、畿内系を主とする外来系土器で占められるが、その細かい諸特徴から大部分は北部九州で製作されたものである。布留形甕について見ると、精巧に薄く作られたものと、やや粗野な作りで若干厚いもの、前者でも複数系統が同時に出土し、複数の供給元が考えられる。また、布留形甕の肩部施文には回転的な波状文・沈線文・櫛描平行文や列点文などがあり、畿内や山陰との関係が濃厚である(ＰＬ.67～74)。直口壷の一部にも同様の施文がある(ＰＬ.64)。高坏は形状は異なるが、製作技法は畿内と同様である（ＰＬ.81)。こ



・2023･25～27は1/2、2029～36は1/3、2037･38は1/2、2039～2043は1/3

Fig. 44　その他の出土遺物(1)（ガラス坩堝・銅製品・鉄製品・石製品・玉）(3/4、1/2、1/3、1/4)

2023～2027 銅製品、2029～2036 鉄製品、2037～2043 石製品

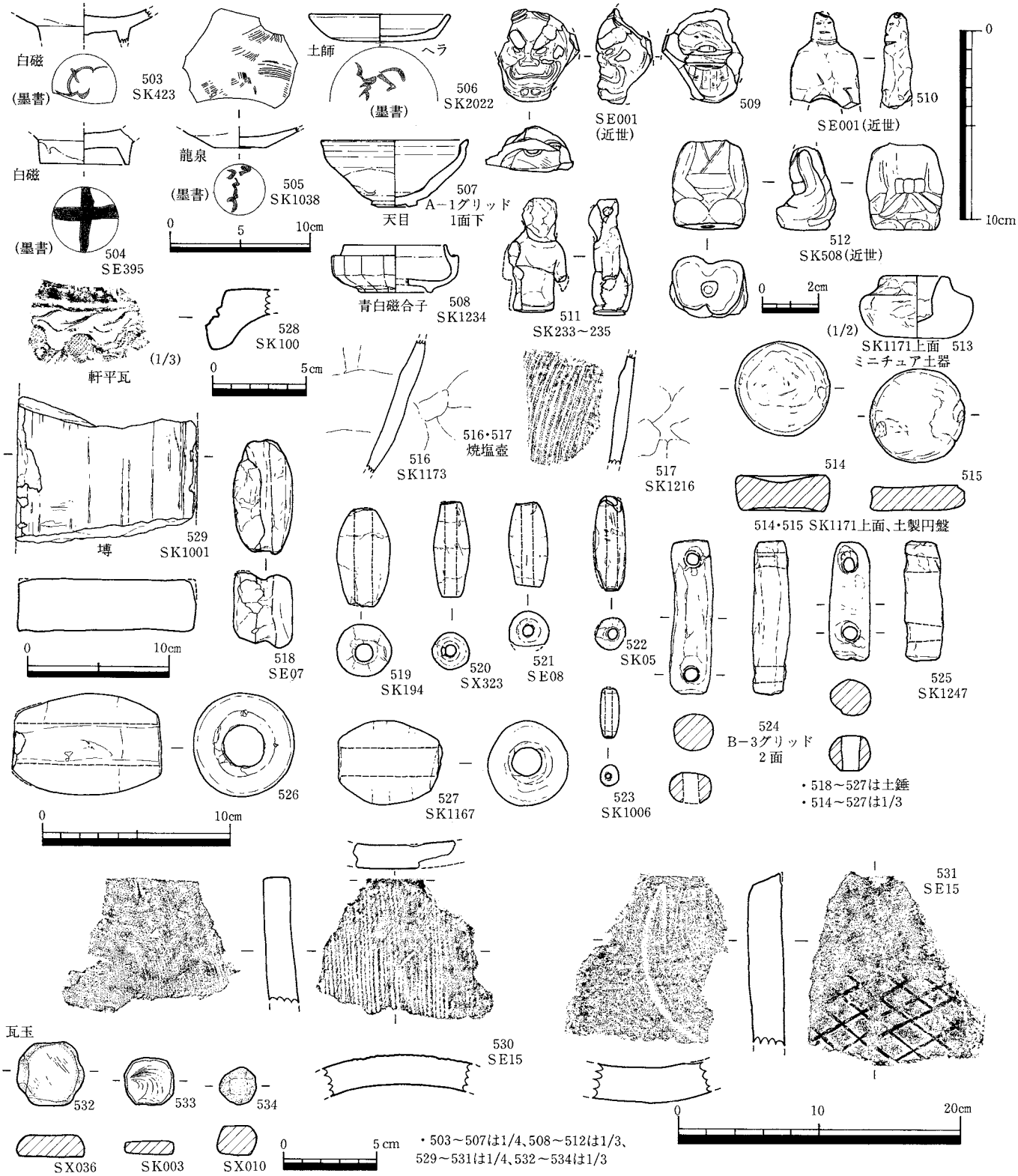


Fig. 45　その他の出土遺物(2)（土器・陶磁器・土製品・瓦）(1/2、1/3、1/4)

うした様相は、北部九州の畿内系土器受容における博多遺跡群の重要性を示すと言えよう。また今回の調査では、弥生後期後葉から終末の土器群に、東海系、山陰系等の各地からの搬入品（？）が多く含まれることが注意される(ＰＬ.76･78〜80)。さらに瀬戸内(北四国？)系とみられる甕もある(Fig.43−3011)。なお今回は、終末新相段階の土器の出土は少なかった。Fig. 43には、出土土器群の一部を図示した。本報告では、弥生時代から古墳前期の遺物について、紙面と時間の制約もあり、その一部しか報告できなかった。今後、機会を設けて報告の責を果たしたいと思う。

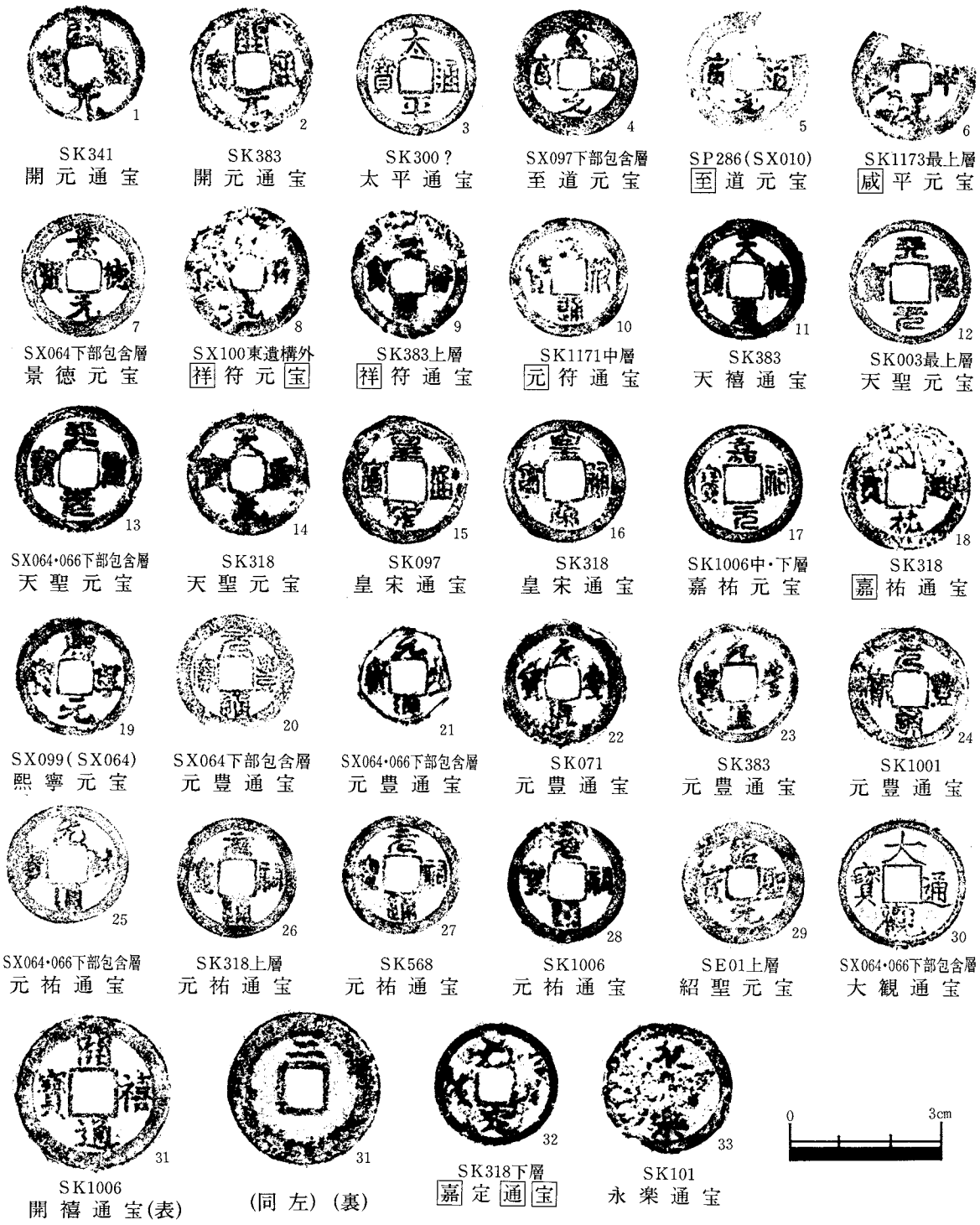


Fig. 46　　出土銅銭拓本(4／5)

Ⅳ　おわりに

Fig. 44・45にはここまで紹介できなかった特殊遺物、銅製品・鉄製品・石製品、墨書土器、陶磁器、土製品、瓦などを図示した（ＰＬ．８－60～62も参照)。若干説明を加えると、 2025は鍍金銅製の蝶形飾金具、2029・30は雁股の鉄鏃、2031 は鉄斧、2032 は耳かき状鉄製品、2035は鉄鎌、2040はミニチュアの石鍋、509 は型作り、528 は押圧文瓦、532・534 は瓦質、533 は土師質である。Fig. 46 には出土銅銭のうち遺存良好なものを紹介する。時間が無く、粗雑な報告となってしまった。お許し願いたい。

博多遺跡群第97次調査出土の動物遺体

鹿児島大学獣医学科解剖学教室
西中川　駿

1. はじめに

中世の遺跡からの動物遺体の報告は、全国各地で報告され、特に鎌倉市を中心に金子らにより詳細に報告されている。九州の中世の遺跡からの出土例は、縄文時代に比べて非常に少なく、殆どがウシ、ウマの出土例が中心である。福岡市でも博多33次、37次や立花寺B遺跡など近年数多くの遺跡から報告なされつつある。

博多遺跡第97次調査地点は、福岡市博多区冷泉町にあり、平成8年4～7月に福岡市教育委員会が共同住宅建設に先立ち発掘調査を行い、11世紀から14世紀の人工遺物が検出され、動物遺体はこれらに伴って出土したものである。遺体は非常に保存状態が悪く、また、細骨片のために同定不能なものも少なくない。ここでは同定可能な資料のみについて、その概要を報告する。

2. 出土遺体の概要

出土した歯や骨は完形のものはなく、殆どが小片で総重量は537.1gであり、それらはイノシシ(21.7g)、シカ(199.3g)、ウシ(92.4g)、ウマ(31.4g)、クジラ(89.4g)およびイルカ(40.1g)であり、魚類の前歯骨片が1点(1.6g)みられる。なお、細骨片のため動物種を同定出来なかったものが61.2gである。

イノシシ(写真1～4参照)は、上顎第三後臼歯(左側、出土遺構不明、出土番号R 581. 以下同様に記す)、第三中手骨(左、SK－556下層一括)、大腿骨(右、SK－556上層)、脛骨(右、2面一括)、踵骨(右　SK－1173)などが出土しており、第三後臼歯の歯冠長と幅は33.7×19.1mmで現生のイノシシのものとほぼ同じ大きさである。他の資料は計測不可能である。

シカ(写真5～8参照)

角突起を有する頭蓋骨(左、右SK－556下層、R 777)、左右の臼歯を有する下顎骨(SK－556下層、R 775、776)、上顎臼歯片6個、切歯片1個(いずれもSK－556下層一括)、第七頚椎および頚椎片3個(SK－556、R 781)、橈骨(右、SK－556、R 790)、第四指基節骨(左、2面一括)などが出土している。

ウシ(写真9、10参照)は大腿骨、脛骨などの小片(右、SK－556下層、R 783)、膝蓋骨(右、SK－556、R 783)、臼歯片(SK－100)などが検出されているが、すべて計測不可能な資料のみである。

ウマ(写真11、12参照)は、上顎切歯(左、SE 10(079)井戸側内)および上顎第一後臼歯(左、A－1グリッド)で、この後臼歯の歯冠長、幅および中心高は、22.8×23.4×63.0(mm)であり、これらの計測値から筆者らの方法で年齢、体高を推定すると、4才で127.9cmとなる。

クジラ(写真13上)は、SK－1171上層(R 1051)、SK－003から出土しており、いずれも椎骨片である。イルカ(写真13下)はSK－520(R 623)、SX－010、SK－041から検出されており、いずれも椎骨片である。

3. 考察とまとめ

中世の遺跡からは全国的にウマやウシの出土が多く、また、鎌倉市の遺跡からは、イルカなどの出土も多いという（金子）。本調査地点は11世紀から14世紀の資料であるが、シカとイノシシの出土が多く、ウシ、ウマは極めて少ない。しかし、ウシ、ウマがこの地で飼育されていたことは事実で、特にウマは臼歯の計測値から127.9cmと推定され、これは現生の御崎馬とほぼ同じ中型馬に属することがわかる。一方、シカの頭蓋がそろって出土しており、特に角根の部位には、刀傷がみられ（写真5、6）、角を加工品として利用していたことが想像される。また、クジラ、イルカについては、推骨のみであることから、食料として利用していたことが考えられる。

参考文献

1．林田重幸：日本在来馬に関する研究、P 109 ～ 120、日本中央競馬会、東京（1978）

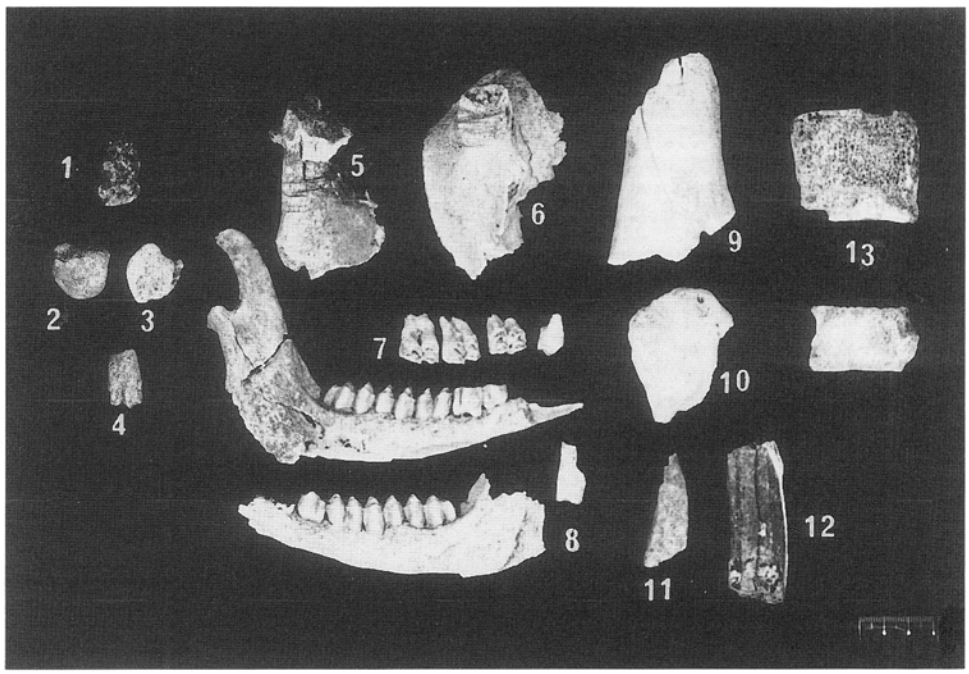
2．福岡市教育委員会：博多11、P 35 ～ 38、(1988)

3．　〃　　〃　　：博多16、P 173 ～ 176（1991）

4．金子浩昌：中世の遺跡における動物遺体―鎌倉市内の遺跡例を中心として―鎌木義昌先生古希記念論文集、P 407 ～ 435（1988）

5．北九州市教文化事業団：石田遺跡、P 151 ～ 154、(1990)

6．西中川　駿他：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究、文部省科学研究成果報告書、P 1 ～ 95（1991）



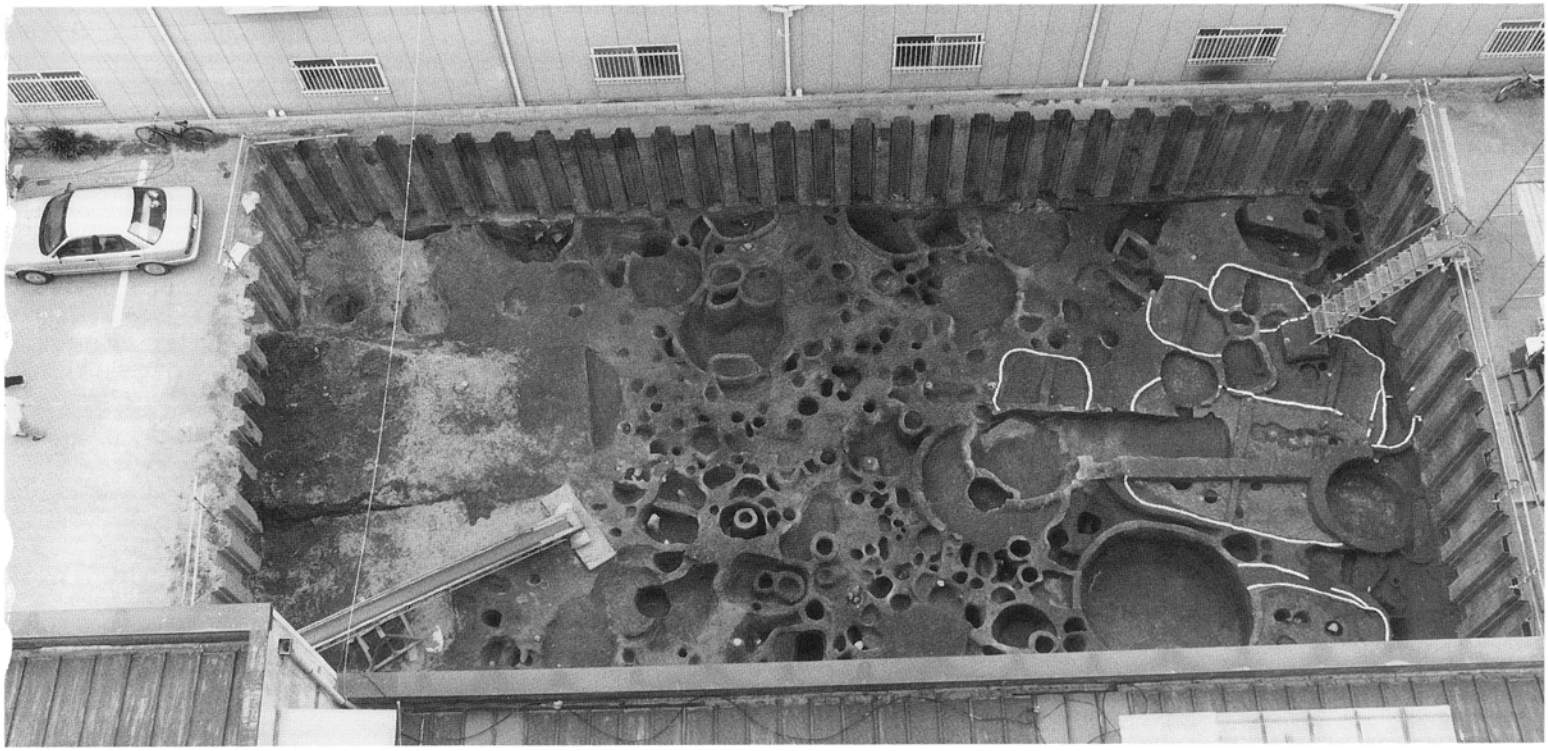
写真の説明

1～4：イノシシ　5～8：シカ　9．10：ウシ

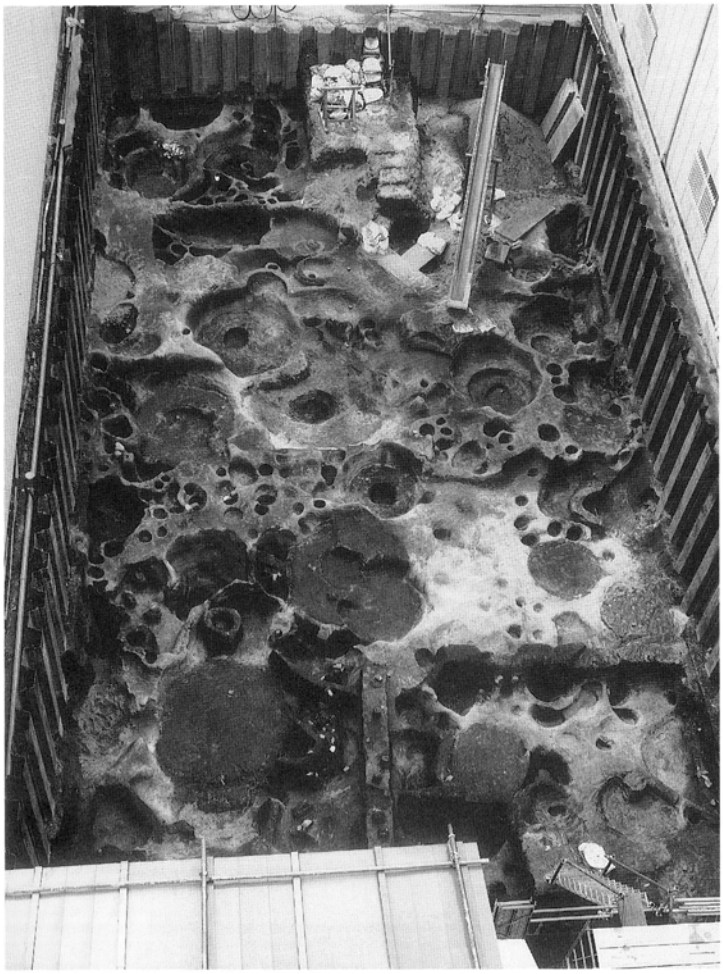
11、12：ウマ、13上：クジラ　13下：イルカ

L：左側　　R：右側

1．上顎第三後臼歯（L、R 581）、2．大腿骨（R、SK－556上層）、3．脛骨（R、2面一括）、4．第二中手骨（L、SK－556下層一括）、5．頭蓋骨（L、SK－556（R 778）、刀傷）、6．頭蓋骨（R、SK－556（R 777）、刀傷あり）、7．上顎臼歯（左M^1～M^3、P^4、SK－556下層一括）、8．9．下顎骨（左、右、SK－556（R 776、775））、9．大腿骨（R、SK－556（R 783））、10．膝蓋骨（R、SK－556（R 783）、11．第三切歯（上顎L、SE 01（079））、12．第三後歯（上顎L、A－1グリッド）．13上：椎骨（SK－1171上層（R 1051））、13下：椎骨SK－520（SK－520（R 623））

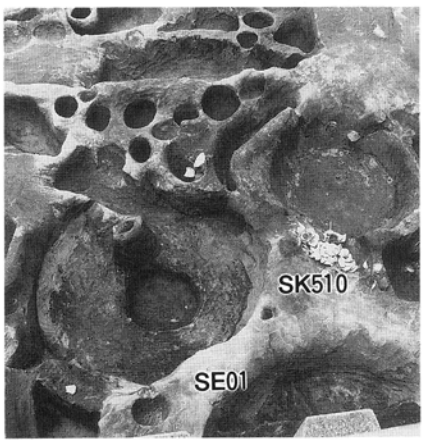


1. 第１面全景（西から）



2. 第２面全景（南から）

3. Ａ－４・Ａ－５グリッド南北土層（西から）

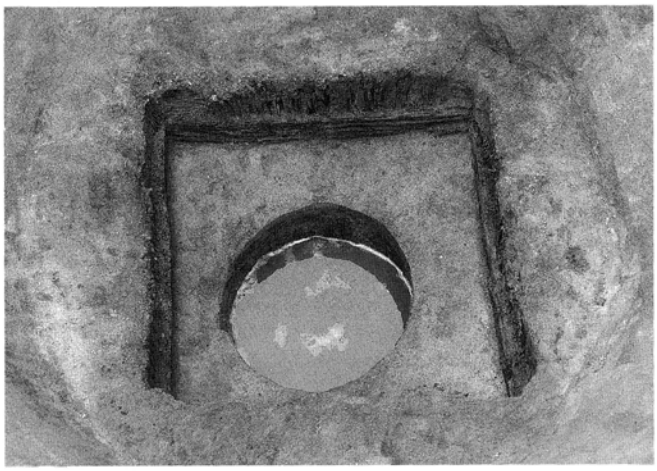


4. Ａ－４・Ａ－５グリッド第１面（北から）

5. SE01（SE－512）出土状況（北から）

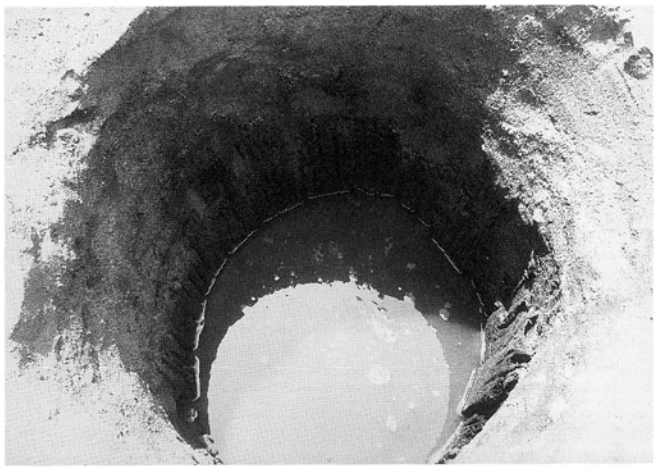
6. SE15（SE－431）出土状況（北から）

7. SE05（SE－1030）出土状況（西から）



8. SE05（SE－1030）井戸枠（西から）

9. SE13（SE－190）出土状況（東から）



10. SE13（SE－190）井戸枠（東から）

11. SE12（SE－103）出土状況（北から）

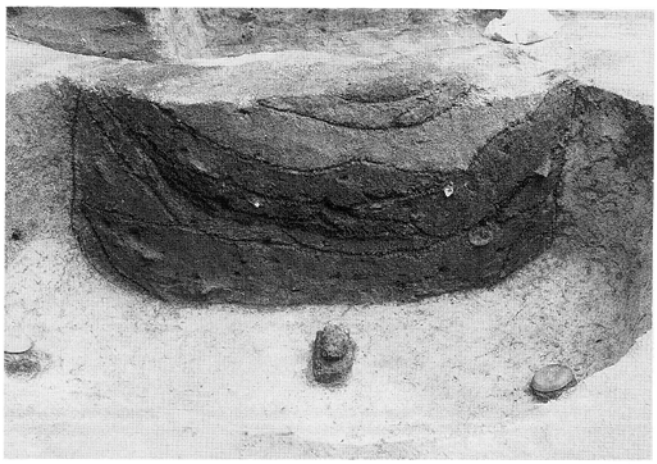
12. SE08（SE－1137）出土状況（北から）

13. SE11（SE－1070）土層（西から）

14. SK－510・513 白磁一括出土状況（西から）

15. SK－2081 最下層遺物出土状況（南から）

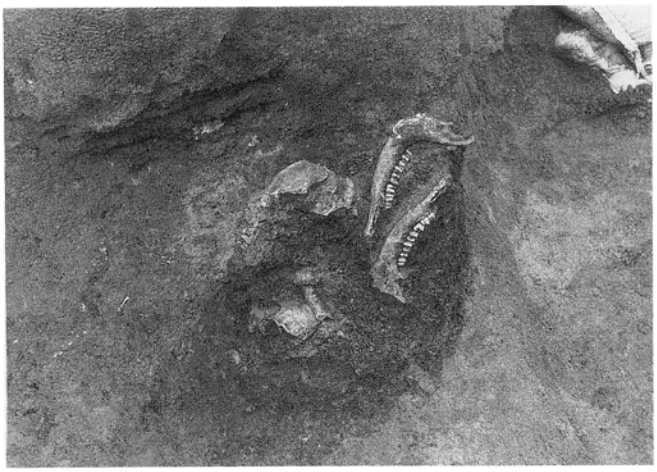
17. SK－1173 下層石敷遺物出土状況（西から）



16. SK－2081 土層（東から）

18. SK－472 土層・断面状況（西から）

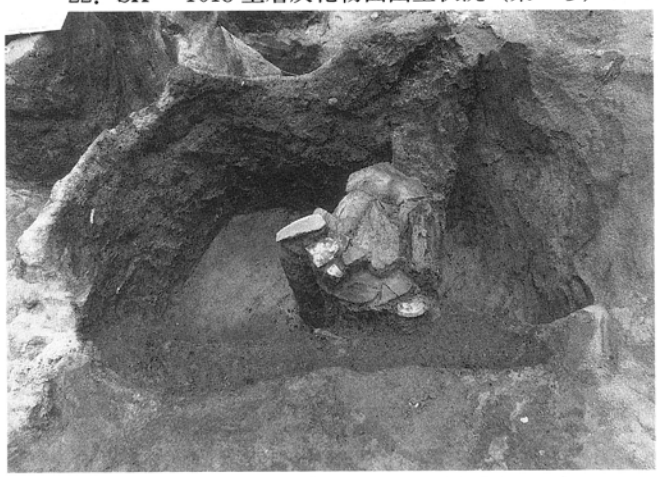
19. SK－472 土壙墓出土状況（北から）



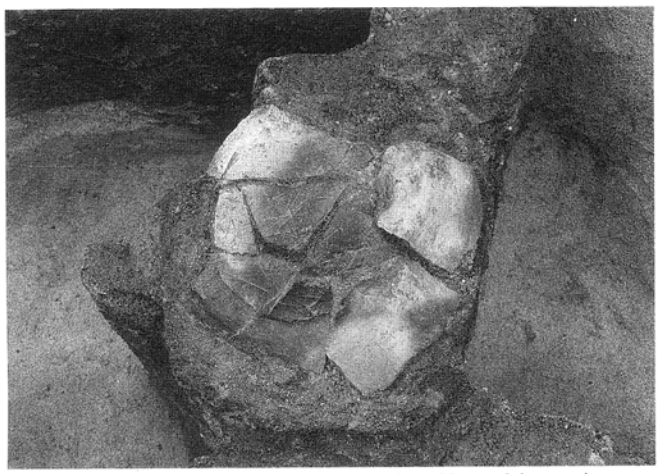
20. SK－556 獣骨出土状況（東から）

21. A－1 グリッド周辺第 2 面（南から）
※手前　左の溝は SD－1003、右寄りの南北ベルトは SX－064 のシルト床面を残した状況

22. SK－1015 上層炭化物面出土状況（東から）



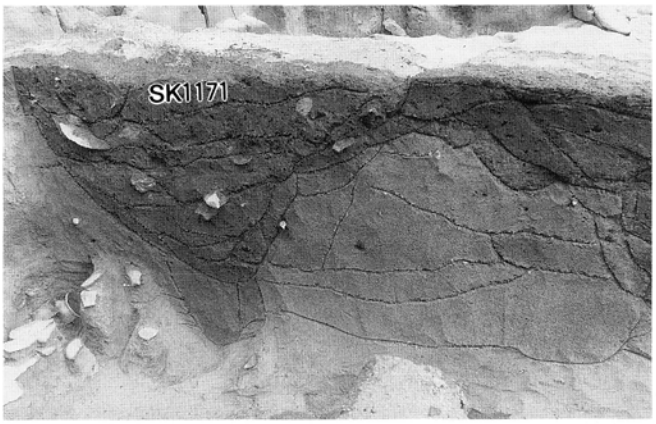
23. SK－1015 中層遺物出土状況（東から）



24. SK－1015 鍋形土器底部出土状況（東から）

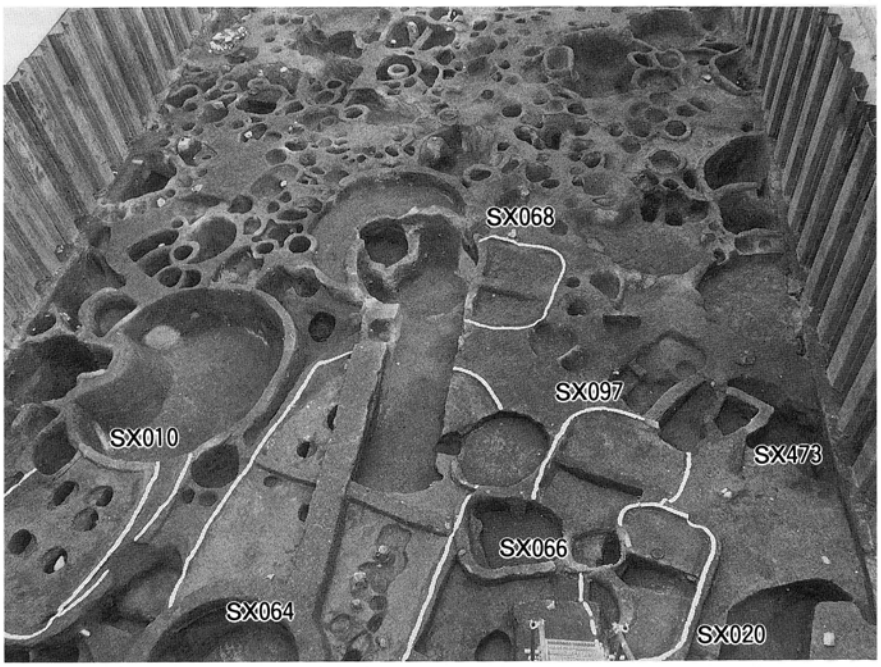
25. SK－318 土層（上面は SX－025）（西から）

26. SK－1006 上層遺物出土状況（西から）



27. ベルトA中央東側土層状況（SK－1171土層）

28. SK－1156上層遺物出土状況（北から）

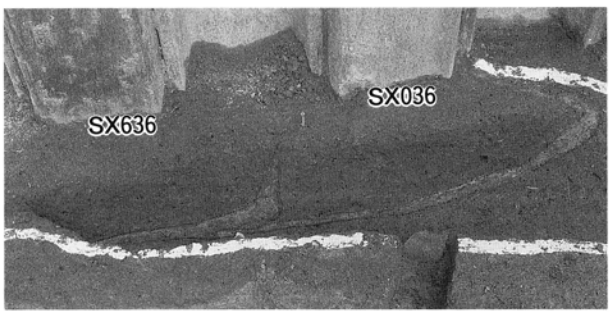


30. 銅製品鋳造遺構群全景（白線）（南から）

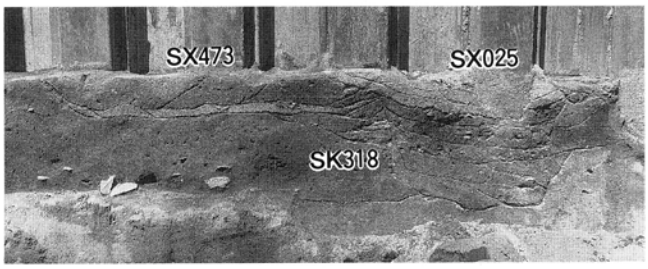
29. SD－1003出土状況（東から）

31. SX－010(新)・038(古) 出土状況(南から)

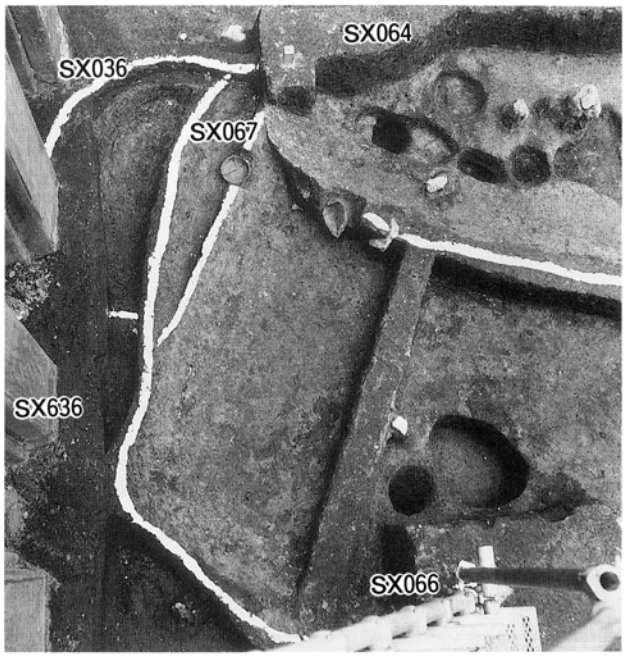
32. SX－010取瓶出土状況（西から）



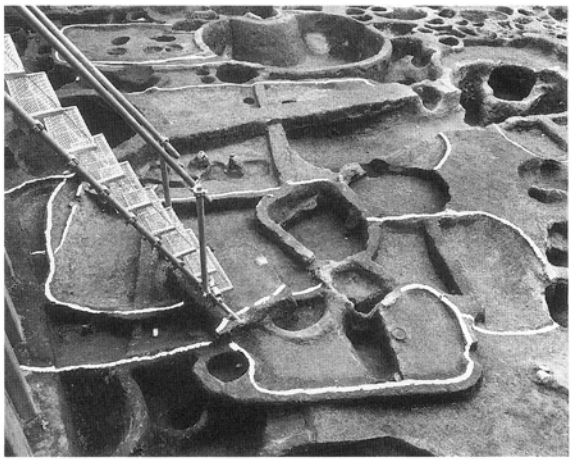
33. SX－036・636調査区南壁土層



34. SX－025・473、SK－318調査区東壁土層

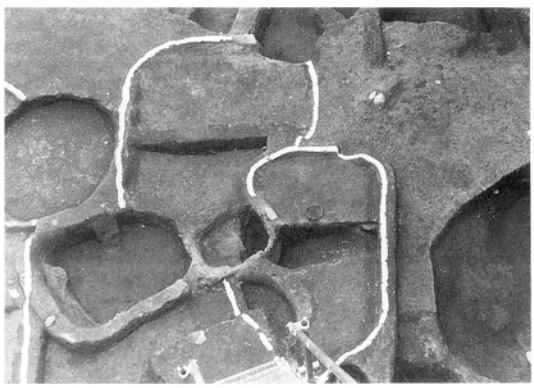


35. SX－064・066・067・636・036 切合状況（東から）

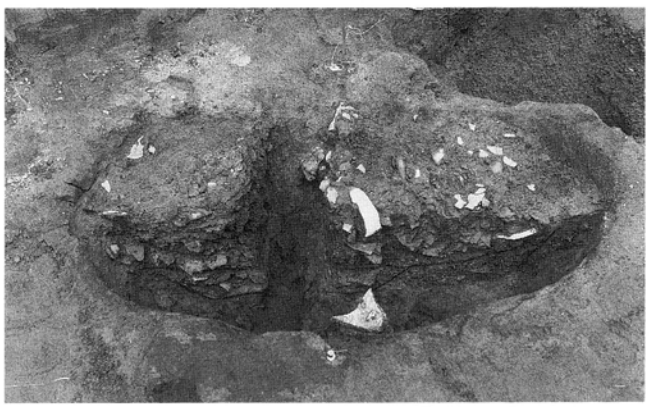


36. 銅製品鋳造遺構群切合状況（東から）

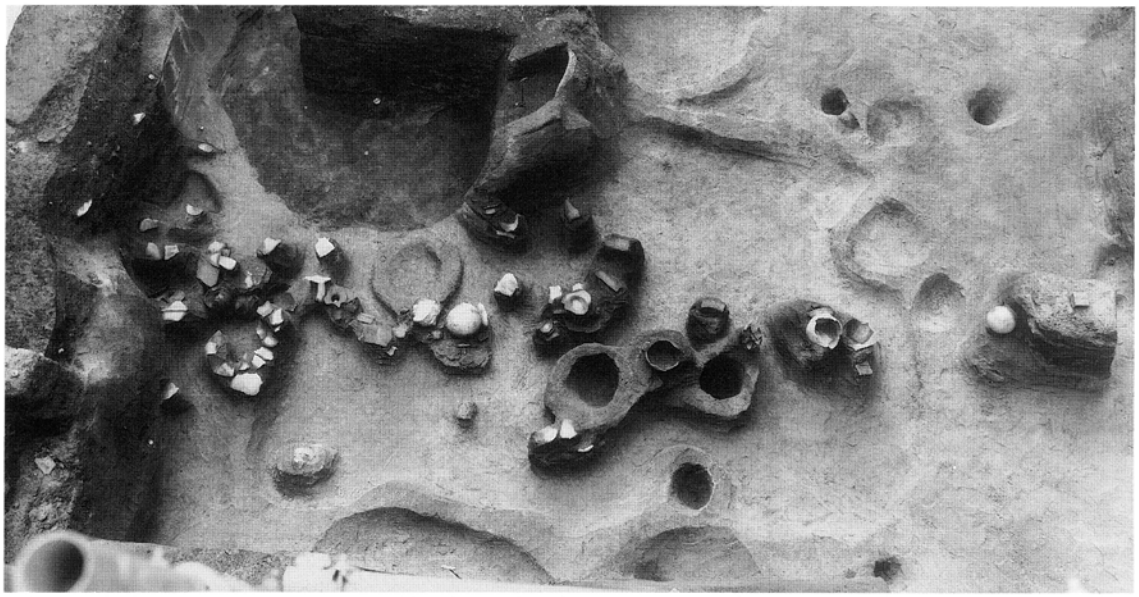
37. SX－097 出土状況（北から）



38. SX－020(新)・097(古)・473(古)(南から)

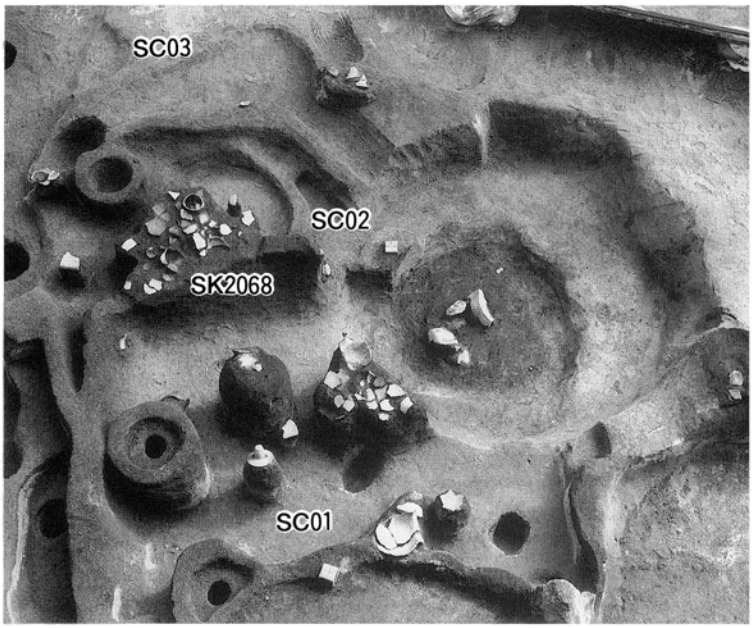


39～43. SX－216 礫敷上面（39）・礫敷中層（40）・礫敷下層（41）・下層土坑土層状況（42）・土坑遺物出土状況（43）（39－西から、40～43－東から）

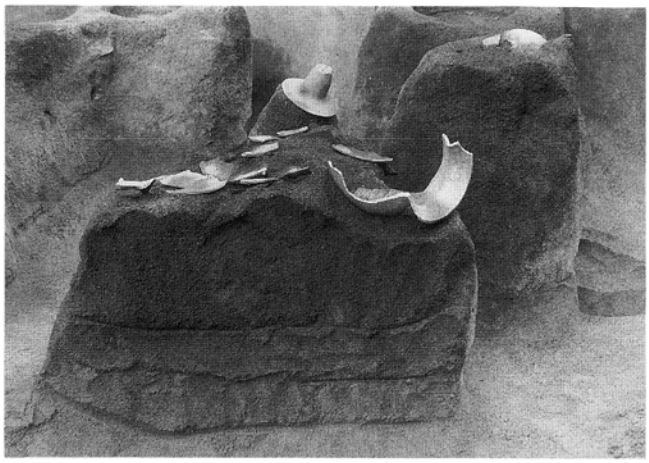


44. SC05（中央）・SC06 東（左）出土状況全景（南から）

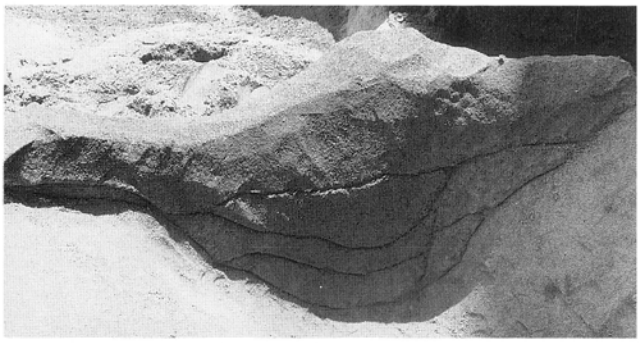
45. SC05 西半土器出土状況（南から）



46. SC01・02・03、SK－2068　土器出土状況（東から）
※中央の円形は SE－190

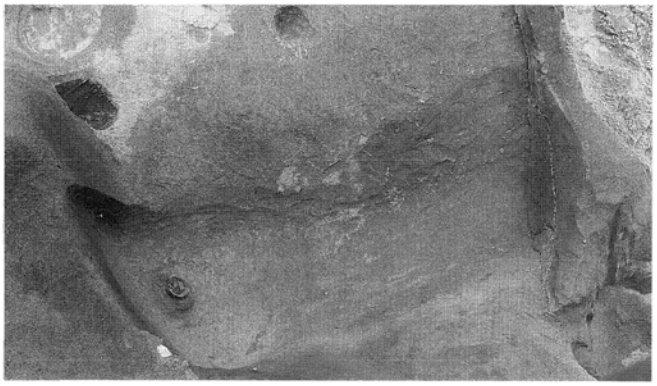


47. SC01 中央土器出土状況（西から）



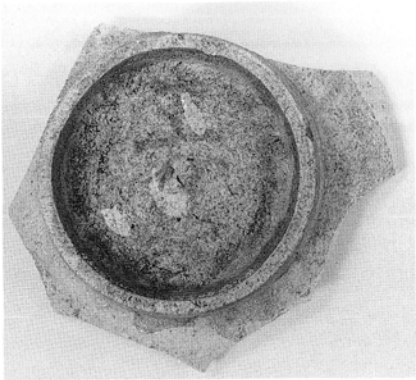
49. SD01（SD－2219）土層（北から）

48. SK－2124（SC－06 東下層）出土状況（東から）



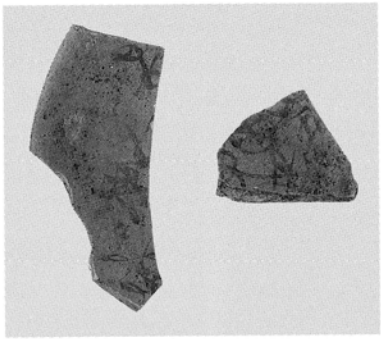
50. SD01 出土状況（西から）

51. SB01 柱穴北列出土状況（東から）

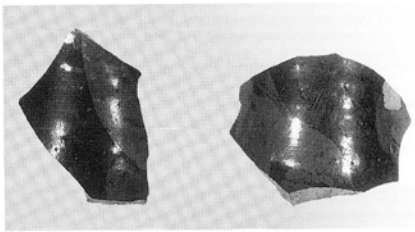


52. SK－508(SK－510 か)
出土墨書土器（白磁）

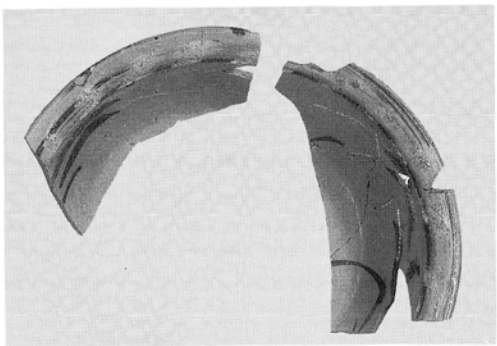
54. A－1グリッド第1面下部出土天目（左）・SK－1013 出土天目（右）



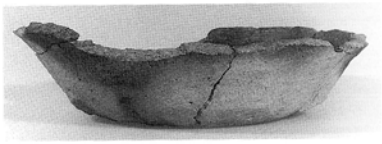
53. SK－2081　出土墨書土器
（土師器坏）

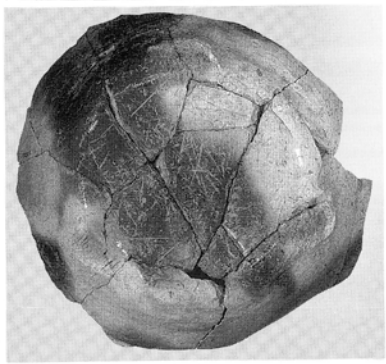


55. SE09 出土河南天目



56. SK－1173　出土黄釉鉄絵盤

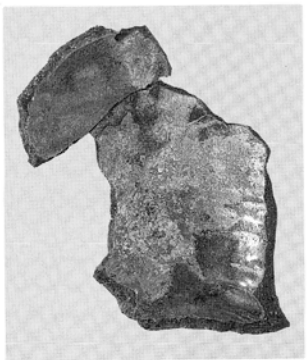




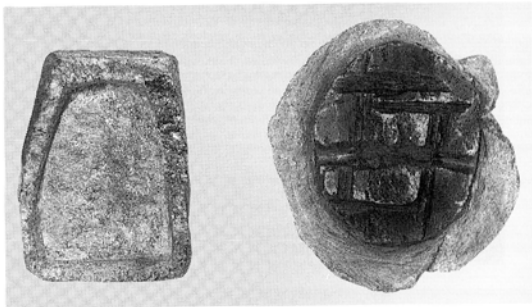
58. SK－1015　出土鍋形？土器
（三足付）

57. SK－1171　上層出土
施釉陶器

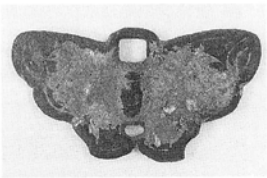
59. SE05
出土移動
式かまど



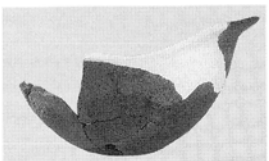
60. SE05 上 層（第1面）
出土ガラス坩堝



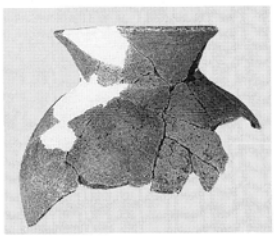
61. A－4～5グリッド出土ミニチュア滑石製硯（左）・SE14 出土コテ状滑石製品（右）



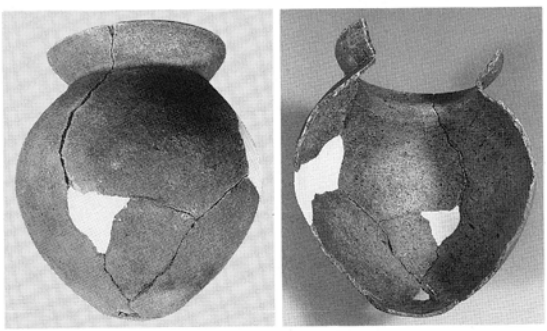
62. A－1グリッド第
1面下部出土蝶形鍍
金銅製飾金具



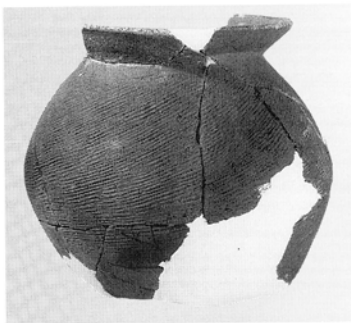
63. SD01出土鉢形土器
（弥生後期後葉）



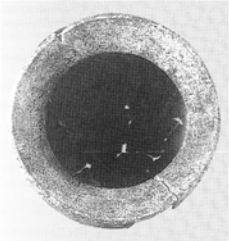
64. SC01 出土畿内系直
口壺（古墳初頭）

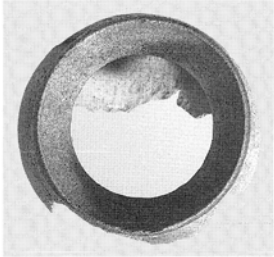


65. SC01 出土布留形甕（古墳前期前葉）

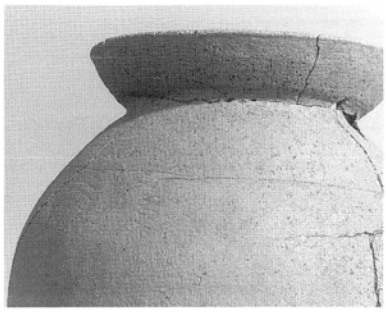


66. SK－2068　出土庄内形
甕（古墳初頭）





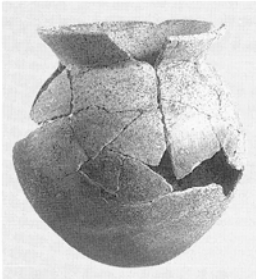
69. SC05 出土布留形甕（古墳前期前葉）



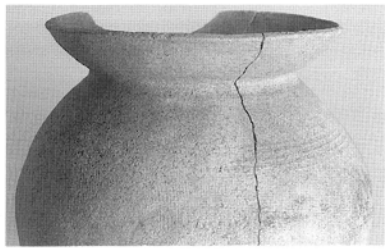
71. SC05 出土布留形甕の外面上半調整（1）

67. SC06 東出土布留形甕（古墳初頭）

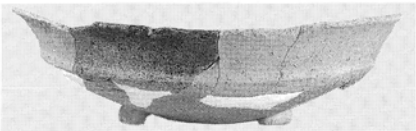
68. SC05 出土布留形甕（古墳前期前葉）



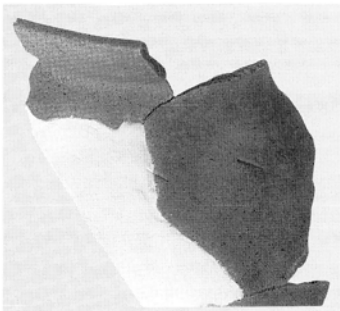
70. SK－2124 出土布留傾向形甕（古墳初頭）



72. SC05 出土布留形甕の外面上半調整（2）



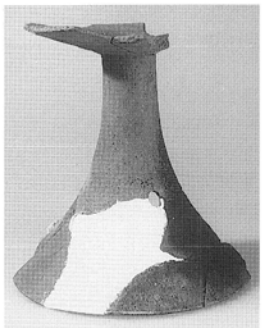
75. SC05 出土高坏（弥生後期後葉）



73. SC10 出土布留形甕の雨粒形列点文

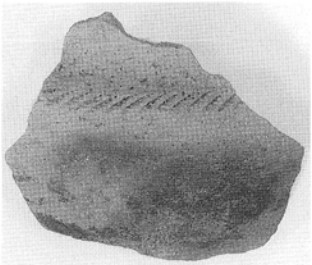
74. SC05 出土布留形甕の米粒形列点文

76. SP－2079出土東海系？高坏（弥生後期後葉）

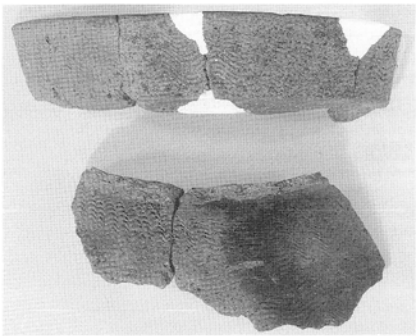


77. SC05 出土在来系高坏（弥生後期後葉）

78. SC02 出土山陰系甕（弥生終末）



79. SC02 出土東海系？鉢（弥生後期後葉）



80. SC07 出土山陰系？壷または甕（弥生後期後葉）

81. SC01 出土高坏脚部頂部刻目（古墳初頭）

博多 63

— 博多遺跡群第 97 次調査の概要 —

1998 年（平成 10 年）3 月 31 日

発 行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印 刷　川本印刷株式会社

福岡市博多区博多駅南 5－6－18